講釋、うなぎすつぽん、どじやう汁、呉服みせやら、小間物店やら、見るに目の毒、かぐに鼻の毒、これでは脂がたまる筈じや。官刻の孝義錄を拜見するに、忠孝の人は、とかく遠國邊鄙に多い。これは是、人交がすくなく、見るに目の毒がないに依つてじや。人間一生五十年、附合するは、二ヶ村歟、三ヶ村じや。ある人の狂歌に、

ほとゝぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里

またある人の發句に、

醫者どのの不自由な里に賀ふるまひ

これらで御推量なされませ。かた田舍に育つ人は、自然と心のよごれが少い。すべて人にかぎらず、道具衣類家居まで、手數が入れば、よごれるは知れた事でございます。かるがゆゑに、道ををさむる致によらねばならぬ。扨此をしへを、たとへておはなし申しませう。脂がつまると、こより歟藥すべで、掃除せにやならぬ。掃除はよけれど、うろたへると藥すべが折れこんだり、こよりがちぎれたりする。脂のつまつたは、あたゝめると、通る事があるけれど、小よりや、藥すべの折れこんだのは、溫めても茶を通しても、中々通らぬ。やいてしまはにや埒があかぬ。これでようお考へなされませ。掃除道具の、學文はよけれど、わるうすると、學文がをれこんで、お醫者さまにも成らず、先生にもならず、又御出家にもならず、親の仕にせの商賣がいやになり、めつたに鼻がたかう成つて、つかへてお辭儀が出來ぬやうになりまする。これが掃除道具のをれこんだのじや。こんなきせるは燒ねば直らぬ。甚怖い恐ろしい事でございます。御用心なされませ。是畢竟學問のはじめ、心むけのくひ違ひで、身ををさめ、家をとゝのふる學文が、一生疵になつて、親類緣者、知音近づきにまで、きらはるゝ樣になるは、まつたく書物のとがではない、學ぶ人の心得のわるいのと、お師匠さまを撰まぬ過でございます。これを人のみちを爲して、人に遠ざかるは、以て道とすべからずといふのである。一たびわるい癖がつくと、どうしても止みにくい。兎角わる癖を直す分別が入用じや。氣質を變化するは學問の功、わる癖を直すが、則氣質を變化するのでございます。此くせ附でおもひ出した、譬のはなしがございます。さる所に、いたつて煙草すきの男がございました。用事有て紀州へ下る道すがらも、六ぷくつぎの大ぎせるに、たばこの煙の絶える間もなく、長の道中をくすべあるいたが、世には似た人もあるものじや、六十ばかりの親仁が、これもくはへ煙管で、フト道づれに成りまして、互に煙草すきなれば、はなしの間があひ、かの親仁がいふには、「わしは是から一里計向の在の者じやが、ナント今夜はおれが内にとまらツしやらぬ歟。何も馳走はないけれども、少々貰合

せた煙草がある。おふるまひ申さう」といふ。京の男も大によろこび、「夫は近頃かたじけない。煙草さへおふるまひ下されたら、湯も茶漬も、入用にはござらぬ。お辭儀なしに參りませう」と、打ちつれて、かの親仁の宅へ參りました。さて洗足もすみ、夕飯もしたゝめ、座敷で一ぷくすべてゐる所へ、主の親仁が、たばこ盆をひつさげ隻手には紙袋二三十もち、「さて御退屈にござりませう。さらばお約束の御馳走をはじめませう」と、紙袋の煙草をひねり、雁首へねじこみ、吸附けて客へわたし、是から取りかへ引きかへ透間もなく、すひ附けては出し、吸附けては出す。客も圖にのり、國づくしよむ樣に、煙草の名所、それか是歟というてゐるうち、座敷うちは、煙でつまり、胸はいらく、、あたまはふらく、、今二三ぶく強ひつけられたら、忽息が絶えさうで、すでに負色に成りました。さすが年よりの悲しさは、主のおやぢ、小便に座をたちました。此體を見て、客はいきたこゝちして、この隙に逃げてかへらずば、いのちもせもたまるまいと、そこら搜して、風呂しきづつみを引つかたげ、表へ出たらば、又おやぢに見つけられて、煙草ぜめに出合うてはたまらぬ、裏道から出奔せうと、切戸をはづし、畠道を横ぎりかひに、めつた無性にかけ出したが、おもひがけない、行先に大河がある、川の上下見わたせば、幸ひわたし船が見える。やにはに飛びのり、「さて此川は何といひます。」「これは日高川と申します。」京の男きもを冷し、さり迚は拍子がわるいと、胸を抱て居るうち、船は向うの岸につく。ソコデ船頭へ賴むには、「もしあとから、年の頃六十ばかりのおやぢが、たばこ盆をさげて、おれを尋ねてくる事があつたら、必わたして下さるな」と、いひ捨てて、また一文字にかけ出したが、大きな寺でゆき留りました。走りこんで樣子を咄し、かくまうて下されといへば、和尙しかつべらしく、聲づくろひして、むかし此處に、まなごの庄司といふ者ありと、ながながと、道成寺の講釋がはじまる。かの男は氣をいらち、「御說法はあとで聽聞いたしませう。どうぞ早うかくして下され。うろたへてゐると、親仁の煙草で、責殺されにやならぬ」といふ。和尙も氣のどくにおもひ、「しからば、先例にまかせ、鈎鐘をおろして、隱してやらう」と鐘樓堂へつれてゆき、大勢よつて鈎がねをおろし、難なく彼男を隱しました。氣のどくなものは、宿の主じや。客がかけ落したとは夢にもしらず、今二三ぶくこじ付けんと、座敷を見れば、客はみえぬ。さては煙草に聲あげて出奔したに極まつた、おのれにげたとて逃さうぬと、尻引きからげ、捻鉢卷し、紙袋と煙草盆ひつさげ、跡をしたうて、川ばたへかけつけた。船頭は此體を見て、急に船を川中へ出す。かの親仁は、船をよべども返事せぬ。よしく、、船はなくとも、此河を渡らいでおかう歟と、鬼にも成らず蛇にも成らず、難

なく川を歩行わたりして、道成寺へかけこみ、客殿、方丈、縁の下、雪隱までさがして見たが、流石男だけで、つり鐘には氣もつかず、是程にたづねても、行への知れぬは、大方道がちがうたのであらう、いづくまでも追かけんと、また門外へかけ出しました。此體を見て、和尚はよろこび、皆よつて鈎がねを引きあげて見れば、京の男は湯にもならず、默然としてゐる。「サアサアモウ氣づかひはござらぬ。おやぢは道が違うたというて、どれへやら行きをつた。安心をさつしやれ」というと、京の男が、胸なでおろし、「ヤレ〳〵うれしや助かつた。モウ親仁は來ませぬ歟。それなら息休めにまづ一ぷくいたしませう」といはれた。ナントおもしろい咄じやない歟。燒頰、火にこりずと、煙草責に出あうても、ヤツパリ一ぷくいたしませうといふ。これ癖附と申すものじや。古歌に、

人ごとに一つの癖があるものを我にはゆるせ敷しまの道

又諺にも、なくて七くせとも申しますれば、いづれ何なりとも癖附のない事はない。迚も癖附くものなら、心の脂を掃除するくせ附になりたいものじや。少しでも心わるう覺える事があれば、是必こゝろのよごれ、脂のたまりでござります。何分をしへによつて、掃除を怠らぬやうに、いたさねばなりませぬ。休息。

續々鳩翁道話　壹之下

いつはりのなき世なりけり神無月たがまことより時雨そめけん

此歌を、我得かたにとれば、元來天人一致なれば、誠もまた一つなり。天誠あればこそ、冬になれば必時雨する。天のみ誠ありて、人豈誠なからんやと、よみし歌と聞えまする。中庸の二十章にも、誠は天の道なり、之を誠にするは、人の道なりと見えまして、誠は天理自然の道、則本心の事でござります。さて本心を思うて、本心のごとく有りたしと、かへり見るが、之を誠にする人の道じや。誠は勉めずしてあたり、思はずして得ると申すは、何の造作もなく、又思慮分別もいらず、唯本心のさし圖にしたがへば、主親につかへるを始とし、萬の事みな程よう出來まする。これで中庸にかなひまする故、甚樂でござります。此樂な味が、則聖人のお心持じや。さるに依つて、從容として道に中るは聖人なりというてある。從容とは、無造作、無分別、無知、無心の事で、たゞ何ともなく、時に中するの自然の妙を、いふのでござります。天無心にして、四季おこなはれ、人無心にして、忠孝がつとまる。天人一致、萬物一體、ナン

ト明白なものではござりませぬ歟。之を誠にするは、善を擇んで、固くこれを執るものなりとは、修行の仕かたを、おしめしなされたのじや。善を擇むは、此道理を一たび合點し、本心を見附けるのでござります。固く執るは、常に本心に目をはなさず、私心私欲は交らぬ歟と、朝夕に吟味して、本心をとり失はぬやうに、致すのでござります。これを精一の工夫といふ。所詮前もつて申す、天命の性にしたがふの事じや。ある人の道歌に、

わが性の人にかくれて知られずばたかまのはらにたち出て見よ

おもしろい歌じやござりませぬ歟。チトおかんがへなされませ。人己が性ある事を知つて、其天にいづることを知らずと、朱子も仰せられて、おたがひに、わしが心じや、おれが心じやと、心のある事は知てゐて、此心直に天じやと、いふ事を知らぬ。若この心を天命の性じやと合點したら、曲げたうても曲られるものでは、ござりませぬ。ヤツパリおのれが心じやと思ふゆゑ、身欲のために、さんぐに曲げまする。生れ附の心が、主となつて、身欲がしたがひまする。何事も程よう參ります。とかく欲心が主に成つて、義理の心が、つかはれまするゆゑ、人心これあやふく、道心これ微と、まうしてある。何分わが心直に天じやと決定して、疑がなければ、自然と私心は、したがひまする道理じや。さて簡樣に申せば、人心じやの、道心じやの、私心じやの、天心じやのと、いひならべてみれば、心が二つも三つもある樣に、聞えますれど、左樣ではござりませぬ。其實は一なれども、人の道を勤めさへすれば、又一とも思ひませぬ。只何ともない所が、はじめて道にかなふのでござります。かれこれ名目を立てるのは、道ををさむる教でござります。わるう心得た人は、聖人を意地わるじやと覺え、忠義じやの、孝行じやの、仁義じやの、五常じやのと、六かしい教をたてて、人を自由にさせぬ責道具じや、たとへば、氣ちがひに猿ぐつわをはませ、手がせ足がせをいれて、しばり上げた樣なものじやと、おもうてござる。是は大きな了簡ちがひじや。譬へてお話し申しませう。いなり山の松茸も、丹波の松茸も、松たけにかはりはない。陰陽五行にむしたてられ、松茸の形が出來ると、たべられるといふ天理がそなはる。夫を松たけが了簡ちがひして、たべらるゝのは、己が力じやと心得、天理じやといふ事を知らぬ。ちやうどおれが心じやというて、天命の性じやと、知ぬやうなものでござります。さて松茸をたべるには、かならず柚をあひてにする。ソコデまつたけがおもふには、おれをつかふに、兎角柚をあひてにしをる、チト胡椒か山椒か、からしでも入れさうなものじやと思ふ。柚をいれるは人間がこじつけるのではない、松茸のうまれ附に、かなふに依つてじや。人もこれと同じ事で、忠孝をすゝめるは、人の生れつきにかなふ故でござり

ます。馬には轡、牛には鼻づる、これ皆人のこじつけではない。大きな獣をつかふに、くつわがよければ、牛にも轡でありさうなものが、鼻づると替るは、牛のうまれつきにかなふ故じや。されば忠孝をおすゝめ申すは、人の生れつきに、かなふ故じやと思し召せ。さるによつて朱子も、事の道あることを知つて其性によることを知らずと、仰せられた。扨かの稲荷山の松茸は、御獻上にもなり、風味もしごくよろしければ、かつをぶしじやの、酒しほじやのと、だしを入れるに及ばぬ。又丹波松茸は味がわるい。ソコデ出しをいれる歟、生ざかなの一切もいれねば、味がようない。だしをいれて、稲荷山の松茸の素焚と、丁度同じ樣になる。ソコデ丹波まつだけが腹をたて、めんようおれをたくには、だしを入れをる。ナゼ素だきにはせぬぞと小言いふ。ナント無理じやござりません歟。味ない持合がある故、據なうだしを入れるのでござります。同じ松茸とはいへども、土地によつて、風味のよいとわるいとが出來るは、丁度人の氣質に、清濁のある樣なものじや。濁つた生れつきには、聖人のをしへを入れにや、人のみちがつとまらぬ。しからば教は、意地わるではない、此方に持合がある、風味のわるい、丹波松茸の連中じや。仁義五常の、だしをいれねば、人なみには成りませぬ。聖人君子は、稲荷やまのまつだけでござります。かるがゆゑに、聖人の教あることを知つて、其我もとよりある處のものによつて、裁する事を知らずと、朱子も仰られました。是じやによつて、何分教をきかねば成りませぬ。是についてありがたい話がござります。ひととせ播州へ下りました節、姫路の社友、近江屋何がしの物がたりを、承はり申するに、同國林田領、太田村の出屋敷と申すところに、卯右衛門と申しまする奇特の信者がござりました。此人若年の頃は、ことの外身持あしく、假初にも、大酒博奕喧嘩口論を仕出し、もとよりまづしい暮でござりますれは、農業とても、はかばかしういたしませず。馬追を渡世として、常に姫路の町へ通ひ、駄賃を取れば、こゝとぐく酒にかへ、その上醉狂しては、人を打擲する。是によつて、姫路の御城下は申すに及ばず、近村みなもてあましたる男でござりまする。女房にはやう離れ、男子一人ござりました。されども子をおもふ心もなく、只氣隨氣まゝに、とし月を送りましたが、いかさま宿因の催す處歟。あるとき例のごとく、姫路へ出ましたが、荷物のつけ合あしく、馬を牽いて、あちこちと荷をたづねあるくうち、東本願寺の御坊の前を通りかゝりました。折から御本山より、講師のお下向にて、御勸化最中とみえ、おびたゞしく、參詣群集いたしまする。卯右衛門も思ふ處あつて、馬を門前につなぎ、その身は參詣とともに、御門内へ入り、御堂の縁に腰うちかけ、ながち聽聞する心ではなけれども、參詣の人數多ければ、よい喧嘩のあひてもあつたら、酒代

にせんと考へ居ながら、聞くともなし、聞かぬともなしに、ボツ〳〵と御勸化の聲が、耳に入る。其大旨は、造惡の凡夫、一善を修したる覺もなし、たとひ其身阿修羅王のいきほひありとも、無常の殺鬼をふせぐ事あたはず、閻魔王の使に引きたてられ、紅蓮大ぐれん、焦熱大焦熱のくるしみを受くる時、血のなみだを流したりとも、萬劫苦患をまぬがるゝ事かなはず、しかるに、彌陀超世の悲願と申すは、かくのごとき、十惡五逆の罪人を目あてとして、たてたまふ本願なれば、一たび此佛に歸命したてまつれば、たちどころに光明の中にをさめとられ、命終れば、極樂淨土に往生せん事、何のうたがひかこれあらんと、こまぐ〳〵と聞えました。此とき卯右衛門宿善開發の時節到來したる歟、發露涕泣し、信心肝にそみて、夢のさめたるがごとく、年ごろの惡行を後悔し、のちには大聲あげて泣きました。此とき卯右衛門、年四十ばかりと承はりまする。古歌に、

さへられぬ光のあるをおしなべてへだてがほなる朝霞かな

ナントありがたい歌じやござりませぬ歟。今此卯右衛門が忽ち惡念をひるがへして、大信心を得ましたるは、化道の利益とは申しながら、ひとへに佛智力の致す所でござります。去ながら、たとひ佛智力ありとも、卯右衛門に佛性がござりませずば、善人にはなりますまい。宿善すなはち、佛性がある故じや。是を孟子も、性は善なりと仰せられました。凡一切の有情非情、佛性を具へぬはござりませぬ。さるによつて、釋尊も草木國土、悉皆成佛の金言がござります。甚ありがたい事じや。諺に佛法と藁屋の雨は、出てきけと申しまする。何樣聞ねば信心も起らぬ。是じやによつて、教によらねば成りませぬ。佛法はおのづから佛法の妙がある、儒はおのづから儒の妙がござります。神道もまた此通りじや。おの〳〵その趣はちがふやうにござりますれども、所詮人を教へ善をすゝめ、惡を懲すの外はござりませぬ。こゝに到つては、三教一致でござります。或人の道歌に、

雨あられ雪やこほりとへだつれど解くればおなじ谷川の水

法華は佛になられぬの、念佛は地ごくへゆくのと、さまぐ〳〵すがたは替りますれど、落るところは谷川の水じや、何もかはつた事はござりませぬ。是でをかしい話がある。さる所に、法華寺と、淨土寺と、垣をへだてて隣づから、毎朝花を折りに出ては、顏見あはすと宗論がはじまる。あるとき淨土の和尚がいふには、「どう考て見ても、法華は佛になられぬ」といふ。法華のお上人腹をたてて、「法華經は諸經第一、何ゆえにほとけに成られぬ。何ぞたしかな證據がある歟」「オヽ、證據がある、法華宗は、そろばんに懸らぬ故、佛にはなられぬ」といふ。上人ます

ます腹をたて、「佛法が算盤にかゝるのかゝらぬのと、夫は何のお經に出てあるぞ。」「イヤお經には出てなけれども、目の前そろばんにはかゝらぬ。其譯は、まづ釋迦如來の御命日は、二月の十五日、三五十五日と、そろばんにかゝる。淨土の元祖は、正月の廿五日、五五廿五日と、算用が出來る。一向宗の開山は、霜月の廿八日、四七廿八日と勘定が出來る。眞言の祖師は三月の廿一日、三七廿一日と、そろばんにかゝる。其外聖一國師でも、また傳敎大師でも、勘定の出來ぬはない。たゞ勘定の出來ぬのは、日蓮宗の祖師じや、二七十四では一つあまる、三四十二では一ッたらぬ。どうしても、十三日○御命日は、そろばんにかゝらぬ」といはれた。甚味のある話でござります。畢竟勝つても負けても、罪にも、報にもならぬ、おなじ高根の月をみるのじや。かやうに申すと、十把一からげ、胡椒丸のみと思しめさうが、左樣ではござりませぬ。かた臂をはらいでも、道理はちやんと分つてある。めい〳〵御宗旨を大切にまもり、人とせい合はぬやうに、致したいものでござります。たとへば男山も、劍菱も、諸白も、並酒も、もとは一色の米じや、その趣意は、酒に醉ふのじや。されども身分に上下が有て、諸白で醉ふ人もあり、並酒で醉ふ人もあり、銘酒で醉う人もある。醉うた味は同じ事じや。上酒に醉うた人が、極樂の夢を見るでもなし、濁り酒に醉うた人が、地獄の夢を見るでもない。釋迦一佛より八宗九流とわかれたれど、つゞまる所は、人を善にみちびくのじや。たとひどのやうに、有りがたい宗旨でも、親に不孝、主に不忠、せけんの人に不義理をしては、極樂は思ひもよらず、先此世からたすからぬ。當來の果をもつて、未來の因を知ると申せば、どうぞ此世を安樂にくらしたら、極樂まゐりは、疑がござりませぬ。此世の安樂は、いかゞいたしたら、安樂に暮されませうぞ、チトおかんがへなされませ。忠孝より外に、安樂の道はござりませぬ。さてかの卯右衞門は、此日を始めとして、志大にあらたまり、口に稱名を絶さず、身に一寸の惡行もせず、まことに前日の卯右衞門とは事替り、別の人のやうにござりました。是より馬士をやめ、農業を出精し、かりそめにも人とあらそはず、唯法義をよろこんで、無二の信者となられました。しかるに卯右衞門の子、成人ののち、嫁をむかへました。此嫁生得慳貪邪見にござりまして、舅卯右衞門へのつかへかた、甚不孝にござりますれども、卯右衞門一言もとがめませず、すべて是約束事とあきらめ、却てわが子をなだめ、嫁をそだてて、日を送りまするに、ある時かの嫁が、舅の物のいひざま、おのが心にかなはぬとて、庭にあり合ふ横槌をとつて、舅へ投附けましたれば、かの横槌舅の額にあたつて、血はおびたゞしく流れまする。息子はこれを見て、もはや堪忍なりがたし、親仁さまが何といはるゝとも、すみやかに追出さんと、女房を引つたて、

門口へ出かけまするを、舅は大きにおどろき、隻手には流るゝ血を拭ひ、隻手にはわが子の袂をひきとめ、さまゞにわび言すれば、「是ほどの不孝もの、切りきざんでも、あきたらぬものを、何故におひ出す事を留めさつしやる」と、尋ねましたれば、「されば夫ほどの不孝ものゆゑ、追出すことを留るのじや。其わけは、此家でさへ、辛抱の出來ぬ嫁が、他へよめ入して、一日も辛抱が出來るもの歟。此家を追出すと、嫁は片時も身を置くところがない。おれさへ辛抱すれば、なに事なうをさまる。此樣に心得ちがひな嫁をもらうたは、其方の不仕合せ、おれが宿業のわるいのじや。何事も堪忍せよ」といひなだめて、お佛だんに御明をあげ、血をふきながら、稱名を悅んでゐらるゝ。是を見て、さすがの嫁も、大に後悔し、ひたすらにあやまりますると、亭主も漸く納得して、無事にをさまりました。又あるとき、卯右衞門、嫁もろとも麥ばたけへゆき、畝をこしらへまするに、嫁は舅の先に立ちて蹶づかひして、畝をけづり、舅はあとより土をかけて通ります。然るに嫁のくはづかひあらく、畝ことの外、ゆがみまする故、舅は後より聲かけ、「チト心得て蹶づかひを仕やれ。畝がゆがむぞ」といふ。嫁は元來短氣者なれば、これを聞くと其まゝ、蹶を畑にうちつけ、ものをもいはず、一さんに歸ります。舅はおどろき、これもまた家にかけ戻り、其まゝお佛だんへ御明をあげ、如來前に跪て、「扨も地獄一定の、愚痴のおやぢが、あさましい心より、嫁を叱りました故、嫁が腹を立てました。是全く此親仁めが、わるうござりました。御ゆるされて下さりませ」と、くり返し〳〵いうてゐらるゝ。是を聞いてさしもの嫁も、だまつても居られず、舅の側へ行き、「是はわたくしが了簡ちがひでござりました。堪忍して下さりませ」といへば、「イヤ〳〵そなたの惡いのではない。このぢいが愚痴なからじや」といふ。「イエ〳〵わたしがわるかつた」といひ、終に嫁のきげんが直りました。是等の行狀、たび〳〵ござりましたゆゑ、邪見の嫁も舅の信心に化せられ、いつしか我慢の角もをれて、後々は孝行なる嫁に成りましたと、申す事じや。蓮如上人のお示に、佛法は無我にて候へば、人にまけても、信をとるべしとあるよし承りました。何さま此卯右衞門は、實に我なしの行狀にて、よく法義をきゝ得たる信者と申す者でござります。是に引きかへ、口に宗旨の意味をのべて、假初にも珠數をはなさず、いかにも後生願とみえたる人が、思の外に其所作を見ますれば、不足錢を拂うたり、かりたるものをかへさなんだり、念佛題目となへながら、妾狂したり、聟や嫁をいぢり出したり、つまらぬ信者がわるうすると、天竺にはあるものでござります。此樣な信心は、みな引きあてのある事で、畢竟神佛が、ものをおつしやらねばこそ、恥しいことじやござりませぬ歟。是について、譬のはなしがござります。さる所に其日ぐらし

の、困窮な夫婦が有つて、その女房が產の氣がつき、あやにく難產で、三疊敷をウン〳〵いふて這ひまはる、常にとりあげばゝさまにも、醫者どのにも、無沙汰しておくゆゑ、呼びに往ても來てはくれず、亭主一人が打つたり舞うたり、さながら女房が苦しむを、よそに見てもゐられず、さればとて我腹は痛うもなし、詮方盡きて、門口に有る井戸へかゝつて、水汲みあげ、二三ばいあたまからかゝり、合掌して、高聲に「南無日頃念じたてまつる、象頭山金ぴら大權現、たゞ今かゝが難產にて苦しみます、どうぞ恙なう出產をいたす樣、お守りなされて下されい、もし出產いたしたら、其お禮に銅の鳥居を、奉納いたしませう」と、大聲でいふを、女房がもがきながら是を聞いて、「コレ〳〵めつたなことをいはつしやるな、ひよつと安產したら、銅の鳥居は、どうして工面さつしやる」といへば、亭主は目顏手さきで、女房をおさへ、「やかましういふな、かういふてだましてゐるうちに、チヤット產でしまへ」といはれた。ナントおもしろい話でござりませうが。銘々共も神佛をだますとは思はねども、わるい事して極樂をがねひ、商賣ぶ情で、金もちになりたいと、無理な事を神佛へいのるは、わが本心をだましてゐるといふものじや。我本心を欺すは、直に神佛をだますのでござります。勿體ない事じや。罰の報の小歌ぶしではござりせまぬ。罰利生があればこそ、神佛は尊いのじや。御用心なと申す事は、

されませ。さてかの卯右衞門、次第に年よりまする程、ます〳〵信心堅固の法義者になられました。ある年の冬姫路の町に、同行がござりまして、朝より其方へまゐりましたが、晝七つ下り、いとま乞して姫路の町を出で、野道をとぼ〳〵歸りまするに、後より聲をかけて、呼ぶ者がある。ふり返つて見れば、隣村の馬士、馬を牽いて、卯右衞門に追ひつき、「かねておまへは信心者と聞いたが、今夜わしが所で、お座をつとめまする、大事なくば、初夜時分から、どうぞ參詣して下され」といふ。卯右衞門大きによろこび、「夫は近頃ありがたい事じや。左やうならお辭儀なしに、參詣いたしませう」と、約束を定めてわかれました。此馬士、元來心ざまのよからぬ者なれば、よい心で申したのではござりませぬ。是は卯右衞門が、あまり法義を悅ぶと聞いて、かた腹いたくおもひ、なぶつて見んと、今夜お座があると僞て、出しぬいたのでございます。實は御座も何もないのじや。うま〳〵とあざむいて、おのれが家に歸り、馬をあらひ、そこらかた附け、初夜を相圖に火をふき消し、門の戸かたくしめて、寢いりました。卯右衞門は、かやうの事とはぞんじませず、わが家に歸つて後、刻限にも成りますれば、かの馬追のかたへ出かけまする。折ふし暮すぎより雪つようふり、野風はげしく、一向顏出しもならぬほどの、氣色でござりますれど、約そくを違へじと、簑笠をきて草鞋をはき、杖にすがつて、二十町ば

かりの道を、お念佛をつれにして、寒さを凌ぎ、やう〳〵彼村にたどりつきまして、馬士の家にいたり、門の樣子を見るに、甚靜にござります。やがて、簑笠をぬぎ、門の戸をあけんとするにあかず。ほと〳〵と戸を叩き、「卯右衞門が參りました。卯右衞門でござります」と、いへども叩けども音もせぬ。かの馬かたは寐ながら此聲を聞き、さてはかの親仁めが、よほ〳〵と來たさうな、よもや今夜の雪には、つら出しは出來まいと思うたに、さても〳〵かた意地な信心じやと、肝をつぶし、息をのんで、そら寐入して聞いてゐました。卯右衞門は音信ても返事もなく、又ともし火の影もみえませぬ。さては馬かた殿が、俄に用事でも出來て、他所へゆかれたる歟、但しは刻限が違うた歟、何にもせよ、此ま〻御目にかゝらずに歸つては、約束にそむく處もあれば、いざや此軒下にて、しばらく歸りをまたうと、簑笠うちしき座をしむれば、折ふし西風つよく、吹雪しきりに身にかゝりますれば、竹子笠を前にあて、しづかに念佛せられました。此とき野も山も、平一めんの銀世界と變じ、夜のふくるにしたがふて、寒氣身をさくやうに覺えますれば、思はず聲をあげて、「さても〳〵かたじけなや。馬方どののおかげで、今夜こゝへ來たればこそ、御開山の、北國御經回の、御苦勞のほど、萬分が一、思ひ知られて、有りがたい」と、いよ〳〵信心いやましたれば、高らかに、念佛を悅ばれます聲、彼馬士の耳に入つて、身にしみ〴〵とこたへ、何となく尊く、ありがたく覺えましたれば、今はたまりかねて、表の戸を引きあけ、卯右衞門を內へ伴ひ、空寐入して欺きたる身の科をわびて、これよりこの馬かたも、志をあらため、終に同行となり、無二の信者となられました。蓮如上人のうたに、

火の中をわけても法をきくべきに雨かぜ雪はものの數かは

卯右衞門の行狀此歌のこゝろにかなひて、有りがたいことでござります。されば是等の始末、御領主樣の御聞に達し、奇特の信者なりと、御感心あそばされ、御褒美頂戴仰附られました。此時年六十五歲。なほ此餘ありがたき行狀あまたござりますれども、事長ければ略いたします。すでに卯右衞門、去ぬる天保辰のとし、往生を遂げられましたと、物がたりに承りました。これは全く、佛法のをしへによつて、一文不通の卯右衞門が、よく人の道ををさめられました。專ら文字を知り、古事來歷を知るが學問ではござりませぬ。神儒佛の三敎、何れなりとも、其根機にかなひたる敎を聞いて、謹んでこれを守らば、人の道の勤まらぬと、いふことはござりませぬ。猶あとは明ばんおはなし申しませう。下座。

續々鳩翁道話　貳之上

道は須臾も離るべからず、はなるべきは道にあらず、是故に君子は、其睹ざるところを戒愼み、その聞かざる所を恐ぢおそると、これ則心を存し、性をやしなふの工夫にて、道は離れたうても、はなれられぬと申す事を、お示しなされたのでござります。既に藤樹先生の語に、道は譬へば水のごとし、人はたとへば魚のごとし、魚水にある時は、悠然としてたのしむ、水をはなるゝときはくるしむ、はなれて久しきときは死すと、仰せられました。何さま此通で、人が人の道を勤めてゐまするとたのしむ。人の道にはなれますると苦しい。人の道にはなれ通しで居ますると、首くゝる歟、身をなげるか、切られるか、うち殺されるか、いづれ死にまする。これ魚と水とのやうなものじや。人と道とは暫くも、離れることは成りませぬ。はなれたらしまひじや。諺にも、合ものははなれると申します。人と道とは合せものではござりませぬ。道は性にしたがふの道で、うまれ附の通にするのが道じや、道の外に物なく、ものの外に道はござりませぬ。又古人の說に、心は道なり、道は天なりともみえまして、心を知れば道を知ります。

道を知れば天を知ります。これを知れば、天人一致、萬物一體の道理が知れます。よし又この道理は知らいでも、目は見える、耳はきく、手はもつ、足はゆく、譯を知たも知らぬも、生つきの道じやによつて、自由自在に出來すまる。ある人の發句に、

子もふまず枕もふまずほとゝぎす

おもしろい事でございます。郭公の聲が耳に入ると、いつの間にやら立つてゆき、窓が明ける。しかも側にねてゐる子もふまず、また枕もふまぬ、何ものがあるいて往たぞ、只郭公ばつかりじや。チト考へて御らうじませ。ナント奇妙なものではございませぬ歟。しかしながら身びいき身勝手が、少しでも交ると、枕もふめば親御のつむりも蹴ちらかす。こはいものじや。さるによつて朱文公も、道は日用事物、まさに行ふべきの理、みな性の德にして、心にそなはると、註をお下しなされました。その心におれがといふ身勝手がまじると、性の德をうしなひまして、朝から晩まで、する事なす事、工面のわるい事ばかり思ひ附いて、我とわがでに、ハアスウいふて苦しみます。心學のありがたい事は、我ないといふ道理を、合點いたしますれば、道のはなれられぬ事を、よく知ります。大か小かの違はあれど、得て身勝手がまじります。さるによつて、平生道を辨へて、おかねばなりませぬ。事のない時は、道知つた人も、知らぬ人も、何

も變りはござりませねど、なんぞ事があると、天地の違に成りまする。たとへて申さば、私のやうな目くらも、あなたがたのやうな目あきも、斯うして居まする時には、何もかはりはございませぬ。今にもあれ、ヤレ火事じや、盜人じやと、立騷ぐとき、あなた方は目があいてあるゆゑ、道をよう御存じや、ソコデ怪我もせずに逃げられる、私どもは、その段になると逃げる事が出來ませぬ、目がみえねば、道は知れぬ、されども、手足がございますゆゑ、さながらきよろり共して居られず、探り廻つて、逃げて見ても、あちらでは天窓うち、こちらではふみかぶり、どうやらかうやら、逃げおふせると、始のうろたへた事は忘れて仕舞ひ、目を明かうとも、道を知らうともおもはず、結構な目くらじやと、思うてゐる。道ぎらひのお人は、私によう似たものじや。事は何どきにおこらうやら、知れぬが浮世でございます。子が死なうやら、親が死なうやら、掛損せうやら、火事にあはうやら、そのとき俄に、泣がほせぬやう、前もつて道の修行はいたして置きたいものでございます。是故に、君子は、その睹ざる處を戒め愼み、その聞かざるところを恐ぢおそると、事にのぞんで、泣づらさげぬ御用心を、聖賢君子は、前もつてなされまする。これに附いて、たとへのはなしがある。さる所の隱居が、杖をついて板橋をわたるに　中程の板にふし穴がございました。かの隱居、杖をふし穴へ突込れた。思ひが

けない事ゆゑ、是はと驚き、手を放すと、杖はするゝと、節あなより下へぬけて落ちると、川下の方へ流れまする。隱居これを見て、ふしぎさうな顏つきして、腰にさいた扇をぬき出して、又かの節あなへさしこみ、手を放して見れば、扇も穴から川へおちて、是も川下へながれまする。隱居、つくゞ〳〵とうちながめて、やう〳〵合點がいたやら、横手を打て、ハヽァ此理屈じやナといはれた。是がよう似た話じや。銘々どもは、一ぺんや二へん、鼻ついても、天窓うつても、なんぼうでも合點がゆかぬ。ソコデ學文がきらひ、道のはなしが嫌ひじや。小人と君子とのわかちは、外ではござりませぬ。しくじつても懲ぬのは小人、しくじらぬ先に、御用心なされるのが、君子でござります。誰しも、おそれ慎む心の、ないものはなけれど、小人凡夫の悲しさには、人の見る所、人のきく所では、隨分慎んで、用心をいたしますれど、人の見ぬ所、人の聞かぬ所では、どの樣な事しても、大事ないと心得、高なしの氣隨氣まゝ、さるによつて折々鼻がへこみます。聖賢君子はこれに引きかへ、人の見ぬところ、人の聞かぬところを、いよいよ大事とお慎みなされる。詩にいはく、爾が室にあるをみれば、こひねがはくば屋漏にも愧ざらんと見えまして、君子は御一人ござつても、不行儀な事はなされぬ。實に人の見聞ぬ所は、いたつて大事の曠の場所でござります。うろたへると、人にも見落され、大恥をかゝねば

ならぬ。中むかし、世の亂れまして、こゝかしこに、盜賊おこり、在方町かたおびやかされて、一日もやすき心はござりませなんだ。其頃盜人二三人、夜ふけて、ある家を窺ひ、戸のすき間より、内をさしのぞいてみれば、としの頃四十計の女、たゞ一人、圍爐裏の前にすわり、粥を烹て居りまする樣子じや。此外にも人やあると、なほ窺て居りまするうち、彼女、粥のにえ加減を試る有さまをみれば、鍋のふたをとり、清らかなる箸にて粥すこし蓋の上にはさみ上げ、指にて押潰して試み、更に口中に入れませぬ。其行儀の正しいを見て、盜大きに恐れて、逃歸つたと、ある書物にみえました。是がこれ、獨を慎むの奇特でござります。私どもは、とかく合點がわるうて、これは人の見ぬ所じや、これは人の聞かぬ所じや、是程の事は大事あるまひ、此位な事は知れはせまいと、我ひとり合點して、道のない方へあたま突込み、これが理屈じや、あれがりくつじや、是ではどうもならぬ、あれではどうもならぬ、かうすれば勝手がよい、斯せぬと勝手がわるいと、滅多に身びいき身勝手でこじつけ、心易う渡られる世の中を、無生無體に苦みます。ある人の歌に、

岩根ふみからたちわけてゆく人はやすき大路をすぎがてにする

と、朝から晩まで、岨道を横ばひする、不行儀な蟹仲間が多い。さりとてはこまつたものじや。

其くせ人の横ばひするのは、よう目にかゝつて　見事人の小ごとはいへど、おのれが横にあるくのは、トントめにかゝりませぬ。又ある人の發句に、

蟹を見て氣のつく岨の清水かな

おもしろい句じやござりませぬ歟。此句を、我得かたに取つて見れば、人の横ばひが目にかゝつたら、チヤット、わが身にたちかへつて、我もよこ這はしてるぬ歟と、氣をつけてごらうじませ。此氣がつくと、慎の心がおこる。慎の心が起れば、おのづから生つきの、性をやしなふ便になります。もし少しでも慎がぬけると、はなれられぬ道を、無理無體に離れるによつて、はなはだ苦しい。此故に朱文公も、是をもつて、君子は常に敬畏を存して、見きかずといへども、またあへてゆるがせにせず、天理の本然を存して、しばらくの間も、離れしめざるゆゑんなりと、註をお下しなされました。すべて敬畏の心を存するは、人にむかふばかりの事ではござりませぬ。萬物に向ふに、此心をもつてむかへば、宜しうないといふことはござりませぬ。我友何がし、播州三草の人でござりまするが、いたつて農業の事にくはしく、米麥はいふに及ばず、何にてもこの人の手に植つけまするとは、豐凶にかゝはらず、世間の人より作德がたんと有つて、至極見事に出來まする。ふしぎにぞんじまして、そのゆゑを尋ねましたれば、大きに謂ある事でござります。先籾種は、隨分よい種を選んで、前年より俵に入れ、庭の天非に釣りおきまする。これは火氣が自然とまはつて、あたゝかなる樣の心得でござります。尤所によつては、只土藏にたくはへておく所もござりますれど、北國筋や、あるひは山分などでは、多く寒氣が、つようござりまするゆゑ、火氣を假りて、あたゝまりを入れ置きまする事じや。さて翌年いたり、種附時分になりますれば、かの俵をおろすに、竿のさきに鎌をゆひ附け、下よりかの釣縄を切ておとし、池水に漬けますること、二十日ばかり、其のち苗代へまきつけまする。これが三草邊では、すべてかやうに致します。然るにわが友何がしの心得は、大にちがひまして、籾だねといへども、天地生々の氣を、ふくんでゐる活物なれば、疎略にあつかふときは、生々の氣をくじく事があらう歟と、いかにも大切に、つゝしんで、病人をあつかひまするやうに、しづかにかづき上げて釣りおきます。又おろすときも、梯子をかけ、ソツト肩を入れて、縄をとき、靜におりて、池へもち行くときも、大事にして持ちゆき、又水へおろすときも、小口から、ソロ〳〵と少しづつ水へひたし、次第に水へおろしてつけ置きます。上げるときも、またはじめのやうにして、ソロ〳〵と引き上げまする。是その心得は、人のあたまより、水をかけますれば、一驚をくらひ、氣しゞまつて、暫はのびませぬ。足もとより次第に水をかけまするとと、胴

ぶるひも出ず、氣もしゞまらぬ。此理を考へて、すべて種物をあつかふ事、大切の人をあつかふやうに、敬畏の心を存して、あつかひまする故、種ものの氣がおのづからしゞまらず、さるによつて、實のり格別〳〵世間にすぐれて出來るよし、咄されました。成るほど有りがたい心得でござります。尤土地ところにより、又は寒暖によつて、さまゞ〳〵種漬植つけなどの、仕かたもござりませうけれど、只おそれ敬しむの心を主として、其所々の法にならひ、種漬植つけ、すべてとり入まで、此敬畏の心で仕あけますれば、いづれ世間よりは、餘計とれねばならぬ筈でござります。是は種ものに限らず、茶碗ひとつ、扇一本、取りあつかふにも、おそれつゝしむの心があれば、とり落してわる樣な、無調法は出來ますまい。まして主親に向ひ、夫兄にむかひ、此心があらば、忠孝貞節、おのづから勤まります。但し畏れつゝしむといふて、ワナワナとふるひながら、致す事ではござりませぬ。敬畏といふは、只大事大切とぞんじ詰めまする事でござります。別して、大事大切にせねばならぬは、御銘々の家業じや。此家業は、みな是其家々の、御先祖さまや、大祖父樣、親御の代から、仕來りの家業でござります。此家業をはじめることは、一朝一夕のことじやござりませぬ。鑓に血み附けたり、鎧の袖をしきねにしたり、又は肩に棒を置いたり、あるひは草鞋を作つたり、雨にそぼぬれ、雪にうたれ、食ふもの

も得くはず、著物も得著ず、口惜い目も堪忍したり、難儀な事も辛抱したり、千辛萬苦して、この家業のもとゐを御立てなされたのじや。その子孫として、己が勝手の氣隨にまかせて、此仕事は引きあはぬの、畑仕事はきらひじやの、こんな小商しては、渡世になる物歟などと、とかく餘所外へ、目がついて、仕來りの家業が、いやになります。ソコデ百姓が商をし、商人が醫者になり、いろ〳〵にばけて、世間の人をたぶらかす、恐ろしい事でござります。ヨウおもうて御らうじませ。引きあはぬ商賣でも、埒のあかぬ細工でも、見事先祖代々、世渡が出來てきたのじや。それが今更渡世にならぬといふは、皆これ、家業に精が出ぬのでござります、是を怠ると申します。此怠りの起る處は、身の分限を辨へませぬによつてじや。分とは、士農工商それ〳〵の分、限とは町人は是だけ、百姓はこれだけ、職人はこれ丈と、みな夫々に、住居衣類、食物は、申すにおよばず、身分だけの限がござります、是を分限と申すのじや。その分限を過す處から、物入がつようなり、入目が多いに附けては、金まうけが足らぬやうになりまする。ソコデ家業のこしがぬけて、おのづから精出して勤めることがならぬ故、トウ〳〵先祖から仕來の家業を、取替るやうになります。こはい事じや。めい〳〵身にたち反て、愼まねば成りませぬ。たま〳〵據ないことで、家業をかへる人は、まことに止事を得ぬのでござりま

す。夫を手本にして、めつたに商賣をかへたがる人は、烏鵜の眞似をして、水をのむと申すものでござります。こゝによい譬の話がある。さる貧地の和尚樣が、急に賽錢をしてやらうと考へ、ありきたりの本尊、あみだ如來は古めかしく、世間に類も多い。當時世間をうかゞふに、專ら子をうむ事が、はやる時節なれば、子安の觀音を本尊として、安產の守を出したらば、寺門の繁昌うたがひなしと、俄にあみだを觀音にしかへ、門前には本尊子安の觀世音と、墨ぐろに書きしるし、看板をかけたれば、參詣の人肝をつぶし、あやしんで門內へはひりませぬ。和尚大きに氣をいらつて、これではいかぬと、又々工夫し、其翌日は辨才天、あるひは金ぴら、弘法大師と、おゝひ出すまゝ、とり替引かへ、日々ほん尊を仕かへましたれば、後には猫の子も來ぬやうに成つたと申す事じや。商賣がへをしたがる人は、此和尚さまのお仲間うちじや。先祖開山上人の御苦勞なされた、家業如來を、大切にお守をして、御先祖開山より傳來の家藏諸道具、鍋かまの御寶物をば、大切に守護して、一向一心に家業如來を信心さへいたしますれば、參けいは門前に市をなし、賽錢は、米麥錢かね、雨のふるやうに、元日から大晦日まで、上り通しでござりまするに、此和尚さまのやうに、本尊を仕かへ、御開山の御苦勞をかへり見ず、不信心になるがさいご、參詣は日々にへり、賽錢は月々に減じ、仕かたがないゆゑ、寶物をうり喰にすると、本堂たちまち大破におよびます。其とき一家親るゐへ、奉加帳を持てまはつても、誰が一人、寄進についてくれる者はない。是がこれ寺や本尊は、おれが物じやとおもふ和尚の心得ちがひで、寶物を賣らねばならぬやうに、成りまするのじや。是を孟子も、家必自らやぶつて、而して後人これを毀る、と仰られました。とかく家業に怠つてはなりませぬ。ある人の道歌に、

おこたりも夏のかせぎもほど〳〵にほにあらはれて見ゆる秋の田

六月炎天に田はぶつ〳〵と、にえ返つてある中へ、四つばひに成つて、腰ぎりはひり、脊はごらんで炙點おろさにや、分らぬやうに、眞黑に日にやけ汗しづくになつて、一番草、二ばんぐさ、三番草と、ねんごろに手入した田も、またぶしようかわいて、晝めしの箸はなすと、永の日を七つ時分まで晝寐して、のら〳〵と明しくらし、一ばん草もろく〳〵に取らぬ田も、青田のときは同じやうに見えますれど、秋になると、こはいものじや、手入をした田は、實がついて皆俯てゐる。又のらかわいた田は、きよろりが味噌ねぶつたやうに、ひよろ〳〵と立てゐまする。人の怠も此通で、平生は、格別おごつた樣にも、あそんだやうにもおぼえませぬ。昨日はこれほど怠つたり、けふは是ほど油斷が有つたと、その折々はわかりもいたしませねども、

十二月の大晦日には、書出はつんで山のごとく、胸づかへして、飯も喉へ通りませぬ。ひろけて見れば、皆それ〳〵に覺のある事、此とき手を持て胸を打つても、モウおそい。是みな平生の油斷からじや。とかくおこたらぬやうに、いたさねばなりませぬ。かんざしは大事歟、花見は大事歟、此くらゐな事はしても大事ないと、ゆるす心の果ぞかなしきじや。所詮分限を辨へて、立反らにや成りませぬ。かゐがゆゑに、中庸に、君子その位に素して行ふ、その外を願ずと、お示しなされたのでございます。是について、おもしろいはなしがある。さる茶人の家へ、道具屋が參りまして、「モシ旦那、この道具を御らうじませ」と、さし出せば、旦那が手に取つて、「ホンニ此茶わんは時代が見える。書附はない歟。たれが手づくねじや。」「ハイこれは武藏坊辨慶が、手づくねの茶わんでございます。」「いかさま其時代と見える、代金は何程じや。」「ハイハイ三貫匁でございます。」「ヨシ〳〵これは貰うておかう。時にこの蓋置は、またよほど時代がみえる。鼎足でもなし、また三人形でもなし。」「ハイこれは、むかし鴻門の會の節、樊噲が楯の板をはさんで、門やぶりした時の、鎧のかな物でございます。」「それはけしからぬ時代ものじや。これも序に買うておかう。時に此香合は、大分あたらしう見えるが、これは誰が作じや。」「ハイハイこれは加藤清正、朝鮮征伐のとき、朝鮮王城の土をとつて、手づくねになされた香合でございます。」「それは一段おもしろい。これもついでに買うておけ。いづれ近々、茶を出さねばならぬ。先辨慶の茶わん、樊噲の蓋おき、清正の香合、よい取合じや。しかしみな兵ぞろへじや、是はどうした事じや」と、問れたれば、茶道具屋がぬからぬ顔で、「つよい筈でございます。たんと家をふみつぶして來た、道具じや」といはれた。ナント恐ろしい話ではございませぬ歟。茶碗や香合ばかりの事じやない。小間物やが持つてくる、仕入箱の中にも、朝比奈や辨慶が、本名をかくして、櫛笄になつて、ゐようも知れませぬ。うろたへると、身代を、兵共にたゝきつぶされます。其外古道具、古手見せ、質屋の藏に、つんであるしろものは、皆身代をふみ潰した兵、どこに埋伏して居ようも知れぬ。御油斷は成りませぬ。とかく大事大切の愼がぬけると、大騷動のもとゐじや、御用心なされませ。休息。

續々鳩翁道話　貳之下

隱たるより見はるゝはなく、微よりあきらかなるは無し、かるがゆゑに君子は、その獨を愼む。前には敬畏のこゝろを存して、天命の性をやしなふの工夫を、御しめしなされ、こゝには今一段くはしうして、省察の工夫を御しめしなされたのでござります。省とは、常にこの心存するや否やと省、察は、善か惡かとあきらかに辨へて、天命の性を全うすることでござります。まづ本文に、隱たるより見るゝはなしとは、人の心の事を申すのでござります。また微より顯なるはなしとは、念慮の微なる事を、いふのでござります。さて獨とは、われひとり知るところの場所にて、すなはち念慮のうごくところを、さして申すのじや。大勢の人の中でも、わがこゝろの中は、誰も知らぬものゆゑ、さればこそ、ひとりとは申しますれ。すべて、至善も極惡も、この我ひとり知るところの場で、極めまするのじや。多くはこれ世間の人の、不忠不孝におち入りまするも、またいにしへ、夏の桀王、殷の紂王などの、天下を亂し、其身を亡しまするも、はじめ僅に、此ひとり知る、念慮の微なる處より、起るのでござります。たとへば螢

ほどなる煙草の火より、大火事となるやうなものじや。さるに依つて、省察の工夫をこらし、つつしみを加へねば成りませぬ。此獨をつゝしむ事、僅な事のやうにござりますれど、其しるしが、天地位し、萬物やしなはるゝに至りまする。又この獨しるところを、うが〳〵と油斷しておきまするとき、其しるしが國を亡し、家をやぶり、身をうしなふにいたるのじや。ナント恐ろしいものではござりませぬ歟。古語に、念慮萌さざれば、鬼神も知る事なしというて、此一念の萌さぬうちは、鬼神もはかり知る事が出來ませぬ。なぜなれば、知るべき事がないによつてでござります。むかし飛驒の山中に、檜木の長へぎをこしらへ、世渡とする男がござりました。一日例のごとく、山に入りて、細工をする折から、前なる杉の木の蔭に、脊の高い山伏が、おもひがけなう、立つて居ました。かの細工人大きにあやしみ、さても此山伏は、天狗さうなと思ふうち、かの山伏大聲あげて、「我を天狗さうなとおもひをるぞ」といふ。細工人、いよ〳〵あやしみ、これはいやな事じや、早く逃歸らんとおもへば、かの山伏また聲をかけ、「これはいやな事じや、早くにげ歸らんとおもひをるぞ」といふ。細工人、あわて騷いで、長へぎをたわめ、急に荷ごしらへするとき、手がはずれて、枌板一枚はづみに飛んで、かの山伏の鼻柱へ、きびしくあたれば、山伏一驚をくらひ、「さて〳〵おのれは、氣の知れぬ男かな」と、いふかと思

へば、かき消すやうに失せたと、ある書物に見えまする。是かの天狗も、人の念慮のおこる處は、忽に知りますれど、念慮の起らぬさきに、長枌のはじけることは、夢にも知らぬ。これ知るべき道理がないに依つてじや。さるによつて、一念おこると、天地神明に通じ、世界中へ、つつぬけに成りまする。こゝを以て朱文公も、己ひとり知るときは、則これ天下の事、著見明顯なること、しかもこれに過ぎたるもの有ることなしと、註をお下しなされました。さるに依つて、常に腹のうちを吟味して、用心をいたしませぬと、どんな大事をひき出し、悪名を流さうやら知れませぬ。甚おそろしい事でござります。先年、わたくし江戸表に居りましたる節、隣家の事でござりましたが、ある呉服店の手代に、獨を慎む心得のない人がござりまして、いつの間にやら、貳拾兩ばかり、引負が出來ました。されどもまだ節季までは、あらはれぬことゆゑ、とやかうと工面して居るうち、一日金貳百兩の爲替手がたを持つて、麹町邊まで、うけ取りに往かれました。先力で悪なう此金を受けとりました處で、ふと悪念が起りました。恐いものじや。其故は、いづれ節季になると、貳拾兩の引負があらはれて、請人へ預けられるは必定、所詮この金の手に入つたこそ幸なれ、此まゝかけ落して、京大阪へなりとも出かけ、ともかくもならうと、無分別を考出した。これが是、物をかくせば隱されるものじやと、心得ちがひする人の所作じや。大切なものは金銀、おそろしいものは人の心じや。指一本はじく間に、どのやうな無分別が、おこらうやら知れませぬ。若いお衆は別して戰々兢々、こはしく〳〵のおつゝしみが、肝要でござります。さて此手代が、わるがしこう工夫をして、此まゝ迷げなば、追人のかゝる事は必定、いづれ二三日、江戸の町にかゞみゐて、其のちに上方へのぼらうと、覺悟をきはめ、日ざしを見れば、まだ晝前、何處でなりと、日を暮さうとおもひまして、よし町というて、堺町の裏新道に、懇意の茶屋がござりました。先こゝへ逃込んで、さてどうも仕樣はなし、たいこ持やら、燈籠鬢やら、高なしにおほぜい呼よせ、酒肴と、どんちやんとで、日を暮さうと存じましたが、能うした物じや、本心が合點しをらぬ。酒はなんぼ呑んでも醉はず、太皷三味線も面白からず、太皷もちの、かるく口も、胸にこたえて、さり迚はこゝろぐるしく、首をのばして日ざしを見れば、まだ八つ前、いつもは、みじかう覺える日も、けふに限つて、格別に長うおぼえ、どうぞして日を暮したいものじやと、さし俯いて思案しゐる。ナントこれが鼻たれの時分から、おせわに成た御主人の恩を、知た人でござりませう歟。恩を知らぬものを、人面獸心というて、面は人でも、こゝろは獸じやというてあれど、畜生にも此やうな不義な心はござりませぬ。わが友何がしといふ人、町分にて年寄役を、勤めてゐられました。然るにこ

の町内に、何處から來たとも知らず、迷ひ犬が一疋をりましたが、いつしか町中の飼犬のやうに成つて、こゝかしこで養はれて居りました。されば此犬が、ちかごろ往來の人をおどし、子供に嚙附、あるひは非人などにかみつきまして、折々町内へ、つけこたへにあづかり、迷惑すること度々でござりました。あるとき町用につき、隣町へ、かの年寄相談にゆかれ、夜ふけて歸る處を、件の犬が、さんぐにおどしました。やう〳〵我家へ逃げこみ、寐て見ても、腹が立つてねられず。翌朝會所へ髪を結ひに參られました。折ふしかの犬が、其會所の庭に、寐て居まする。ソコデ年寄が、にはかに氣色をかへ、犬にむかひて、人にいふ如く、「おのれ町内のやしなひをうけ、命をつなぐ、恩義もおもはず、やゝもすれば、往來の人をそこなひ、町中へ迷惑を掛けるのみ歟、夜前町用にて、夜ふけて隣町より歸る節、何ゆゑ町役人をおどしたるぞ。これによつて、已來町分にさしおくこと、罷りならぬ。いづれへなりとも立ち去れ」と、大に叱りましたれば、かの犬、首をたれ、つくばひ居て、いかにもあやまり入つたる體にみえました。さすがに、年月町内に居りました犬ゆゑ、不便の心おこり、「已來をきつとたしなみなば、これ迄のとほり、町分にさし置てやらう」と、詞が和らぎましたれば、かの犬うれし氣に表へ出ました。髪結はじめ家内の人、この樣子を見て、大にあきれ、お年寄は氣が違うたる歟と、怪

みましたと申事じや。扨ふしぎなは、件の犬が、その日より往來の人をおどさず、其うへ、かの年寄、他へまゐられまする節は、かならず町ざかひまで送り、また歸る節は、町ざかひまで、出むかひまして、先にたつて、門口に蹞りまする。畜生といへども、恩を知らぬといはれては、能々に恥るところありと見えまして、かやうに所作がかはりまする。これでおもへば、主親の恩を知らぬものは、人面獸心とは、中々いはれぬ、畜生にもはるかに劣たる所作でござります。是全く、平生、獨をつゝしむの心がない故、人の見ぬところ、人のきかぬ所と、わがでにゆるして、不忠不孝の所作になります。人は萬物の靈と申して、一切いきとしいけるものの中において、尤すぐれたるが人じや。それに不忠不孝の名を取りまするは、實にはづかしい、口惜い事でござります。しかも不忠不孝の名をとつて、せめて立身出世でも出來ることか、氣隨氣まゝがなる事歟、鳶鴉でも遊んでゐてはくはれぬ。鼠もいたちも、分相應にかせがねば、口すぎは出來ぬ。若いときの無分別には、主親の手をはなれたれば、格別自由が出來るもののやうに覺えるは、これが血氣のムチヤクチヤ思案、乞食非人になつても、あそんで居てはくはれず、とても動きはたらくものなら、主親のお膝もとで、忠孝がつとめたい物じや。うろたへると、本心が眞黑に成つて、いつのまにやら獸にも劣る心になりまする。古歌に、

生茂るむぐらの宿の道たえて人もかよはず月もてらさず

此歌のこゝろは、仁義の良心をうしなうて、人の道に離れては、生きてゐる死人じやと、たとへてよんだ、歌と聞えます。箇樣なお人は、澤山にあるものではなけれども、得て一人や二人は、あるのでござります。御用心をなされませ。扨かの手代どのが俯いてゐるを、氣のどくがり、ソロ〳〵たいこもちが、おだてかけて、「ナントこれから、芝居へ御出でなされませぬ歟」といへば、大勢の燈籠びんが、「わたしらもお供いたしまよう」ととりぐ〵にすゝめる。ソコデかの手代が思案に、まだ日は暮ず、酒飲んでも醉はず、太鼓三味線もうるさく、たゞ何となくしめ附らるゝやうにおもふ最中なれば、イツソ芝居見にいたらば、まぎれることも有う歟と、是から、大勢うちつれて、芝居見にゆく。ナニガ錢拂はぬ芝居行きなれば、めつたに廣う棧敷をとらせ、大ぜいの燈籠びんを前にならべ、その身は頰かぶりで顔をかくし、後の方にちゞこまつて、もとより芝居見る氣でもなし、どうなとして日を暮さうと思うゆゑ、見るでもなし、又見ぬでもなし、たゞウツ〳〵として俯いてゐる。此日の狂言が、敵討つゞれの錦といふ狂言で、伊兵衛佐兵衛といふ若黨が、たがひに女房を賣つて、金の才覺し、主人にやらうといふ趣向じや。尤伊兵衛の女房は、佐兵衛が妹で器量がようて、銀五百兩五拾匁に身をうり、また佐兵衛の女房は、伊兵衛がいもうとで、不器量ゆゑ、錢一貫文で身を賣る、愁歎のところを、かの手代が聞けば、伊兵衛の詞に、一貫の錢のあたひは十二匁、せけん通用の秤でかけたら、十二匁あるべきが、今日、この世界を照さつしやる天道の秤では、此みよが五百五拾匁の身の代も、お縫が其一貫の十二匁も、ちつともかるみはあるまいぞ、といふ聲が耳に入ると、かの手代が何おもうたか、しく〳〵と泣出したが、たまりかねて何ともいはず、其座をたつて、一さんに主人の家へかけて戻りました。これ本心の發見、地ごくのかまのふたの明どき。ある人の發句に、

一しぐれ時雨てもとの月夜かな

ナンとおもしろい發句じやござりませぬか。若いときの不了簡は、たとへば晴れたる空の、俄にかけ曇つたやうなもので、善惡もわからず、主親の事もわすれ果て、まよいにまようて、つきあたつた所で、はじめて目のさめるは、一しぐれしぐれて、もとの月夜かなじや。人の性は善なり、一旦明德は昏んだれど、今芝居を見て、畢竟狂言綺語とはいひながら、勸善懲惡のをしへにちがひなければ、此手代どのが、見るとも見ぬともなしに、狂言の趣向が、身にしみじみとこたえ、能々おもうて見れば、かれはわづかな切米をもらうた主人の恩義に、女房を賣

つて、金の調達して、恩をおくらうとおもふものさへあるに、我は幼少から、格別の大恩をうけて、人に成つたことをうちわすれ、大切な主人の金を引負し、その上大金までぬすみ取つて、出奔せうとおもうたは、われながら不思議なほど、恐ろしい了簡じやと、フト氣がついて見れば、座にもたまらず、叱られることも、引負のことも、何もかも思れず、只そのまゝに、主人の家へ歸つたのでござります。實にありがたい目のさめ様じや。これは是狂言のおかげじや。すべて芝居淨るり皆善をすゝめ惡を懲す、手短かな教でござりますれど、得てはうまい處の身を喰ずに、味ない皮ばかり食る人があるものじや。狂言が上手じやの、男つきが立派なのと、やくにたゝぬ所ばかり見て戻るは、かへつて毒にこそなれ、をしへにはならぬ。さる所に、いたつて實體な息子どのが有つて、芝居などは、見たこともない篤實なうまれ附、ソコデ謠講の連中が、かの實體ものを放蕩仲間へ引入れようと、一日無理無體に、芝居へつれて行きました。かの息子どの、はじめから終まで、一つ〳〵感心し、落涙してよろこばれた。友だち衆が、此體を見て、さては芝居が氣に入つたとみえると、その後度々さそへども、ふたゝび芝居へは往かぬ。ソコデ友達衆が合點がゆかず、かの息子殿に、「此間はしきりに感心して、面白がつたじやない歟。全體何を感心せられたのじや」と、問はれましたれば、かのむすこどのが、いはるには、「ナンボウ渡世に精出すというても、六月炎天に、わた入を三つ四つかさねて、飛だりはねたりの所作ごと、中々我々が、一日そろばんはじく樣な、勤ではない。いかさまあれほど、渡世に精出さねば、身代はもたれぬものじやと、それで感心いたしました。さるによつて、ふたたび芝居へ往たら、此方の身代がもてぬによつて、得參らぬ」といはれたと申す事じや。これらは是芝居の、うまい身の所をたべたと申すものじや。どなたも芝居を御らうじるなら、かやうなところを、御覽なさるがよい。むかし柳下惠といふ賢者は、水飴を製して、根機をやしなひ、學問のたすけとせられた。又盗跖といふ大盗人は、みづ飴を製して戸樞にぬり、盗のたすけとしたと申す事じや。同じ水あめでも、もちひやうに依つて、學問のたすけとも成り、又ぬすみのたすけともなる。強い物じや。芝居淨るりも此とほりで、見樣によつては、忠孝のをしへとなり、又見やうによつては、不忠不孝の手本ともなる。幸にこの手代衆の、よいところで氣のついたは、未だ天道にも捨てられぬ處があつたとみえる、ありがたい事ではござりませぬ歟。是じやによつて、專ら獨をつゝしむの、修行をせねば成りませぬ。愼とは、一念のきざす時、良知のがゞみをてらして、善か惡かを明にわさまへ、惡なればこれを止めにし、善なれば固くこれを執りまするを、愼とはまうします。このつゝしみが、癖附になつたを、聖賢君子

と申すのじや。何分常に、わが腹のなかを吟味して、少しも恥しうない樣にしておくが、學問の肝要でござります。此ひとりをつゝしむと申すことは、道を行ふの極秘傳、かへすぐ〳〵ありがたい、聖賢のお示でござります。たとへば蝮にかまれたるとき、其疵口をそいですつれば、たちまちに治るやうなもので、一念きざして、惡と知つたら、チヤツト止めにすると、總身へ毒はまはらぬ。これを捨てておくと、其惡が段々腹の中で大きうなり、潛滋暗長というて、目にはたゝねど、いつの間にやら心の惡が形にあらはれ、止めにしたうても、相人が出來て、やめられぬやうに成ります。吸がらの火は、ふみけしても仕廻るけれど、火事に成つてからは、水も梯子もとゞかぬ。只一念幾微の間に、善惡をえらんで、惡をやめにするが、道の奧義でござります。ドウゾどなたも、こゝをお勤めなされて、下されませ。さてかの手代どのの主人の家には、今朝から爲替を取りにやつたが、晝になつても戻らず、先方へ問合にやれば、先刻手代どのへ、金子を渡したとの事、サアこれから大さわぎになり、請人を呼びにやるやら、卜者に見てもらふやら、上を下へとまぜかへすところへ、七つ時分に、かの手代どのが、何氣ない體でもどつて來た。此家の番頭どのが、いたつて發明なうまれ附ゆゑ、かの手代の戻るとき、其顏附をみれば、只ならぬ顏色、足もとを見れば、かたし〳〵の雪駄をはいてゐる、しかもかたしは、絹眞田の緒の附た女雪踏、さては此奴、餘ほどうろたへたものと見える、何さま子細あらんと、しづかに金子を問へば、別條なく二百兩もち歸つて、番頭へわたします。ソコデ番頭がいはるゝには、「歸りの遲う成つた子細も、尋ねたけれど、何歟つかれたやうにも見える。まづ二階へ上つて、一寐入ねよ」といはれた。かの手代も、これをしほに、二かいへ上つて、跡はともあれ、先金子を主人へわたしたれば、安堵して氣をしづめました。此番頭の叱らぬはたらき、甚感心な事でござります。さてその夜、しづかにぎんみする處、引負の金子二十兩、有體に打ちあけ、なほまた、今日の不所存のこらず咄し、其うへ伊兵衛佐兵衛の狂言で氣がつき、恥をしのんで歸つたる樣子、委細に咄しました上、いか樣ともおはからひ下されいと、實に誤り入つた體でござりました。これによつて番頭どのが、主人へ委細に申したれば、主人も分別ある人にて、「芝居狂言を見て、本心にたちもどりの出來るは、まだたしかなる所がある。雨ふつて地かたまると、此後急度あらたむるならば、今一度つかうてやれ」といはるゝ。是からかの手代どのが、眞實主人の恩がありがたう成て、奉公を大切につとめ、難なく宿ばいりをしられたと申すことを承りました。誠にあやふい事でござりまする。是で能う御合點なされませ。主親ほど世の中に目の長い、慈悲ぶかいものはない。あまり結構すぎるによつて、さまざ

まの小言が起る、畢竟腹一ぱい物をたべて、ひだるい目を知らぬからじや。ある人の發句に、

その腹に何が不足ぞなく蛙

面白い句じやござりませぬ歟。是は奉公人衆の事ばかりじやない、所帶を持つたれき〳〵の旦那さまも、皆入用のことでござります。猶あとは明晩おはなし申しませう。下座。

續々鳩翁道話　參之上

喜怒哀樂のいまだ發せざる、これを中といふ。發して皆節にあたる、これを和といふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。これ則人の性と情との德をいうて、道はしばらくも離れられぬと申す事を、お示しなされたのでござります。畢竟性と情と、わけていへど、心の事じや。たとへば性と情とは、水と波とのやうなもので、はなれたものではござりませぬ。風が來て、波のおこるときは、情の發したやうなものじや。風止んで水しづかなるときは、性のやうなものじや。波の外に水もなく、水のほかに波はない。人の性情もこれと同じ事で、所詮動靜の二つで、其實は一つでござります。この性情をかねて心と申します。心の體は性なり、心の用は情なり、心は道なり。さればこそ性は道の體、情は道の用なりとも申してある。これで見れば、人と道とは、離れたうても、離れられるものではござりませぬ。さて此性を知らうと思はば、喜びもせず、腹たてもせず、かなしみもせず、樂しみもせず、可愛がりもせず、惡みもせず、又ほしがりもせず、此七情の發らぬ先は、只何ともない物じや。此何ともない所を性と申して、か

たよりもせず、ゆがみもせぬ故、此徳を中と名づけまする。此場所を見附けたるを性を知つた人と申すのでごまります。しかも見るというて、何も見るらしいものはございませぬ。しかれども、何もない性に、一切の理がふくんであつて、能く萬事に應じまする。かるがゆゑに、中とはあたるとの儀とも申してございます。則これが天命の性、道の大本というてあるのじや。さて情を知らうとおもはば、何ぞ喜ぶ歟、腹たてる歟、事のあるとき、主親は申すに及ばず、世間の人がこれを聞いて、かれが喜ぶは尤じや、腹たてるは道理じやと得心して下さるのは、則情の正しいのでございます。この徳を名づけて、和と申すのじや。和はやはらぎむつまじい事で、人がみな合點してくれる故、和は天下の達道とも申してある。則情の正しいのは、世間へ通用して、指支がないによつて、達道とまうすのでございます。この味を、朱文公がおたとへなされて、ちやうど家のうちに人が居て、西へゆくのでもなし、東へ行くのでもない、何ともない所が性のやうなものじや。さて東へゆくべきときは、東へゆきて西へゆかず、南へ行くべきときは南へゆきて、北へゆかぬが、情の正しいやうなものじやと、仰せられました。さて箇様に、性じやの、情じやの、心じやの、體じやの、用じやの、人心じやの、道心じやのと、申しならべて見まするとも、女中がたや子供衆は、さだめて、御合點もまるまい。また人の腹の中に、棚がいくつも釣りてあつて、それ〴〵の品物が積んである様にも聞えませう。けつして左やうではございませぬ。畢竟何ともない物に、さま〴〵の名を附けたのでございます。されば此道理は、しひて知らいでも、大事ございませぬ。只今日知れた通を、お勤めなされると、此理にかなひまするのじや。こゝによい譬の話がございます。さるかたに學問ずきの人が有つて、毎日先生の方へかよはれましたが、ある日何歟、店でとぎ物をしてゐらるゝ。折ふし宿坊の和尚さまが通りかゝつて、「これは何をしてござるぞ。」「ハイ〳〵とぎ物をいたしてをります。」「それは何をおとぎなさるのじや。」「されば此ごろ、先生に明徳の玉を、さづかりましたが、先生の中されまするは、これは是大切な玉じや。捨てておくと、くもりがかゝる。折々切瑳琢磨というて、ときみがきをさつしやれと、申されました。去るによつて、たゞ今明徳の玉を、といで居りまするのじや」といはれた。ソコデ和尚が、「それは結構なものじや。かねて聞いた明徳の玉歟。ドレ拜見いたさう、見せさつしやれ」と、手にとつてつく〴〵見て、「イヤ〳〵御亭主、これは明徳の玉ではございらぬ。我方でいふ、面向不背の玉といふものじや。さても貴公は、仕合な人じや。隨分この玉を、しんじんさつしやれ。中々明徳の玉とは、天地の違ひじや」といはれました。亭主は合點せず、「イヤ〳〵それでもこれは、明徳の玉にちがひはございませぬ」

と、せり合うてゐるところへ、神主殿が來かゝつて、「これは店さきで、何を爭うのじや。」「ハイ私が明德の玉を磨いてゐますれば、この和尚が、それはちがふ、面向不背の玉じやといはれまするゆゑ、せり合うてゐまする。」神主殿が聞いて、「ドレ〳〵おれが見きはめて進ぜう。見せさつしやれ。ハヽアみな違うた。これは明德の玉でもなし、また面向不背の玉でもない」といへば、二人が口をそろへて、「ソンナラ何の玉でござります。」「サレバ〳〵この玉は、我力にいふまが玉といふ物じや。中々貴さまがたのいふ、玉とはちがひます」といへば、和尚がはら立てて、「ドレ見せさつしやれ、ヤツバリ面向不背の玉じや。」亭主氣をいらつて其玉をひつたくり、「イヤイヤ明德の玉にちがひはない。」神主も目に角たて、かの玉を又引たくり、「ヤツバリまが玉に相違は無い」と、たがひにせり合ひ、あつちへたくり、こつちへ取り、爭ふうちに取りおとして、玉はみぢんに碎けたれば、たゞ世界ばかりで、有つたと申す事じや。ナント味のあるおもしろい話ではござりませぬ歟。チトかんがへて御らうじませ。性じやの情じやの心じやのと、さまざまの名は附いてあれど、其名を取つてみれば、たゞ世界ばつかり、何にもない。ある人の發句に、

踏くだく氷の下に水もなし

簡樣に申しまするとそれは無の見に落つるのじやと思し召うが、落ちたうても、おちられるものではござりませぬ。何じや知らぬが、春になると花がさき、秋になれば紅葉する、柳は綠はなは紅、分別するほど、邪魔になる、柿の木に柿が出來る、桃の木には桃が出來る、鳶飛んで天にいたり、魚は淵におどります。此うまい無造作な味を知らさうと、聖賢君子が齒をくひしばつて、お示しなさるゝけれど、きよろりとして居るにはこまつた物じや。なまなかに分別が有つて、東へ行くべきときに、東へゆかずして西へ行きたがり、南へ行くべきときに南へゆかず、とかく北へ行きたがる。これが天命の性にさからひ、情がねぢれて、正しう發せぬ。ソコデ明けてもくれても、せつない苦しいと、顏をしかめて、泣きあるくものがある。尤かやうな人は日本にありはいたしませぬ。唐天竺には、まゝこれに似た人があるものじや。めつたに油斷は成りませぬ。心學のありがたい事は、名目をはなれて、たゞ何ともない、我なしのうまい所を見附けまして、是にさからはぬやうにいたしまするゆゑ、分別せずして、おのづから樂になります。名を附けて申しますれば、性にしたがふ道が勤まるのじや。さるによつて、無學文盲でも、隨分修行が出來まする。よし又修行はせいでも、氣質のよいお人は、稽古せずして、人の道をおつとめなさる。畢竟銘々どもは氣質がわるいによつて、獨をつゝしむの稽古をいた

さねばなりませねど、全體は稽古せいでもどうせいでも、忠孝はつとまるやうに、うまれ附いてあるのじや。かるがゆゑに、孟子も人の性は善なりと仰せられた。善なれば道に背かう筈はない。されども氣質の善惡によつて、修行をせねばなりませぬ。此事は前夜申したことでございます、幸に稽古なしに人の道をつとめた人がある。序におはなし申しませう。周防國吉城郡岩淵村と申しまするは、卽長崎街道小郡驛と宮市驛との間に、臺道村といふ、間の驛がございます。此驛より、岩淵村へは八町ばかりございまして、すなはち街道筋にて、長門の國、萩の御領分でございます。此岩淵村に關藏といふ、百姓がございました。女房もあり、高七石ばかりの作をいたされました。しかるに此關藏病身にて、はかぐしく耕作も出來ませぬうへに、わづかの作德なれば、下作にあてますることもならず。もとより夫婦の中に子はございませぬ。兄弟も大勢ございましたれど、ことぐく死にうせて、只今末の弟に伊八と申す者たゞ一人殘りました。これによつて此伊八を、順養子にして、高七石を讓り、關藏夫婦は隱居同前になり、近村より嫁をもらひ受け、伊八に娶合せ、農業を致させました。此嫁の名を、お石と申しまして、年十七歳にて、伊八が妻と成りました。此人後に孝貞の名、關西にきこえまして、太守樣より御褒美頂戴いたされた人でございます。古人の語に、人生れて、婦人の身となる事なかれ、百年の苦樂他人にまかすと、いかさま女は一たび夫の家へ嫁入すれば、身終るまで、夫にしたがふが道じや。さるによつて、其夫の心得次第で、かの氏なうて玉の輿にものり、さはなくとも、衣裝に花をかざり、下女下男多くめしつかふやうにならうやら、またその夫の心得によつては嫁入のとき、長刀をふらせて來た人も、貧苦かんなんにせまつて、身にはつゞれをまとひ、味噌こしを提げあるかうやら、百年の樂しみも苦しみも只亭主の、心得次第でございます。幸に皆さまは、お仕合がようて、結構なお暮しをなさるゝは、ひとへに夫の御恩じでございます。得てわるうすると、この道理も知らず、こちらは貧乏人の娘ではなし、よめ入して難儀する筈はないと思うてござる人が、あるものじや。是はきつい、御了簡ちがひじや。百貫目の身代も萬貫目の身代も、亭主の了簡が、ひとつくひ違ふと、たちまちちんからりで飯たかにやならぬ樣になります。是じやによつて、隨分御亭主樣を大事におかけなされませ。扨かのお石は、嫁入してより後、舅姑によくつかへまして、眞實の親のやうに介抱をいたされます。それのみならず、常に夫伊八にしたがうて、農業のたすけをなし、其實體なる事、近所の人も目を驚かす程の事でございます。しかるにかの伊八といふは、生得心ざまのよからぬうへ、兄の家督を繼いでのち、お石を娶りてより、いよ〳〵身持よろしからず、第一に農業をきらひ、高七石の作を、女

房一人にうち任せ置いて、その身は小商にかゝり、のみ酒屋をしては、人に賣るより、己がさきへ飲上げてしまひ、古手屋をしては、博奕の算用に取られ、菓子屋をしては損をし、豆腐屋でも損をし、其くせ短氣の生附で、かりそめにも喧嘩口論、人のむすめに、疵附けては、ぐずりあるき、尤驛近いところなれば、常に驛場にたち入り、たゞのら〳〵として、明けてもくれても女房ばかり、責めせたげて、猿つかう樣に追廻し、日々に困窮にせまる、誠に氣毒千萬な惡黨ものでござります。これに依つて、居村は申すにおよばず、隣村近村身ぶるひたてて、疫病神の樣におぢおそれ、實にもてあましてゐる。されども、お石は少しも恨みず、一言も口答せず、千辛萬苦して、舅姑のかいはうと、高七石の農業と、亭主のわるづかひの尻ぬぐひに、日をおくること、およそ六ヶ年ばかり、ナントめづらしい、ありがたい女中ではござりませぬか。是に附いてをかしい話がござります。去る所の下女が、香の物鉢をとりをとして割りましたれば、内儀が大聲をあげて、「おりん何をわつたのじや。」「ハイかうのもの鉢を取りおとしまして、大きに不調法でござりました。」「ナンヂヤ鉢をわつた。其鉢がおまへの二年や三ねんの、給銀で買へるもの歟。先度も大事の茶碗をわつて、又けふも鉢をわつてじや。ソウ片端からわつて貰うては、こちの身代は半季もつゞかぬ」とわめくを聞いて、御亭主が、「コレ〳〵どうした物じや、そなたはとかく、仰山なもののいひやうする。世間體もわるい、チトたしなましやれ。すべて女といふものは、何事もやさかたに、小さう取りなしていふものじや。おれが此間江戸から歸りがけに、原の驛でとまつて、朝立しなに、草鞋をはきながら、テモ富士山は大きなものじやと、いうたれば、宿屋の下女がいふには、イエ〳〵、あのやうに、大きう見えましても、半分は雪でござりますというた。兎かく女子は、かうやさしう云ひたいものじや。そちがやうに、かりそめにも、仰山に物いふと、女子らしうなうて、聞えがわるい。已來チトたしなましやれ」と、叱りましたれば、内儀が頰ふくらして、「其くらゐな事、わたしじやとて、知つてゐます」と、せり合てゐる處へ、懇意の人が見えて、「これは八兵衞さん、此間江戸からお歸りと承りましたが、先御機嫌ようて、おめでたうござります。定めて長の道中、おつかれも有うと、ぞんじましたに、お見うけ申せば、能う肥えてお歸りなされた」と、挨拶するのを、内儀が横合から出しやばつて、「イエ〳〵あの樣に、ヨウこえて見えますのは、半分は垢でござります」といはれた。ナント出來のわるい内儀ではござりませぬ歟。得てわるうすると、コンナ女中があるものじや。我身の恥になる事も知らずに、亭主のわる口を、近所合壁へいひまはる、鹿島のことふれ、山の神の御詫宣には、こまり入つたものでござります。おたがひに腹の中を

さがして見て、亭主のわる口をふれ歩行はせぬ歟、かしこがつて出しやばりはせぬ歟、頻べたをふくらして居はせぬ歟と、吟味するが肝要でございます。扨かのお石の親里は、相應に暮して居りますれば、これまで度々聟の伊八へ、金子も用立つてやりましたれど、淵へ鹽を投込やうにて、何ほど入れ足してもやくにたゝず、其うへ娘が、艱難辛苦するを見て、親の心には、いかにも堪られず、お石を呼びにやり、二親が異見して、「幸に子もなし、緣を切つて歸れ」と申しますれど、よく心得たる女にて、「全く夫伊八の身持のわるいは、私のつかへやうの、能ないのでございます。いづれから申しても、痲につるゝ蓬とやらで、一方が直なれば、おのづからまつ直にならねば成りませぬ。伊八どのの心得違の、直りませぬは、ヤツパリ私のわるいのでございます。其上伊八どのはともあれ舅姑御は、この上もない、けつこうな二親じや、伊八どのがわるいと申して、ふり捨てて歸られるものではございませぬ。只此まゝに捨ておかれて下さりませ」と、其志いたつて正しうございますれば、里の親たちも、せん方なくて、このまゝに捨置いたら、後には困窮にせまり、緣切つて歸ることもあらうと、これより後は、一向におとづれもせず、又無心もきかず、ひとへに困窮に迫るを、待つてゐられましたと申す事じや。詩にいはく、桃の夭々たる其葉蓁々たり、この子こゝにとつぐ、其家人によろしと見えまして、こゝにとつぐといふてあるは、嫁入する事でございます。朱文公も、此註に、婦人嫁を謂ひて、歸といふとございまして、よめ入して夫の家へゆくのではございませぬ、歸るのでございます。およそ女子は、一たび嫁しては、夫の家を家として、外に歸るべき家はない。されば此石女が親里へかへるまいといふは、歸るべき家がないによつてじや。しかも此人學問をして、この道理をわきまへ、歸るまいといふのではございませぬ。發して節にあたる情の正しい處で、則天下の達道でございます。誰が聞いても尤と存じまして、一言も點をうつ事は成りませぬ。其根元は、天命の性にしたがひ、本心の指圖通にしてございる故に、無筆文盲でも、か樣の働が出來まする。こゝを以て見れば、あながち學問をせねばならぬといふ斗の事ではない、只本心にしたがへば、自から性情の德があらはれ、忠臣孝子にもなられますゝ。すべて父母のゆるしをうけて、夫の家にいたり、それから後に、さま〴〵の苦勞をするも、又結構な身になるも、皆天命じや。しかれば難儀こん窮にせまるといふても、天命の難儀困窮なれば、遁れんとすれども、遁るべき道はございませぬ。よし無理にのがれて、親里へ歸つても、同じ天地の間なれば、色しなかへて、また難儀困窮する、これが是自然の道理でございます。百人に一人は、夫を見すてて、おや里へ歸り、また外へよめ入して結構な身になる人も、ないではない。され

ども此人、身は結構になつても、心はかならず苦勞する事があるものじや。夫にしたがうて道をまもれば、形は苦勞すれども。心は安樂な。また道をそむいて、身は結構になつても、心の苦勞はたえぬ。ようした物じや。さてかの伊八は、次第に困窮の身と成りましたゆゑ、一足とびのかね儲せんと、無分別をおこしまして、銀主をこしらへ、多くのはうろくをやかせ船積にして、下の關へおくり利德を得んと、やがて自分上乘をして、のり出しましたが、天のゆるさぬ處でございました歟、海上にて難風に出合ひ、船は岩にあたつて碎け、はうろくは微塵になり、その身も海中におち入りましたが、どうやらかうやら、命たすかり、今一人の船頭も、是もふしぎに危きをのがれて、兩人ともにたすけ船にうち乘り、陸にあがりました。伊八は今さら在所へ歸る事もならず、終に其まゝいづくともなく逐電いたしました。かの船頭在所へ歸つて、この事を物がたりましたれば、關藏夫婦お石のかなしみ、申すまでもございませぬ。しかるに在所中は、伊八が逐電を聞いて、かへつてよろこび、疫病神をおくり出したやうに、皆々安堵いたしたと申すことでございます。この伊八が行狀は、天命の性にさからひ、なす處の所作、一つとして惡事ならぬ事はございませぬ。これその情の乖戻するとて、ねぢれましたのじや。さるによつて、人みなこれを忌惡み、五尺の身のおき所のないやうに成りました。これじやによつて、戒愼恐懼し、獨をつゝしむの修行をいたして、どうぞお互に、人の道をはなれぬ樣の用心が肝要でございます。休息。

續々鳩翁道話　參之下

中和を致して、天地位し、萬物育はると、これ則戒慎恐惧、ひとりをつゝしむの功によつて、小人も聖人の域にいたり、其德天地と合して、萬物を生育す、所謂天人一致、萬物一體の理を、おしめしなされたのでござります。畢竟中とは、天命の性をいひ、和とは、性にしたがふの道をいふ。致すとは、修行して推極めるのじや。平たういへば、本心の通にして、少しも背かぬ事でござります。大きういふと國天下もをさまり、小さういへば、一家一身もをさまる。ありがたいことじや。天地位すとは、聖人國を治めたまふ時は、雨風時にしたがひ、天は天の德をあらはし、地は地の德があらはれます。また一家でいへば、親は親のやうになり、夫は夫のやうになるのじや。萬物やしなはるゝとは、五風十雨、ときにしたがへば、人は申すにおよばず、米も麥もよう出來、鳥獸も其所を得て、おのれが生を遂げまする。一家で申さば、家内の諸道具鍋かままで、質屋の藏へもはいらず、道具屋の店へも出ず、おの〳〵其所を得て、その役をつとめます。是がこれその本心にしたがふ歟、したがはぬ歟、この二つのさかひで、天地位し、萬物やしなはるゝと、親子兄弟、はなれ〳〵になるとの、二つに成ります。ナントこはいものではござりませぬ歟。その本は睹ざる所をいましめ慎み、聞かざる所を恐懼れ、わるい分別はおこりはせぬ歟と、腹のうちを吟味する、獨を慎む工夫の、出來不出來によりまする。この道理を合點して、おこたりなう、勤めるが、學問の極功、聖人の能事も、この外にあるのではござりませぬ。どうぞ本心におしたがひなされ、精出してお勤めなされませ。ある人の歌に、

あすもまた朝とく起てつとめばや窓にうれしき有明の月

わが心學の得方にとつて見ますれば、味のある面しろい歌でござります。チト考へてごらうじませ。さてかのお石が親里には、折もあらば、むすめを取りかへさうと、考へて居りました處に、幸このたび、伊八が逐電したと聞附けましたゆゑ、よい緣の切所と早速に娘をよびよせ、「すみやかに離緣してもどつて來い、もし此度も緣をきらず、親の詞に背かば、餘儀なう勘當せねばならぬ」と、おどしかけて責めますれば、お石は、興のさめたる顏にて、「御勘當はかなしけれども、夫伊八のゆく方へ、知れませねば、誰にことわつて緣を切つて、歸りませうぞ。何事も私の不運、今更里へかへりましては、舅姑御の介抱は、何人が致しまするぞ。これからが嫁の入用、身を粉にくだいてなりとも、夫伊八と二人まへの孝行は私がせねばなりませぬ。お詞

をそむきまするは、不孝なれども、此儀は御ゆるされて下さりませ」と、中々承知するけしきもなく、これより終に親里と手切になりました。此としお石廿二歳、ナントめづらしい、ありがたい、女中ではござりませぬか。人の親のこゝろは闇にあらねども、子をおもふ道にまようて、世間にはこれに似た無法な事をいうて、娘に縁をきらす親達があるものでございます。子もまたうろたへて、親のことばにつき、義理も法もうち忘れて、縁をきつてもどる上に、猶へらず口をたゝいて、親の詞を背かぬが、子たる者の孝行じやなどと、利口にいうて居る人がある、氣毒なものじや。孝經には父に爭ふ子あるときは、則身不義に陷らず、かるがゆゑに、不義にあたつては、子もつて父に爭はずんばあるべからずと、見えまする。今お石が父母に爭ひ、勘氣をうけても、伊八と縁を切りませぬが、則父母を不義におとし入れぬと、申すのでございます。しかもお石が孝經をよみ習うた人でもなく、又學者でもございませぬ。しかれども其本心の正しきを守るときは、發して節にあたる、天下の達道、これが中和をいたすと、申すものでございます。これよりお石は手ひとつにて、舅姑につかへ、專ら農業を勉めまする。しかるに天性、顔かたち見ぐるしからず、ことに年も若ければ、居村は申すに及ばず、隣村の惡少年ども、其獨身なるを見あなどり、とかくいひよるものも、多くございますれど、お石もとより、鐵石の志にて、髪に油をもちひず、衣類は膝を過ず、然もまた行儀正しく、人にあうて甚慇懃にございますれば、これに恥ぢて後々はいひよる者もなく、却てその行狀の正しいを、譽める樣になりました。成ほど行儀は大事のものでございます。たとへば、奇麗に掃除して水うつて、チヤント掃きちぎつてある所へは、塵芥を捨てに來る人はない。皆此方の仕向けじや。せけんに埒もない事の出來るのは、みなムシヤクシヤと、行儀がたゝぬによつて、さまぐの塵芥を持ちつける。こはいものじや。御用心なされませ。ある人のうたに、

汲てしれこゝろのそこの井をふかみすむもにごるも我ならぬかは

さてその翌年の年貢も、滯なくをさめましたが、翌年にいたり、舅關藏かりそめの煩より、つひに腰ぬけとなまりした。かばかりのわづらひゆゑ、藥代は勿論、諸入用も多く成りますれば、しうとめに介抱をたのみ置いて、其身はいよ〳〵辛苦して、農業をつとめました。何さま世の中に不仕合な人も多けれど、中にもお石は格別に不仕合にて、其翌年また姑も、同じく腰ぬけと成りました。是によつて高七石の作も、出來ぬやうに成りまするゆゑ、村役人へゆきて委細をはなし、御大切の御田地なれば、若未進等も出來ましては、申譯がございませぬ、何卒お預り下されいと、段々とたのみましたゆゑ、村役人も尤にぞんじまして、やがて下作へ預けてく

れました。お石はこれより僅なる作間をもらひ、晝夜兩親の介抱にかゝりまして、物半日と出あるくことは出來ませぬ。やう〳〵半道一里の使をつとめ、又は臺道村へ出まして、少しづつの小揚にやとはれ、家にあるときは、兩親を左右へねさせて、其身はまん中にゐて、草履わらじをつくり、世わたりの助に致しますれど、女の手業といひ、殊によごれ物のすゝぎ洗濯、何かと介抱に手がひけまする故、はかゞしきはたらきも出來ませぬ。さるによつて、次第に困窮にせまり、朝夕のたべものさへ、漸く兩親へ、粥をすゝめまする位の事ゆゑ、其身はたべるふりして、給ぬ日も、をり〳〵はござりましたと申す事じや。されども猶不自由なる體は見せず、かひ〴〵しく介抱する事、すべて十一年の間、其こゝろざしいよ〳〵かたく、少しも弱りたる氣色は見えませぬ。まことにありがたい女中でござります。子のたまはく、歳寒うして、而うして後、松栢の凋むに後るゝ事を知ると、論語に見えまして、君子も小人も、事のない時は別に替た樣にも見えませねど、困窮にせまる歟、事の變に出合うたときは、小人の悲しさには、利欲にまなこがくらむゆゑ、手あしをはつてうろたへまする。君子の所作は、かやうのときに當つては、いよ〳〵靜にして、少しも騷ぐことはござりませぬ。たとへば冬に成つて、木がらしのふく時分には、草も木も色かはり、葉もおちて、其姿とも見えませぬ。然れども其中に、松や栢は、なほみどりの色を失ひませぬ。これと同じことで、お石が此とし頃の行狀、實に此場所でござります。さてある日、お石くれ方より、人足に雇はれましたが、心いそがはしく、道をせいたれども、餘儀なき用事にて、少し隙どり、其夜四つ時分に歸りました。いつも門口より聲をかけますれば、內よりも返事する、しかるに今夜に限りて返事もなし、これはいかにと內に入つて見れば、兩親はさめ〴〵と泣いてござる。「扨は何ぞお氣にいらぬ事が有つた歟。私の歸がおそい故に、お案じでござりましたか」と、しきりに問へば、兩親の泣々いはるゝには、「我等夫婦いかなる宿業にや。伊八の不所存ゆゑ、困きうにせまり、其上二人とも業病に取りあひ、此年月そなた一人の介抱で、今日までは命をつないだが、今宵そなたの歸のおそいゆゑ、もしや我々夫婦をすてて、親里へ歸つた歟と、ふと疑の心が起るにつけ、よく〳〵思へば、此年ごろの艱難辛苦、中々眞實のむすめでも、是ほどに介抱は、とゞきはせまい。されども、永の年月の事なれば、退屈の心のおこるのも、無理ではない。去ながら、其方が歸てくれねば、明日より我等夫婦は乞食もならず、立どころに餓ゑて死ぬると思へば、たゞ何となく物がなしう成つて、思はずも泣きましたが、能う戻つて來てくれた」と、又うれしなきに、さめ〴〵と泣れました。お石は氣の毒さ、いふばかりなけれど、わざと打ちわらひ、「今夜は餘儀なき用事に

て、すこし道で隙どりましたのじや。たとひ此後いかほど歸りが遲いとても、必心よわい事をおぼしめすな。我身は死んでもこゝろは死なぬ。いつまでも御介抱申して、御先途を見とゞけます。くれ〴〵も心づよう思しめせ」と、とかくいひなぐさめて、藥などあたゝめ、例のごとく兩親のまんなかに居て、咄しながら、草鞋をつくる。程なく夜も更がたに成りましたれば、とくやすめと兩親のいはるゝ故、うすき袷やうのもの引きかづきて、其まゝ其所に寐いりました。ある人の發句に、

我が身に秋かぜ寒し親貳人

ナント哀な句ではござりませぬか。チトかみ〴〵て御らうじませ。扨關藏夫婦は、宵のつかれに一寐いり、寐入ましたが、ふと目をさましてみれば、お石がしく〳〵と聲も立てず、しめ泣きに泣いてゐる故、大に驚き、「何故ぞ」と問へば、「寐て見ても、目があひませぬ」といふ。「それは何ゆゑぞ」と頻にとへば、「されば伊八どの、家を出られてより、すでに六年、里の親たちよりは、緣を切つて歸れかしと度々申されますれど、もとより歸るべき志はござりませぬ。夫のみならず、御大病ののちは、なほさら側を離れてはならぬと、心一ぱい御介抱申しますれど、折々の雇はれ仕事に、手がひけまして、十分に御介抱のとゞきませぬは、まだ私の盡さぬ所があるによつて、親ざゝとへ歸つたかと、お疑もおこりまする。これ全く私のとゞかぬのでござります。どうしたら御安心に成りませうと、思へば寐ても寐入られませぬ」と、いひわけする、詞のうちに、少しも舅姑を恨みまする心もなく、たゞわが身の足らはぬを歎きまする、眞實がみえますれば、關藏夫婦も大に氣の毒に思ひ、とやかくといひなぐさめ、其夜はやうやう、やすみました。實に此一條、一點も父母をうらむ心なく、唯おのれが身をくやみまするは、實にあり難い志、ようわが身に立ちかへつたものでござります。孟子の所謂行得ざることあれば、皆かへつて是をおのれに求むと見えましたるも、これらの事でござりませう歟。さればこの翌日より雇はれ仕事をかたくことわり、只兩親の側をはなれず、近隣の人をたのんで、わづかなる賃仕事を請けとり、其日の煙をたてまする、其艱難困窮、筆にも詞にも、つくされる事ではござりませぬ。あるとき隣の人が來て、關藏へ申しまするには、「此ごろ隣村へ、京都御本山より、御使僧が御下向なされて、ありがたい御勸化がある。ドウゾならう事なら、參詣をさつしやらぬ歟」と、すゝめました。關藏もうちうなづいて、「いかさま伊八が居りました時分は、隱居同前の事ゆゑ、をり〳〵は御法座へも出ましたが、今不自由なからだに成つては、それさへ思ふ樣になりませぬ」と、いふをお石が聞いて、「左樣の思召ならば、とくにもお供いたしま

せうものを、氣のつかぬ事でござりましたし。あすともいはず、善はいそげじや、今日お供いたしませう」といふ。關藏も大によろこび、さらば御法談を、久しぶりで聽聞しませうと、その用意におよびました。則御法談のある、隣村へは、およそ道一里あまり、しかるをお石は、かの舅關藏を脊におひ、姑にしばらく留守をたのみ、やがてお迎に參りまするとて、小兒を負たるごとく舅をおひ、一里あまりの所を女の身にて、かひぐしく通ひまする。尤其道に川もあり橋もあり、とかくして寺へ行きつき、講中をたのみ、かの舅をおろし、堂の隅に、寒からぬやうに、こしらへおきて、是よりまた引返して家に歸り、姑を脊に負ひ、隣へ留守を頼み置いて、ふたゝび寺へたち歸り、講中へあつく禮をのべ、舅姑の二便の世話などし、其身は側にあつて、なでさすりしながら、御法義を聽聞する。さて法話終れば、講中へ姑をたのみ置きて、まづ舅をはじめの如くに負うて、道をいそぎて家に歸り、舅をおろしてねさせ置き、また寺へ姑をむかひに來て、脊におひて、講中に禮をのべ、一さんに家に歸る。すべて一座の法話を聽聞するに、舅姑を負うて、一里餘の道を往來都合六たびにおよぶ。しかも一日の事ではござりませぬ。法座日限の間、雨の日も風の日も、一日も怠ることなき孝順の行狀、見る人驚歎せざものはござりませぬ。されば後々は參詣の人、お石が至孝の志を憐みまして、

多くは、姑を負うて、お石が勞をたすくる人もござりましたと承りまする。猶また人の聞をおどろかしましたるは、かの法座を勤められし僧、お石が日々に奇特の參詣を感じ、講頭植田何某といふ人に、くはしくその來由をたづねまして、名所を書きしるし、法座をはつて後、歸京いたされ、此よし御本山の御聞に達しましたる處、御感稱のあまり、お石へ結構の御菓子一折、關藏夫婦へ、法名を下しおかれ、これを捧持して、翌年またく、かの地へ御使僧御下向に相成り、法座はじまりし處、如例、お石舅姑を負うて參詣に及びましたる故、やがて御命のおもむき申しきかせ、右下されもの頂戴仰つけられましたるは、實にありがたき仕合、これひとへに至孝貞節の德と、隣國まで傳へ聞いて、うらやまぬ人はないと承りました。されば、これらの始末、終に太守樣の御聞に達し、やがて御近臣柳井何がしといふ士に仰附られ、かの地へたち越え、とくと相糺きたるやうとの御命が下りました。さるによつて、柳井氏、卽刻小郡驛へ發行せられまする。道中すぢ、驛々にて繼立の人足に、かならずお石が事をたづね問はれますれば、皆こたへて、たゞ一口に奇妙な人じやと申します。いかさま遠國邊鄙の、ころなきあらくれたる人足衆も、此お石が行狀を、見聞しては、わるいとはさすがに思はず、然れども、何と譽めてよいやら、譽やうがないによつて、只奇妙な人じやと申しまするは、尤

の事でございます。實に又金玉の詞をつらねて譽めたりとも、萬が一にもおよびませぬ。所詮言句におよぶところではございませぬ。人足衆(1)口々に奇妙な人じやと申しまするは、實に的當の譽めやうでございます。さて柳井氏、小郡驛にいたり、植田何某を召して、委細にたづねられしところ、きくしにまさる行狀なれば、早速立ちかへつて、此段言上に及びますれば、太守樣ことの外感じ思し召され、關藏夫婦へは生涯貳人扶持を下しおかれ、猶またお石は、萩の御城下へ召しよせられ、御目見仰附られ、御懇命を蒙られしは、實に冥加至極の事ども、身をたて道をおこなひ、名を後世に揚げて、以て父母をあらはすとは、これらの事でございませう歟。さてこゝに奇特なる事は、岩淵村の人は申すにおよばず、近村こぞつて、はじめ疫病神のごとくおぢ恐れ、毛むしの如くにいやがつた伊八を、この兩三年已前より、そろ〳〵其ゆく方を尋るやうに成りましたと申す事じや。其故はお石一人が、身心を碎て、舅姑につかへまする行狀を見るに附けては、せめて、伊八が家にあつて、少しは手助をする物ならば、さぞかしお石もよろこぶであらうとおもふ心より、人々いひ合さねども、小郡驛へ、人足に出る度毎に、かならず往來の人について、伊八が人相骨柄をはなして、かやうの人をば、見あたり給はぬ歟などと、あてなしに、尋ねましたるところ、ふしぎに長崎に居るといふ事を聞出し、やがて村中の人申しあはせ、一兩人伊八をむかひに、長崎へ參りました。これ全く、お石が孝貞、人をして感ぜしむるところより、忌みきらひし者を、はる〳〵迎ひに參るやうに成りまする。さりとては孝行の德は、廣大なものでございます。扨長崎へいたり、難なく伊八にめぐり逢ひまして、「在所へ歸れ」と申しますれば、伊八中々聞きいれず、「所詮かね儲せねば、在所へは歸られぬ」といふ。かの迎に來りし人、委細にお石が孝行節儀を咄しまして、「借錢はともあれ、すみやかに在所へ歸つて、お石が志を助けよ」と申しますれば、伊八これを聞いて大に驚き、「まだお石は居りまする歟」といふ。「居りまする處ではない、その孝順のありさま、見て居られぬ故、貴樣をむかひに來たのじや」と、無理に引たて、在所へ歸りましたる處、在所中、大騷の最中、「何事ぞ」と問へば、「只今萩の御屋形より、お石が御褒美を頂戴して戻つた處じや」といふ。さしもの伊八これを聞いて、腸を洗ふがごとく、慚愧後悔して、これより本心にたち返つて、よい人になられたと申すことじや。是ひとへに、お石の孝德他に及んで、此奇特があるのでございます。德孤ならず必隣ありの聖語、今さら思ひあたつて、驚くばかりの事でございます。されば此事隣國遠境に聞えまして、小郡驛御通行の御歷々さまがた、御本陣へお石をめされて、御目見仰附られ、御銀おびたゞしく下し給はる事、度々とうけたまはりました。中にも奇特に覺

えましたるは、小野何がしといふ人、お石がことを傳へ聞いて、十四歳になる娘をつれて、はるゞ〳〵岩淵村に尋ねきたり、お石に對面におよばれしとき、かのむすめのよまれたる歌とて、

立よりてしばし成りともならはばやおやにつかふる人の心を

ナントやさしい志ではござりませぬ歟。習うてよいものは忠臣孝子の心、習はいでも大事ないのが、髪のかざりや衣裳の端手じや。すべてお石が此十一ヶ年の行狀、よそから習うて來たのではない、性にしたがふの道を、盡したのでござります。此性お石にばかり有るのではない、お互に具はつてある、生れつきの心じや。さるによつて、今にもあれ、志を起して勤めるときは、誰しも出來ぬ人はござりませぬ。忠孝の出來ぬといふのは、出來ぬのではない、せぬのじや。子曰はく、仁遠からんや、吾仁を欲すればこゝに仁いたると、仁は善の總、心の全德、物を愛するの理、孝行忠義は、直に仁じや。仁其まゝ人の性じや。性則うまれつきの心といふ事じや。されば孝行忠義を、勤めようと思ふと、何時でも勤まるのじや。此結構な本心を持ちながら、うろ〳〵として、一生を終るは、口をしい事ではござりませぬ歟。これについて、よう似たはなしがござります。山家から、はじめて京へ奉公に出た下女が、夜になれば、行燈をともすといふ事を知らず、内儀のさし圖で、暮がたに行燈に火はともしたが、只手にさげて、うろ〳〵と、臺所や座敷を、持ち廻つてゐる。内儀が見つけて、「ナゼ臺所におかぬのじや」と叱つたれば、下女ぬからぬ顔で、「もし闇がりに置いても大事ござりませぬか」といはれた。ナント味のあるはなしじやない歟。どうぞ一たび、本心の明を見知つておいて、自由自在にくらがりを照す樣に、いたしたいものでござります。朱文公觀書の詩に、半畝方塘一鏡開。天光雲影共徘徊。問渠那得清如許。爲有源頭活水來。チト御かんがへなさりませ。下座。

松翁道話序

君子之道は費而隱也。隱とは天理の本體、費とは天理の妙用也。夫山川河海人間鳥獸蟲魚艸木、有情非情皆天理の妙用にして、人は孝弟忠信、鳥は空を飛び、魚は淵に躍りて、各々道を行ひ法を說かずと云ふことなし。程子所謂道之外無物、物之外無道、是天地之間、無適而非道也。松翁子爰に見ることありて、神儒釋老の格言より、狂言綺語に至るまで、普く執り用ひて、諸人を敎諭せること、其志至つて深切也と云ふべし。翁、姓は布施名は矩道伊右衞門と稱し、また松翁と號す。京師松原の邊りに住り。嘗て我石門の敎を尊信して、家大人及び富岡先生に親炙して、肆に性理の蘊奧を覺悟すといふ。

文化甲戌之夏五月　　平安　手島堵庵男正揚識

松翁道話初編

卷之上

浪華　八宮齋輯

天明元年丑の夏比、或國の太守樣へ、御出入の町人が、鯉を獻上したれば、その鯉を大きな器物に入れて、御座の間の緣先へ徇取寄なされて、御覽の上、「鯉をたゝいて見よ」と仰せられたれば、近習衆が鯉の脊を扇でちよつとたゝくと、忽ちはち〳〵〳〵とはねる拍子に、側あたりへ水が散々にこぼれた。殿樣莞爾と御笑ひなされ、「皆能う合點が往たか」と御尋ねなされても、各々はつというたばかりで、何の事やら合點が行かぬ。夫で殿樣仰せらるゝは、「先斯見た處では、此器物は一國の姿よ、中の鯉は一國の主にして、水は一國の民百姓じや。よつて一國の主が我まゝに身うごきすると、他國へ水がこぼるゝ、愼まねばならぬ。國の主ふつゝしみなる時は、他國へまでも、恥をこぼさねばならぬ」と仰せられた。是甚だ有難い御示じや。一軒の內でも旦那殿が不行跡なと、世間へ恥をふるまふ。恥ばかりじやない、金銀財寶までこ

ほさにやならぬ大事の事じや。學問といふは外の事ではない、爰の事じや。朝から晩まで天地の移り行く有樣、皆教にあらざるものはない。きのふの過を知りて、今日あらため行ふを、則道に進む人といふ。吉凶善惡共に教にあらざるものはないのでございます。

和州久米寺の因緣は、通力自在の仙人が、布さらす女の脛の白いを見て、通を失ひ、落ちたといふ事、此樣な恥さらしな事までを因緣として、久米寺といふを御建立なされた。是何の爲ぞ、末世末代のものへの御教化じや。どの樣な知識方でも、戰々兢々の愼を忘るゝと通力を失ふ、況や今日の銘々共、日々新にの吟味がないと、通力は失ひ通じや。御内儀樣の顏の白いが氣に入ると、親御樣方が麁末になる。是等よつ程通を失うたのじや。夫から家がつぶれる、末世末代の恥さらし。イヤ〳〵こちらは、めつたに通を失うては居やせぬと、思うてござらうけれど、油斷はならぬ。久米の仙人じやとて、どこぞに脛の白い女があらば、通力を失ひたいものじやがと、うろ〳〵さがして來たでも有るまいけれど、ついフィ〳〵と出來心、あぶないものじや。兎角物には取られやすい心じや。じやによつて、どなたも本心を御知りなされて御らうじませ。本心がイヤなら、此樣に動き働くは何の所爲ぞ、御工夫なされて御らうじませ。

一休和尙因緣物語に、「むかし、川が牛へ陷つたゆゑ、今又牛が川へはまる」と仰せられたれば、或人難じて、「川が牛へ陷るとは、どうしたものでございます」と問うたれば、一休和尙、「こなたは知るまいが、前かた其川の水を牛が呑みましたわいの。夫で川が牛へ陷つたといふに、違ひはござらぬ」と仰せられた。面白い事じや。是が是因緣果報の遁れぬ事を能う合點せよと、御示しなされたものじや。

むかし虛空が人を呑んだゆゑ、其報で、又人が虛虛を呑むといふ樣なもので、其虛空を呑んだ人が、又虛空を吹出すと、其吹出された虛空が、又人を吹出し、せんぐり同じ樣な事して居る。卽今、此樣に、ものいうたり、見たりして居るが、いつの間にやら虛空へ這入つて、消えて仕廻ふかと思へば、又虛空から出て、見たり聞いたりしてゐる。どちらが本眞じや知れるものじやない。夫で色卽是空の、空卽是色のというてある。此やうにものいうてゐるが色、いうて仕廻うた跡は虛空で空、空かと思へば又ものいふ、能うした細工じや。所詮人になり詰にもなられず、虛空に成詰にもなられぬ。さうして見れば、何とつまらぬものは此骸じや。虛空が本眞か、此骸が本眞か、どちらが本眞のものじや、ちつと吟味して御らうじませ。先死んだ先の虛空の詮議より、今夜寐た時の骸は何處にあるぞ、どこへやら失うて仕廻うた、其失うた骸も、尋ねる心も、すつぺらぽんと、丸で虛空に呑れたか、消えて仕まうたか、權兵衞八兵衞もどこへ

やら消えて仕まうた。どうも是ばつかりはせう事がない。夫でも夢見るはどうしたものと、とうてござるが、夫はまだ本眞に呑まれなんだのじや。虛空に何ぞ差支が有つて、しばらく其用に遣はれて居るのじやけれども、やつぱり虛空の中へ、這入てゐるに違はない。其證據にや、其夢を實事と思ひ、汗水に成つてかなしんだり、悅んだりして居る。其用が濟んで仕まふと丸で虛空じや、覺はせぬ。是ばつかりは、どの樣に意地張ても叶はぬ。けれども目が明くと、サアしてやつた、我からだ取返したやうに思うて居る。其思うて居るぐるめに、此虛空の御力に預らにや、生きて居る事がならぬ。鼻と口とから往來をなさりやこそ、此やうに見たり聞いたりうごき働く、此自山自在は誰がするのじや。是は誰が手車、お長殿の手車、手車賣の親仁の辭世に、

くるくるとめぐりくるて今こゝに立て置く卒都婆コリヤ誰がのじや

天の車が一周天すると、世界中がうごく、大きな手車じや。夫も知らずに、いかに自由が出來るとて、あつかましい、おれが骸じや、おれがものじや、おれが家じやと、うそはづかしうもなう、能う言はれた事じや。其やうな寐とぼけたものの目を、覺してやらんと、一休和尚七月精靈祭に、

山城の瓜やなすびを其まゝに手向となれや加茂河の水

何と大きな精靈祭じやないか。今年出來た瓜も精靈、なすびも精靈、加茂河の水も精靈、桃や柿や有の實も精靈、死んだ亡者も精靈、生きて居るものも精靈、祭る人も精靈、此精靈達が打寄つて、無心無念の御對面、扨々有難やと思うたばかり、たゞ一體の精靈祭、則是を一心法界の說法ともいふ。法界則一心なるゆゑ、一心則法界、草木國土悉皆成佛祭といふものじや。何と面白い道理を、こしらへたものじやないか。此道理の合點の行かぬ人は、毎年毎年西方十萬億土から、はるゞゝ御出でなさる樣に思うて御馳走申すはよいけれど、此暑い時分に、節季かけて、御客樣が御出なされて、扨々いそがしいと思へど、せねば氣がすまず、すれば世話しく、十五日の暮合の御歸を、早う御見立申したら、身のいひわけも濟むやうに思うてゐる。すつきり川が牛へはまつてゐるのじや。虛空と此骸と塀切してゐるゆゑ、ねつから合點が行かぬ。聾に淨瑠璃かたつて聞かすやうなもので、とんとわからぬ。

屋根へ上りたれば下りねばならず、井戸の內へ這入りたれば上らねばならぬ。今日の道じや大きに違うたやうに思へど、皆無心境界の働が見えぬ。夫ゆゑ少々銀でもまうけると、此骸の中へ這入る樣に思ひ、又損すると、骸がかけて取れるやうに思ふ。日々あゆんで一歩もあゆまず、

日々喰うて一粒も喰はず、是は誰が事じや。無いもせぬ生死を、ほぢくり出して、難儀してるものへの目覺じや。夫でもやつぱり我がすきな所に、へばり附うとするゆゑ、算用が間違うて、色々様々の事が出來る。此算用違の種を吟味してごらうじませ　種がなうて、めつたに間違は出るものじやない。

此春在邊へ參りました節の噺に、麥に黑穗といふ物が出來る。麥と同じ様な顏してゐるけれど、麥の出來揃ふ時分には、まつ黑に成つてくさつて仕まふ、何の役に立ぬものじや。同じ麥がどうして、此様に黑穗になるぞといへば、去年刈込時に、いまだ熟せぬ青麥がまじりて有るを、一緒に取込んだものじや。其麥を蒔く時まじりて有つたが、黑穗になるじや。じやによつて、種は大體吟味せにやならぬものじや。今日我思ふ事の自由にならぬは、きのふ蒔いた種が、青麥がまじりて有つたゆゑ、すつきり黑穗になつてくさつて仕まふ。今朝からあなた方も、どの様な種を御蒔きなさつたぞ。もし青麥なら引きぬいて御仕まひなされ。黑穗に成つてからは、役に立たぬぞ。ちつと骨折つて吟味さへすりやよいものが出來る。よいものにせうと、惡いものにせうと、種次第じや。本心を御會得なさつた、御方々の内にも、もう是でよいと思うて、青麥を取込んで御ざる御方々はないか。黑穗に成つてからは役に立たぬ。序に是も御清落なさつて下さりませ。

近在百姓衆じやが、能心得た人があるものじや。子供が三人ある。宗領は百姓を仕込み、弟二人は近在へ丁稚奉公に遣る、中息子は大工の所へ奉公にやり、末子は米屋へ奉公にやる、丈夫なものじや。何ほしくじつても氣遣げがない。骸に覺えた事は賣る事もならず、急に質に置く事もならぬ、夫でせう事なしに身業が出來る。やぶ入に兄弟寄合うても、農工商あるゆゑ相談が出來やすい。是等は種を吟味するのじや。黑穗にせぬ積じや。また奉公するにも、子供の時から大家にうかゝ暮したものは、どうも仕様のないものじや。よい事ばつかり見習うて、ちと智惠づく時分に手代になりて、子供々々と灰吹たゝき、御公家様の落胤の様な心持に成つて、氣ばつかり高ぶり、自身は其様にも思はぬけれど、いつの間にやら高い所へ上りてゐる。天神橋の眞中まで行て見ると、大屋根の上にあがりてゐると同じ高さじや。けれど夫程には思はぬ。よつほど足もとに氣を附けぬと、思の外高い所へあがりてゐるものじや。さうなると、おとし穴へ踏かぶる下地じや。その踏かぶり所といふは、先鍋燒貝燒すつぽん汁、美しいとうろう鬢の女中が、にたゝ笑ふと咽がかわき、どうぞ仕様はない事か、山寺の御小僧は、豆腐は喰ひたし錢はなし、百兩の突留に、あゆみをはこぶ垢の身の、金相場米市と、段々立身出世し

て、終に身なげ首くゝり、滿眞とおとし穴へ踏かぶつて仕まうた。きのどくなものじや。よつて大家に御勤なさるゝ衆は、大體此身に立歸る事を御稽古なさらぬと、滿足には勤り憎い。又大阪東堀に、或富家の息子殿、十二三才の時分から、京都の先生の方へ、月々十五日づつ預け、下男のかはりに、めし焚いたり、水を汲んだり、庭廻さうぢしたり、一ケ月を京と大阪と、十五日づつの勤じや。夫でなければ、大家の旦那に成つて家は持たれぬ。事長者知らねば、終に我まゝが出て、家をつぶして仕まふ、是等は親御の有難い思召じや。

河内の金岡新田に、源七樣といふ人がある。其下百姓に五兵衛樣というて、夫婦ともかせぎの百姓、子供が二人ある。其子供を奉公に出すに、親方を聞合してござる。隨分喰物の惡い仕著の惡い、むごう使うてくれる親方へ、奉公に出して悅んでござる。盆正月の藪入前には、子供の御主人へ行つて、「こなたの御勝手に藪入をさしなさつて下さりませ。」親方がいつ比にやらうといはしやると、又弟の奉公をしてゐる御主人へ行つて、「あなた樣の御勝手が大事なくば、いつ比に藪入をおさしなさつて、下さりませぬか」と尋ねて、もし其日差支があれば、兄の親方へ行き、日を延べて、兄弟一所に藪入する日を究めて待てゐる。扨兄弟一所に藪入すれば、無事な顏見て悅び、馳走にきらずめしを焚き、其めしは米二分に、きらず八分ぐらゐにして、自身も喰へぬものこしらへ、兄弟の子供にする。汁は赤味噌の眞黑な汁に、ちんからりか、鹽物ならば、鹽のからいを燒物にして、「さあ〳〵祝うて下れ」と、自身も一所にすわり、うまさうに喰うて見せる。二人の子供は一向喰へぬものなれど、是非なく少づつ喰て仕まひ、「扨是から氏神樣へ御禮に參る序に、一家中同行衆の禮も、仕まうて來る。其留守中に菜をたんと入れ、きらず雜するを焚いて置け」と、女房にいひ附出で行く。其御内儀樣が近所へ行つて泣いてござる。「けふは子供が藪入いたしました。一年一度の藪入に、かあいさうに、きらずめしに、ごとみそ汁、どこでやら喰はれもせぬ、ごとみそをもらうて來て、夫を焚いて喰すのじや。先程子供がめし喰ふ間は、よう見てゐませなんだ、裏へ出てゐました。あの樣なむどく心な人も、めつたにないものじや。夫に戻つてから喰ふほどに、雜粥焚いて置けというて置かれました」と、近所のばゝかゝ達が泣くらべじや。さて親仁樣が子供をつれ戻り、「さあ〳〵腹がへつためしを喰ひませう」と、膳にすわれば、菜ばつかりの雜するじや。兄弟ながら其雜粥を喰て仕まひ、弟が、「兄さん今夜泊らんすか。」「いや〳〵今夜は去ぬ。」「そんならわしもいがる」と、一夜も泊らずにげて去ぬ。跡で涙をこぼしてござる。「其殘つたきらずめしも、雜するも、米を入れて焚直し、乞食にやつて仕まやれ。」在所の乞食さへ能う喰はぬものこしらへて、子供に喰すのじや。きつい

吟味の仕様じや。此くらゐに種も吟味せにや、人蒔いて人は出來ぬ。夫で此子供が、喰物の悪い、仕著の悪い、人づかひのむごい、親方を大切にして勤めてゐる。皆黒穂にならぬ仕様じや。

松翁道話　卷之中

豆蒔いて豆は出來るけれど、人蒔いて人はどうやら心もとない。どうぞ人になればようござります。弘法大師も心もとながつて、

人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人になせ人

一切の物の種は、コリヤ種にするのじやといふと、跡へ廻して大切にして、よいのを殘す樣にするじやないか、夫に人はあちらこちらで、よいものを先へつかうて仕まひ、悪い種を跡へ殘す樣にする。小言が出來る筈じや。下卑たたとへなれど、香〻物を菜にするというても、尾端の所から喰ふ樣にすると、是非跡へよい所が殘る。又妻子眷屬じやとて怨敵じやない、是程の事は、天地へ御禮我身の冥加じや。それを遠慮なしに、喰物でも、著物でも、よい物から先へしてやるゆゑ、へたくそや、づるけた所ばかり、跡へ殘りて喰ひてがない、冥加しらずと云ふものじや。むかし天智天皇樣は、寒夜に民の辛苦を御歎なされて、御衣を御ぬぎなされたといふ事じや。天子樣じやとて、寒いも暑いも同じ事じやけれども、其御仁徳が世界に行渡りて、天下

太平、五穀成就、萬民快樂の姿と變じた。何と有難い事じやないか。家の旦那殿が無慈悲になると、家内不繁昌、子孫斷絶の姿をあらはす、恐しいものじや。其道理も大概辨へながら、遠慮會釋もなく、よいものから、ずつかゝ遣ひへらし、へたくそや、かぶたの何にもならぬ所を、殘してやるゆゑ跡が行かぬ、身上もてぬ筈じや。さあ〳〵跡の行かぬ樣に、してやるぞしてやるぞ。どうよくなものじや。惡い種は、六根不具のものばつかり出來る。難儀な事じやぞえ。夫にまだどうよくな事がある。折角うつくしう出來上た佛樣を、鬼めがしわくたにして、地獄の釜こげにしをる。是ほど胴欲な事はない。いかに我すきじやとて、可愛さうに、乳呑子の中から芝居へつれて行き、術無がりて泣くものを、ゆぶつたり、乳をねぢ込んだりして、無理無體に見ならはすのじや。其樣にして癖附したものじやによつて、四つ五つばかりになると、芝居事計知らぬ。兄弟ゐる中でも、大口いうたり、あほ口いうたり、にくて口いうたり、うそいうたり、けんくわしたり、横著ばつかり上手で、手習嫌の、わやく太郎、丁内もてあまし代物じや。又女の子は、あたまと顔となぶりものにして、著る物きかへる事を、女子の仕事の樣に覺えて居る。ちよつと寄合うても、芝居のはなしより外は、何にも知らぬ。糸つむいだり、布織る事は、男の仕事の樣に覺えてゐる。皆芝居で學問したものゆゑ、我氣に好いた事して、樂みくらすを、人の道と心得、世帶するすべは知らず、我氣に入らぬと、幾度嫁入仕直しても、恥とも思はぬ、寢息代呂物難儀なものじや。皆當歳子の時から、仕込んだものゆゑ、急に直さうといふ事はならぬ。

夫なら芝居は、狂言綺語の戯を以つて、善道へ導くため、世界の助となればこそ、御上より御免なされてある。善人は一旦、どの樣に難儀しても、終には明立ちて運を開き、惡人は一旦勢強いけれど、どうでも仕まひに首がない。あれが惡人は段々立身し、善人は次第々々に亡ぶ芝居なら、誰が見に行くものはない、貧究の内より忠義を盡し、恩愛切なる所より、義を守り、誠の道を磨くゆゑ、面白いのじや。何にも知らぬ、山家の遠奥の三介お鍋までも、孝行忠義の正しい道理を、能う合點さすためじや、皆勸善懲惡の御すゝめじや。其入用の所は見ずに、わつけもない男と女とはなししたり、逢ひたがるものに逢はれなんだり、本妻嫌うて女郎狂ひする、獄道息子が、女郎へ忠義立てて、我女房賣つて、其身の代で請出してやつたり、皆不詰な事ばつかりを悦んで見て居る。其賣られて行く女房が、我子を殘して行くを、かなしび愁歎するを、同じ樣に、しやくりあげて目をはらし、兄嫁の死んだ時さへ、泣かなんだものが、知りもせぬ他人の事に、すゝりあげて癪おこらし、らつちもない所ばつかりを稽古して戻つた

ものじや。芝居はそこを見せるのじやない。此やうな不詰な事すると、此通に難儀するぞと、人の腹中を、まるはだかにして見せてござるを、すつきりこちのいやうが悪いゆゑ、御家様は女形の髪形地、身ぶりをならひ、旦那殿は立役の身ぶりものまねで、親類の寄合にも、本がこしらへもので、稽古したものじやによつて、眞實な所は一つもない。其薄情な心を以つて、家内を治めうとすゝゆゑ、不實だらけ、追附丁内入かはり〳〵、永うはやらぬはずじや。

或所に大工殿がある。其弟子を仕込ましやる。嚴しいものじや。晝は仕事先一日働き、暮に戻れば水を汲み風呂を焚き、夜食を仕まうと四つ過まで夜業さす。朝もとうから起きて、めし焚いたり、掃除仕まうて仕事に行く。内の息子殿は、けふは頭痛がするというては休み、腹がいたむというては休み、近所の醫者殿に見せる。醫者殿もマア其様なものじやというてござる。夫で大きな顔して、火燵に當つたり寐ころんだり、のらくら遊んでも退屈な、錢もうけのかはりに、近所へ遊びに行き、酒呑んだり、上るり語つたり、だん〳〵とのらが僻附き、毎日々々作病じや。親御達は病身ものじやというて、案じてござる。彌得手にさして、コリヤうまいものじやと、錢遣ふ事ばかりを、仕事にしてゐる。黒穂のなりかゝりじや。醫者殿も氣の毒、どつこも悪うないものに、毎日々々見まうて藥を呑すが、何んの藝もない事じや。どうでも其大工殿と、縁者でも有つたやら、家つぶさしてはならぬと思ひ、御亭主に御咄じや。「扨世にはどう欲な人も有るものじや。我子を庭へぶち附けたり、石になげ附けたり、石でたゝき廻し、顔も骸も疵だらけにする人がある。」「そりやどこの人でござります。」「イヤ外でもない、貴様の事じや。弟子はあの通に仕込んでやらしやれば、こん度はきつと棟梁になるに違はない。可愛さうに、息子殿も仕込んでやらしやれいの。あの様に疵だらけにして、此度世間へ顔出もならぬ様にしてやるとは、あんまり胴欲といふものじや」と、いはれたれば、大工殿が始めて目が覺めた。是が愛欲の、とんぼう返したのじや。可愛〳〵息子は獄道になる、算用づくで遣ふ弟子は棟梁になる、愛のとんぼう欲のとんぼう、顚倒の衆生、犬や猫が子を産んで、かあいがりてねぶり廻し、あんまりかあい〳〵があまつて、喰うて仕廻をる様なもので、かあい〳〵の、とんぼう返じや。いと様の、ぼん様のと、總々がかあいがり、氣隨氣まゝの肝癪持にして、人のする程の事が氣に入らぬ。氣の方の、勞瘵のと名を附けて、喰うて仕まふ。又算用づくでかあいがりて、仕まひは、藝子や役者に賣つて、喰うて仕廻ふもある。皆顚倒の衆生というて、逆様になつてあるいてゐる、大體くるしいものじやない。どなたも足をあげて、手であるいてごらうじませ。目くれ耳くれ鼻くれて、目鼻口から血が出て、

目は見えず耳は聞えず鼻つまり人のいふ事は何も聞えず

難儀なものじや。若い時二度はない、隨分若い時に精出して、仕込んでやつたがよい。年の寄るは取歸はならぬ。親御樣の年の寄るほど、息子殿が達者になりて、後には親御樣を取つてなげたり、ふんだりして、一向手にあはぬ。家屋しき諸道具もなげちらし、雁金文七の、濡髮長五郎のといふ樣な、男達になつて、其樣な息子を持つた親達は、夜の目もあはず、氣苦勞である。親の身になつてごらうじませ、どのやうなものであらうぞ。けふは馬に乘つて引かるゝか、首ばつかりの見せ物にはならぬか、どこぞに身なけ、首くゝりの沙汰があると、聞く度々にあんじくるしむ、どのやうなものであらうぞ。仕合で命があれば、濱納やの御隱居鐵拐仙人のやうなりして、何ぞくだんく。扨此乞食といふものは、たゞ遊んで喰ひたいばつかり、仕事と名が附くと、しとむながる。何んぞ一色賴んでごろじませ、大體恩に著せるものじやない。骨をしみするものは、皆こじきの下地じや。

親の手にあまり者ぞといふ人はあまり物喰ふ乞食とぞなる

黑穗になつて仕まうた。

奢つたり遊んだりした仕かへしに難儀な年の尻が來るなり

物喰うて遊びくらした其かはり末はくはずにかけ廻るなり

何というてかけ廻るぞ。はつちく、くだんく、皆生きた說法、生きた講釋、若い時からうまい物喰うて遊びたがると、此樣なものになりますぞえと云ふ說法じや。殘念な物じやないか。たまたま人と生れて、助かるべき道のあるに、其道を行かず、外道へ行て難儀するとは、よつほど物ずきな事じや。

謗法雜行といふは、皆此外道をかせぐ人の事じや。謗法雜行といふと、宗旨體ばつかりの樣に思ふてゐる。祖師方のは、其やうなちひさいのじやない。人の道に背いたは、皆謗法雜行じや。朝から晩まで、神道儒道佛道、明なものじや。みちは近きにあり、しかるを遠きに求む。天地は書物、萬物は文字、能う氣を附けて讀んで御らうじませ。一切教にあらざるものはない。イヤわしは學文せぬの、手習せなんだのと辭儀する事はない。眼前の諸式諸道具、喰物から、著物から、皆御助の上の御教化じや。道は上下に明なり、書物の中へ這入つて居るを書林といふ。此身はずつぷり、教の中へ漬りて居ながら、見違るのは、こちの不調法じや。ねだりに行く所はない、上町から船場へ行くにも、道によらねばならぬ。道のない所は橋がある、橋のない所は、橋のある所まで、廻りて行かにやならぬ、橋へ廻るが面倒なとて、川を渡れば、水に溺る

る。何ほ面倒でも、橋へ廻らにやならぬ。橋が直に道じや。則教じや。橋の御冥加、善い事聞くも橋、悪い所へ行くも、橋のかけてがある。橋のない所は船ばし、萬事萬端請取渡し、椀から口までの間、物喰ふ箸、火をはさむに火箸、婚禮も橋かけがなければ渡られぬ。踏かぶらぬやうに、吟味して渡る物じや。腹中に無分別を出すも、橋かけて出す。本心を知るも、橋かけてやる、正直なと橋かけ、横著なと橋かけ、賣物買物、安いと橋かけ、高いと橋かけ、物が安いと、知らぬ人まで橋かけてあるく。又物が高いとあそこは高い、止めにせいと橋かけて廻る、正直なものじや。又細い橋など渡る時には、榮耀は出ぬ。こはい所では我なしじや。けれども此細い橋や、細道の所では、めんよう互に氣を急くものじや。向ふから、荷物などかたけて來る、ちつと待つてやればよいのに、餘の所ではぶら〳〵する癖に、斯いふ時に入合はさうとするゆゑ、羽織の裾など引つかけて、善人忽ち變生惡人、わづかな事から、地獄こしらへてくるしむ。大體仕憎い事じやなけれど、仕附けた事ゆゑ、心安うこしらへてくるしむ。何の役にたゝぬ事じや。こつちから橋かけると、向うから渡りて來る、皆此方の陰ぼうしを相手にして、けんくわする樣なものじや。庭鳥に鏡見せると、羽を逆だてて憤る。猫がふき入つた鏡戸へ、己が影のうつるを、相手にして、毛を立て爪をたて、いかる有樣、一切の事が、皆此方の影ぼうし、憎いもかあいも、ほしいも、をしいも、影ぼうし。

世の中は白黑赤く移り行くかゞみひとつはもとの身にして

此もとの身とは何ぞ。たとへば我大切なものを失うた、其時は方々を、さがしたけれど見えぬ。ほつと草臥、其儘にして置いたが、或時ふつと思ひもよらぬ所から出た。其時ほんに、わしがこゝに入れて置いたといふことを思ひ出したが、此思ひ出したは、我が思ひ出したか、失物が思ひ出したか、又我が覺えてゐたか、失物が覺えてゐたか、又失物の出た時に、うれしやと思うたが、此ヤレ嬉しやは、我に有つたか、失物に有つたか、我に有るなら、失物の出ぬ時は、ヤレ嬉しやはない、又失物に有るというなら、失ものは覺え通じやが、ヤレ嬉しやはないはずじや。サア此ヤレうれしやは何ものぞ。御工夫。

萬法と俱たらざるは何ものぞきのふの酒にけふのほたもち

きのふは酒を飲み、けふはほたもち喰ふものを、友とはせぬが、どうして此味を知り分けたぞ。此味を知りわけたものと、御近附に御なりなさると、商内しても、何しても、給銀なしの手代を幾人遣ふとまゝじや。我無我無心で詠むれば、森羅萬象、一切萬物、有情非情に至るまで、うごき働き、我を助る給銀なしの手代殿、何と道理のよいものじやないか。隨分代呂物

吟味して、少し安うしてやると、買た人が、精出して觸れあるく。一文二文の商内も、三百目五百目の商内も、同じ様に、ていねいに、如才なしの我なしにしてやると、世界中が世話やいて、「あそこへ行て買はしやれ」買ひに行かぬとしんきがり、腹立て、世話をする。皆物喰はぬ給銀なしの手代殿が、働いてくれるゆゑに、天地を動し、鬼神を感ぜしむること、神明佛陀の妙感にかなひ、得意先が身になり、家内が身になり、盗人の世話入らず、心安い事で、其だ理詰のよいものじや。どなたもなされてごらうじませ、何にもむづかしい事じやない。いろはにほへと、ならふやうな物じや。あんまり心安い事ゆゑ、皆こはがつて辭義してござる。成程心安い結構な事でござります、けれど私は、親共が嫌ひでござります、イヤ親方が好かれませぬの、イヤ一向宗でござりますのと、色々のいひわけしてにげてござる。其代り何ぞかはつた事といふと見たがる。此度白烏を見せ物にする、馬に翼のはえたを見せるといふと、コリヤ珍しいと、一番がけに飛んで行く。其時には親の事も一向宗もいうてはゐぬ。皆腹中に、かはつた事を好む虫があるゆゑ、變を好むといふものじや。又見せ物の門を通る時、顔に袖をあてて行く御方がある。なぜ其様になされますといへば、イヤ私は錢が無いゆゑ、かんばんも見ぬやうにいたしますというて、顔を隱してござる人がある、此やうな正直な人もあるものじや。是と同じ様な事が大分あるものじや。本心のはなしすると、いやがつて顔を隱して、にげていぬ御方があるものじや。是等は生得に蟲が嫌ふのじや。此やうなは無理にすゝめると、御病氣が起る、止めにするがよい。酒の嫌ひな人に、酒ばなしすると、胸惡がる様なもので、本心は臭もいやと、いふが有るものじや、是はどうも仕様がない。

松翁道話初編　卷之下

人の家での本心はどこぞ、大黒柱じや。是を大極柱というて、神道では、高天ケ原に神とゞまりまして、善事ばつかり集る所じや。

すぐなれば重荷かけても折れぬなり世渡る人の息杖ぞかし

此息杖が、ちつとでもいがむと、直に折れる。大黒柱が息を杖にして、つつぱつてゐるのじや。人では旦那殿が大黒柱、御家様が外大黒柱、息子殿は小大黒柱、夫から段々手代衆、丁稚衆、女子衆と、所々の建柱じや。旦那殿の大黒柱に、少しいがみがくると、そうゞの柱が残らずくるひが來る。又大黒柱に蟲が入ると、屋根裏まで廻る。旦那殿が遊所ぐるひすると、手代殿が小宿こしらへて、女房ぜんさく、丁稚殿が砂綾の帶と、段々蟲が廻はる。こはいものじや。此大黒柱の損じたを、どうしたら直るぞと、大工衆に相談して御らうじませ。一向家を建直さにやならぬといふ。スリヤ大體造作なものじやない。隨分いがまぬやう、御用心なされませ。夫の大黒柱がいがむと、女房の外大黒から直すやうにせにやならぬ。女房の外大黒がいがみかゝると、夫から直してやると、家内和合して、家治る。それも急に直さうとすると、惣々にくるひが來る、大體是には工合のある事じやない。鍛冶屋で鐵を湯に沸すに、消炭の和らかな火でなければ、堅い鐵は湯にならぬ。又眞鍮赤銅のといふやわらかな物は、堅炭でなければ湯にならぬ。一切の事、世話燒が能うなければものにならぬ。聖人神佛其外の祖師方が、痩せこけて御世話なさる。砥石で刃物磨ぐやうなもので、砥石がおりると、いつの間にやら、刃物に刃が附いてあるけれども、なまくら物は、何ぼ磨いでも、見えばつかりで、役にたゝぬ。又鍋尻こそげる炭かき庖丁の中にも、吟味すると、折によいものがある物じや。むかしの太公望は東海の濱邊に、漁人で有つたを、文王の御德で、磨ぎ上げて見たれば、天下第一の名作物になつた。炭かきの中にも、どの樣なものが有るまいものでもない。大舜は片田舍の田畝の中より出給ふといふ事じや。此御方を引上げて御相談なさるは、何の爲なれば、世界中のいがみを直すのじや。錆を落してもらうのじや。又此御方の目から、世界を見れば、やゝ子が髮剃持つて遊んでゐる樣なもので、あぶない事の天上じや。どの樣な事が出來うも知れぬと、ひやくくく思ひ通じや。其心ならこそ、あの御世話が出來た物じや。中々伊達や名聞で出來る仕事じやない。此やうな御方々が、世に出で御世話なさりやこそ、何にも知らぬ、今日の銘々共、腹ふ

くらし、上股打つて寐起するも、コリヤどこからして下さるのじや。ちつと考へても見たがよい。つひに情らしい事して人の爲になつた事もなければ、人を救うた覺もない、また世界の害となり人を損うた事は多い。さういふ代呂物が今日を安閑とくらしてゐるはどうしたものぞ。あんまり結構過るゆゑ、返つて不足ばつかりいうてゐる。其筈じや、何をみても、何を聞いても、ものの道理がわからぬ故、難儀なものじや、聖人の、神佛のといふと、人に尊敬せられ、結構なものとばかつり思うてゐる。あなた樣方は、大體御苦勞なものじやない。どうぞ天下太平五穀成就萬民飢ゑず寒えず、うろたへぬ樣にしてやりたいと、思召して夜の目もあはず、此事ばつかり、御苦勞じや。勿體ない事なれど、天子樣でも將軍樣でも、御大名樣でも御役人樣でも、此事ばつかり、皆天下國家の爲に、御苦勞遊ばさるのじや。又此思召のない御方樣方は、かはり立てて、外の人に勤めて御もらひなさる。スリヤ大體大切な事じやない。孟子曰く、大體に從ふを大人と云ふ、小體に從ふを小人と云ふ。此大體に從ふとは、天地の爲に御苦勞なさるゆゑ、大人といふ。則今日の神樣佛樣じや。さるによつて、諸人有難がつて、尊敬する。又小體に從ふとは、我ひとり前の喰飲の私事に心をくだいてゐる。中々世界の事所か、壁隣の事でも構やせぬ。大體氣強い者じやない。じやに依つて我まゝ氣まゝは、世界の騷動のはじまり

じや。夫を不便に思召して、人には人の道ある事を教へて御ざるけれど、其道に寄る事が嫌ひじや。なぜなれば、我まゝが出來ぬゆゑじや。其我まゝは、何程結構なものじやと思へば、やうやう此五尺の骸だけを、氣隨我まゝにするのじや。夫で道によると、どうやら窮屈な樣に思うてゐる、夫が大きな間違じや。この道によらぬものほど、窮屈な不自由なものはない。其樂とする處は、どのやうな事ぞ。ちよつと寄合うても、世間ばなしか、芝居ばなしか、或は喰飲の咄か、損德の事か、自慢するか、人をそしる事か、色欲のはなしか、人をうらむか、一だん下りては酒呑むか、博奕か、けん嘩するか、我身勝手ばかりいうて、腹立てるか、大體是ほどの事斗しらぬ。不自由なものじや。是等は人の恥とする所なれど、仕附けた癖なればなんとも思はず、是が人の道の樣に思ひ詰めてゐる。すつきり、此樣な無益な事に、暇を費し手足を費し、うからくくらすゆゑ、けふの仕事が明日になり、今月の仕事が來月になり、今年の事が來年に成り、此世の事が來世に成り、せんぐりにおくれて行くゆゑ、手廻も惡くなり、貧乏もする筈じや。けれども此外というては、何にも知らぬ。是非もない事じや。夫故物事退屈してさびしがり、隨分出來のよい時が、瞽女座頭呼んで、親類打寄り、酒など呑むか、或は上るりかたり賴んで、同じ友達招き合ひ、小首傾け、泣いたり、笑うたり、仕まひは大かたあら

そひじや。錢の入る事ばつかり。夫で何をいふも、金の事〳〵と寐言までいうてゐる。なんと樂のすくない、不自由な物じやないか。能う思ひ廻して見れば、我身ながら、不便千萬なものじやぞえ。天王寺の、沈香屋見世に、狗が看板に出てゐる。菓子を見せると、悅んでわん〳〵泣いたり をがんだり、尾をふつたり、色々の狂言する。錢見せてはよろこばぬ。たゞ、菓子がほしいばつかり。銘々共に儉約ばなしや、本心のはなしすると、氣がつまつて面白うない、抹香くさいというて寄附かぬ。又芝居ばなしや、おごりばなしで、酒呑んだり、自慢したり、よい物著て、ボン〳〵をどり廻ると、よだれ流して御きげんじや。錢より菓子を悅ぶ方じや。どうでも、喰には附き安い。家相續は氣詰な、やつぱりつぶして仕まふ方が御すきじや。よつぽど大病じや。立煩は、本腹が出來憎い物じや。どうして此やうな病人が出來たものぞ、御考へなされて御らうじませ。

本心と私心とのはなし。本心は萬物を能造化するゆゑ、世界の主じや。其弟子に私心といふがある。永々本心の弟子と成つて、大體自由も出來るくらゐに成つた。夫で「私も萬物を能く造化いたしますが、ちつと造化して見せまゝうかい。」本心が「否々汝愚癡にして、自身智惠ありと思うてゐる、大きな了簡違、かならずその意を發す事勿れ　といましむ。なれども、私心が本心の命を背き、萬物を造化する、先始に人間を造化して見たれば、天窓が大きうて、骸の小い、目大きにして耳の小い、鼻は獅々舞鼻で、口はとがり、手が大きうて臂細く、足小うして膝大きく、脊骨有りて腹なく、言ふにいはれぬ不器用なものを出來した。私心もあきれて、「コリヤどうじや、本心の教のとほり、少しも違はぬ樣に造化したが、どうして此やうな、變物が出來たぞ。」本心曰く、「汝我教を請けるといへども、其教を請たる所に過不及あり、夫ゆゑに、斯の如き不具なるものを造化する、是汝が自業自得にして造化の私にあらず」といつた。斯ういふ事が何ほもある事じや。隨分よい事じやと思うても、我一存でする事は、大きに嚙違出來る物じや。我こそ本心會得したと思ひ、めつたに世間を欺語あるき、世界を變物にする事がある。實に勿體ない事じや。片輪にしては取返がならぬ、大事のことじや。どなたも能う心得て居ておくれなされ。此樣に生きてゐるゆゑ、天命で生きてゐるゆゑ、自由が出來る。此自由を我才覺ですると思ふゆゑ、我まゝをする。此我まゝと天命と、混亂にするゆゑ、色々樣々の化ものが出來る、家を治むるも身を修むるも此道理で、もつともらしい所もあれど、又我まゝ非道な所もある。其天命に背いた所が變物と成り、憂ひ災難困窮飢渴と、形の上にあらはる。皆私心の造化した所じや。眞實に我を離れぬ仕業は、役に立ぬといふ事を能う御究めなされませ。此片輪

ものの次手に、前方京都西洞院四條上る町、かまきり山の丁内へ、丑の十月十日の夜、三才ばかりな子を捨てた。其捨てた子は、瘖聾、盲の痿じや。何と珍しい片輪ものを捨てた。御上へ申上げたれは、丁内へ御預け、「もらひ人のあるまで、養育して取せ。」「ハイ〳〵畏りました。」丁内難儀じや。此やうなものを、誰がもらひに來るものでと、思うてゐたが、ふしぎなものじや、貰人が出て來た。西岡樫木村の、百姓十兵衛年頃五十ばかりの人が貰に來た。丁内悦び、「どうした事で、あの樣なものを貰うて下さる」と、尋ねたれば、「其事でござります。私は五十年已前、此御丁内へ捨てられました、捨子で御ざります。則其時御丁内が親分に成つて、只今の所へ、御やりなさつて下さりましたゆゑ、今日此通の男でござります。其時御丁内が、御世話なさつて下されずば、定めて犬に喰れてがな、仕まひませう。夫ゆゑ私が產の親と申すは、乍憚御丁内のあなた方でござります。只今では二親も見送り、子供もござります。御影で今日暮しかねもいたしませねば、其子には、乳母取つて育てますれば、何にも苦勞な事はござりませぬ。責めて是程の、御恩おくり致したう存じます」と、いふことじや。夫で其趣を申上げたれば、御上にも、神妙なりと御悦び遊ばされ、直樣もらうて歸られました。何んとふしぎな因緣もあるものじや。又此やうな正直な人もすくないものじや。正直は正直といふ說法、瘖聾で盲目のなへは、六根不具といふ、さんけの說法、皆天地の御直說法じや。若し其やうな片輪ものに成つて御らうじませ。夫も天命なれば、是非もなけれど、大體難儀なものじやない。今日此やうに、どこに一つ申分のない骸に生れたは、有難い事じや。二親の御影、此身の仕合、大體御禮申さにやならぬはずじや。夫を何とも思はずに居るゆゑ、皆手細工の瘖聾、目くらに成つて暮します。かなしい事じや。憎口役に立たぬ、口松よいこと知らぬ瘖どの、身の爲になる異見は聞えぬ聾、藥師樣へ願かけて、御慈悲有つても、我と我手に、聞かぬ聾はどうもならぬ。惡いことは見ならうて、よい事の見えぬ盲目、仕事嫌ひの遊びずき、何にも出來ぬ身は痿じや。此捨子にほつとこまりものじや。もらひ人がなうて、うろ〳〵して居たを先生がもらひに出て、御養育下され、御社中樣方の御介抱で、やう〳〵今日此くらゐまでになされて下さつたけれど、まだ片意地はやみませぬ。

善事を、いふ口と手とそろはざる人は、まことの片輪ものなり。身の爲になる事、いうてくれる人があると、成程左樣じや御尤、あなたならこそ、能うおつしやつて下さつたと、口にはいへど耳へは這入らぬ金てこ、役にたゝぬ事や、人の腹たてる事はいふけれど、よい事は一言もいふことはならぬおし殿、人の非ばかり咎めて、腹立てるけれど、我事はねつから見えぬあき

目くら、商賣不精で仕事嫌、のらくらふなくら骨なしの中風やみ、西洞院の捨子から見ては、よつほど代呂物が落ちてある。よその事かと思へば、やつぱりわたしが事じや。どなたも身に立歸りて、考へてごらうじませ。斯いふ大病を身に持ちながら、其事は棚へほり上げて置いて、立心出世子孫長久、アヽ是何の譫言ぞや。若片輪の子孫が殘りて見たがよい、大體難儀じやない、殺生の第一じや、

立身出世したくば、足もとから勤めて行くのじや。若い御方々、外には何んにも用はない。主人大事、親大事、立身出世ひとり出來る。我まゝ氣まゝの、おごりが止みさへすりや、子孫長久疑なし。又立身出世も女房子にして見せるのなら、よしにしたがよい。一家親類の難儀は見捨てて、少々鼻に手を當てて、たゞ女房子には、活計さすを大きな事と思ひ自慢する。是を鬼窟裏の活計というて、濱納屋の乞食が、正月元朝の禮者を見て、「あの衆達は、此寒い雪降に勤めねばならぬ、難儀なものじや。夫から見れば、こちとらは三ヶ日の食物はもらひ溜めてあり、何の苦もない正月する」と、乞食嗤が悅べば、男乞食が大きな顏して、「ソレ其榮耀は誰が云はすのじや。」所詮金銀財寶女房子の爲に、腐して仕まふ此身を、とてもなら世の爲人の爲に腐して仕まふが、立身出世の天上じや、そりやなぜなれば、主人や親の御苦勞で、世界の物を取込んだ、其算用はどうなると、大概算盤持つにも及はぬ事じや。堵菴先生の辭世に、

君へ忠親に孝行賴みます内と外とのかはりあるまで

かりの浮世にかりの狂言、どうで一度は消えて行く身じや。とてもの事に、本道の勤を御賴み申します。盜人の長命は、刑罪をまつより外に用はない。如何成是大地一遍火坑何因是免。

火の中へほり込まれて、どうして助かるといふのじや。ぐずくしてゐると、燒けて仕まふ。サア助かり樣にどうじやな。時々刻々に、年が寄る、取返はならぬ、其中での助り樣御工夫。此前相州鎌倉の洪水に、我子を流して、兄の子を抱いて居た、女の死骸が有つた、其樣な火急な所でも、うろたへぬ義婦の行跡、御上にも御感心遊ばされたといふ事じや。火に入りても不燒、水に入りても溺れぬ結構なものを、銘々所持して居ながら、わづかなものに替へて仕まふは、あつたら事じや。よいもの著せて、うまいもの喰したとて、格別利口になるものでもない。此種の失せぬやう、子達のある御方々、どうぞ前訓を日に一枚づつなりと、讀しまして下さりませ。天地が御よろこびなさると、則其日の御祈禱、其御子、息才延命じや。皆君子の苗じやあつたらものじや。どなたも損はぬ樣になさつて下さりませ、御賴み申上げます。爲によい事いふ人はいやで、毒をあてがふ人がすき。皆毒物にあてられて、ハアスウくく目前

に苦しんでゐるが。何ぼもあるぞ。片輪にしてからは、取返がならぬ。嫌がるものを、無理に芝居へつれて行く事もない。段々賣買は高うなる、渡世は次第に仕憎うなる、どうして此やうに成つたのじや。皆我まゝ氣まゝに、おごり遊んだ筒尾、則罰の當つたのじや。娘子が鍛入に戻つたら、きらず飯や雜粥でせんたくすると、どの樣な姑御へでも御孝行が出來る。御主人が大切に成りて、何ぼ程其身に德の附く事じや知れぬ。

よい事をいふてもらうて賃取りてそしてせぬのは扨もどうよくむかしから、聖人神佛の御世話は、何のためぞ。どうぞ片輪ものにしとむないのじや。賃ばつかり取りて、せずに居るゆゑ、先生方も、あたまかいて、扨もどうよくというてござるぞ。西洞院の捨子、よその事じやない。身に立歸りて御らうじませ、大きに利益のある事じや。

跋

予弱かりし時、松翁に親炙して、しば〳〵其教を受く。其人となり、慈善懇至にして、實にありがたき君子なりき。こたび八宮のぬし、その嘗てきゝ給へるところを、かいあつめて梓に上し、以て世に廣うせんとす。蓋其言卑近にして、能く近く譬をとり、諄々反覆して人を曉し給ふ。其親切忠告、慈母の幼兒ををしふるがごとし。所謂一片の婆心和盤托出なるものなり。予これを讀んで、實にその人に面するがごとし。我をして、懷舊の感あらしむ。此書、もし世に行はれば、可謂松翁不死。嗚呼善哉。

于時文化甲戌之夏

鎌田鵬記

松翁道話二編序

松翁道話二編成。書肆何某、其始に書せんことを請ふ。抑松翁の人となり、忠厚にして、其人をさとす事、懇切なることは、予嘗て其初篇に跋して是をいへり。今亦何をかいはんや。惟ふに、其言愈〻出而愈〻奇、愈〻出而愈〻妙なる事を。さるに此奇辯妙論は、翁天性の才敏より出づる處といへども、其實は奇を求めずして自奇に、妙を期せずして、おのづから妙なるのみ。他人の奇を貪り、妙を衒ふの類にはあらず。蓋其忠厚懇切の至情より、口にまかせて、おのづから流出するものなり。讀者徒に其奇を愛し、其妙を賞せずして、只其忠厚の情を察し、其懇切のこゝろをもとめば、希は此翁の本色を得て、その教誨のふかきに、背かざらんと、しかいふ。

文化寅のとし初はるの日、南紀の鎌田鵬、京師の曲肱庵に書す。

松翁道話二編　卷之上

むかし「親賣らう〳〵」というて、賣あるくものがある。誰がひとり買うといふものがない。ないはずじや。皆銘々親達を持ち、退屈して、こちの親父樣もモウ極樂まゐりさしやる時分じやがと、いふくらゐで、誰がひとり買ひさうな人はない。時にまた、世には物好な人もあるものじや。宿這入して問もない更世帶、さし向の御夫婦が相談してござる。「何とマア笑止な事じや、賣る〻親御達は不仕合か、息子どのが不孝なか、但子供衆もない人か、何でもいとしいことじや。我等は幼少で親達に離れ、一向親の味しらず、產の御恩を報ずる事もないものじやが、何と人の親でも我親にして、朝夕つかへ、心一ぱい御介抱申したら、すこしは產の親達へ御恩送にもならうかい。どうでも年寄のあるうちは、めつたに家がつぶれぬといへば、家の祈禱にもなる事じや。其御老人方を買うて御介抱してみやうか」と、相談定つた所へ「親賣らう〳〵」というて來る。「さいはひじや、是親買ひませう。ドレみせさしやれぬか。」「ハイ代呂物は内にござります。父親が六十八母親が六十三、隨分達者で代呂物は能うござります。」「直段はなにほど

するぞ。」「ハイ御夫婦で代金百兩じや。」「ヤアそれは高いものじやのう。我等宿這人して間のないものじや、ちつとまけさつしやれ。」「イヤ〳〵現銀かけ直なし、一兩も負りませぬ」といふを、だん〴〵直切て八十兩まで附けた、「デモまけぬ。」「そんなら先代呂物を見せさつしやれ。」「ハイ左やうならば明日どこそこまで御出でなさつて下され。私が迎に出ませう」と約束して歸る。扨翌日金こしらへて夫婦つれ立ち約束の所まで往たれば、きのふの人が待つてゐる。「サア御出なさりませ」と、同道して直に彼の住家へ往てみれば、門がまへ玄關附、是はけしからぬ事とおもひながら、直に座敷へ通りてみれば、扨結構なざしきじや。御茶のたばこのと持ちはこぶ。菓子盆には、山のやうに、菓子を積みて、色々と御馳走じや。暫くすると、御老人御夫婦が出て御挨拶じや。「我々をかうて下さるはこなた衆か、いかい御世話でござる。隨分可愛がつて下されい、たのみます。我々夫婦年寄りて、あと相續する子どももなく、難儀におもひます處、能く買て下さつた。かたじけなうござる。さいはひ田地も少々あり、有銀も百貫目ばかりある。此家屋しきはいふに不及、是をゆづるべき眞實の養子がしたさに、賣りに出しましたを、よう買て下さつたのう。かう親子となるからは、今日から、みなこなた衆のものじやほどに、よいやうにして下され」というて、悅んでござる。びつくりしたが何とうまい物な、親の恩しりたいとおもふ眞實心から、天道樣より御授け下さる榮花の身、猛々のうたひに、我親に孝あるにより、次第々々に富貴の身となりて候。有りがたいことじやぞえ。あなたがたはどうじやな、親に孝あるによるかな、世間に何ぼもあるぞい、百兩所か、一錢も半文も出さずに、親御さまの跡を、大きな顏をしてぬつくりと、丸どりじや。其御禮には強い顏して白眼だり、不返事で買うてゐる、勿體ない事じやぞい。此席には其やうな御方はあるまい。つひに一日親を安心させた覺えもなうて、我子には孝行させて、かゝらうとは、あんまりあつかましいわい。種もまかずにおいて、モウ大こんが出來る時分じやがというて、精出して堀てみるやうなものじや。出來る時分は出來る時分じやけれど、種が蒔かずにある。土ばかりでは出來はせぬ。まんざら種を蒔ぬでもない、すねたりして置いたゆゑ、息子が目むいたり白眼だりする、わるい種を蒔いて置いた、俄に蒔直しもならず、のちには息子どのが、金箱にかぶり附いたり、家をゆすぶつたりして、微塵にぶちくだいて仕まふ。あれほどの種はまきはせぬとおもふけれど、段々日合のかゝつてある事は知らずに、腹立る、とう〳〵家やしき諸道具まで、天道樣に引つたくられてしまひ、夫から何になろやら知れぬ、こはいものじや。其始は親御樣にすねたり、不返事したとゞこほり。

よし野川其水上を尋ぬればむぐらのしづく萩の下露

わづかな葎の雫萩の下露が、後には船さしても、わたられぬほどの大河となる。こはいものじや。みな銘々の好む所を建立する。蔓喰ふむしも、すきぐじや。此夫婦の衆は親ずき、そのほか女房ずき、妾ずき、道具ずき、仕事ずき、のらずき、欲ずき、損ずき、あまい物ずきからいものずき、金ずき、自慢ずき、卑下ずき、癪ずき、年中癪じや癪じやというて、居る人が有るものじや。この外いろ〳〵さまざまの、ものずきがある、みなむしの業じや。その内親ずきが、いつち理詰がよい。次第々々に富貴の身となるが、どなたも御のぞみの方はないか。また、當世養子と跡とりとがある。養子といふは、養育しられた恩を、親へ報じかへすを、眞實の養子といふ。また跡とりといふは、たとへ眞實の子でも、親御の御存命の内から、どうしてこうしてと、思うてゐるがある、是が跡とり、異名を油ねぶりというて、尾が二つにわれてある。また向の身上ばつかり、目あてにして居る跡とりがある。熊坂長範が子どものとき、こがねむしといふ蟲の首を、糸でくゝり、錢ばこの上に乗せて、あそんでゐたれば、そのむしが錢ばこの穴へはひつた。いとを引あげたれば、そのむしが錢をだかへて居た。それからおもひついて、入物の内にあるものを、とる事工夫仕だした、これが盗人のはじまりじや。

子を養子にやつても、實の親の方から、何のかのといふは、みな紐附けて、引ずりもどすやうなものじや。丁どこがね蟲が首綱を引かるゝと、じゆつながりて、何になとしがみつく、其しがみ附いたものぐるめに、引もどさるゝ、能うしたものじや、何ぼち世間にある事じや。其しがみつくものとは何ぞ。或は娘にしがみつくか、錢金にしがみつくか、何なりとしがみついて離しやせぬ。

此前或豪家であつたが、其内へ子どもから、丁稚に來た二才あがり、親かたの娘子にしがみ附いて、離さぬ、難儀なものじや。世間にしては、外聞あしく、夫を内證であつかひ、娘をこじはなしたもある。また娘も銀も家屋敷までも、ひんだかへて、出たこがね蟲もある。これらは長範より咎が重い。また、娘をよそへ嫁にやるというても、同じ事じや。先嫁にやるなら、かならず生きてもどるなと、かたく云附けて、紐を切つてやるがよい。もし腰に紐がついてあると、向の家がありがたうない。それですこし我氣に入らぬことがあると、なんのかのくゝと小ごとをいふ。その度々に親もとから、それはすまぬ、是は聞えぬと、紐を引くゆゑ、娘もうろたへ出し、あちらへ行てはうろくゝ、こちらへいてはまじくし、猿の狂言見るやうに、わけもないものにして仕舞ふ。是が皆ものごと、期にしてする事ゆゑ、不調法なものになつて仕ま

ふ。すべて世界の事はみな期を以てする事なれど、是に二色の品がある。世界のために期にすると、おのれが爲をあてにするとの違がある。これをたとへてみれば、醫者どのが病人をみて、どうぞ此病苦をたすけてやりたいとおもうて、藥をやると、どうぞ此病人本腹さして、我手がらにせんと思うて藥をやるとは、同じあてめで大に違ふところがある。これからモウ二三だんも下卑ては、頭から藥禮をあてにして藥をやるがある。みな同じ藥なれど、病人へ利き道が大きに違ふ。また醫者どのの身にこたへる果報も大きに違ふことじや。みな本をすててするばつかりの算用で居る。

植木の枝や葉に水かけると、根の所へ水かけるとの違がある。麥の穗の所や葉の所へ糞かけると、枯て仕まふ。根本へ糞さへすれば、枝葉迄行屆き、よう實る。

よしあしの枝葉のせんぎ入らぬものとかく心のねを知るもがな

本心を知るといふも、別のことではない。わが本來の本の心を知るゆゑ、枝葉にとり附くまよひがすくなう成つて、心安う家内が治まる、はなはだ利功なものじや。これまでそれほどにも思はなんだ、御先祖や親御樣方が實に大切になる。これが則根に土かふのじや。家内繁昌子孫長久に違はない　一家中から子孫の末迄和合して、萬事に仕あはせがよい。内外の奉公人衆丁稚どのまでが、毎月親里へ見廻狀出すやうになると、親達がよろこび安堵するゆゑ、子も安心して奉公が大切に成る。著物を疊むに、襟もとを持つてたゝめば、心安うたゝまれる事を、をくびや裾を持つてたゝまうとするゆゑ、しわくたになる、親御樣方を麁末にするは、しわくたにするのじや。夫で家内がぐわたつき出す。親捨てう親捨てうと、親を捨て居るのじや。親御樣は座敷へすてられ、つれない事じやというてござる。座敷の小隅や藏の二階で泣いてござる。御亭主が親御を捨てる氣になると、家内中が隱居樣をのけものにして、相手にせぬ。丁稚が隱居へ遊に往たのまで、旦那殿が腹立てしかりつける、「何でうろ〳〵隱居に往くのじや。かさねてから往きをつたらきかぬぞ」と、けん〳〵〳〵と犬の寄合のやうになる。それで丁稚までが隱居樣をけん〳〵〳〵云ふ。隱居樣は捨てられながら、ちつとなと家内のためになりそうな事いうてはしかられ、みなの氣のつかぬことを氣をつけてはしかられ、すたるものをひらひ廻りてはしかられ、「めんよう年寄といふものは、ぐづ〳〵〳〵、役に立たぬ事ばかりするものじや」と、息子どのも嫁も一つに成つて、おだてるゆゑ、隱居樣は、うろ〳〵〳〵してござる。目もあてられぬ、いたはしいものじや。家内の見まつべして儉約するは福の神じやに、其福の神いやがりて貧乏神信心するのじや。不仕合な筈じや。身上が惡うなるほど喧嘩がはじまる、是が

小人の常、たゞ欲深いゆゑ人があいそつかす。天道に見はなさるゝと、ろくなことはおもひつかぬ。たゞ此方の勝手ばかり、身勝手は我まゝ、わがまゝは迷うたのじや。迷ふといふは此からだを、我ものにしたゆゑじや。何ほわがものにしても、我ものにする事ならぬ、だん〳〵年が寄る皺が出來る、白髪にしられたり、齒を拔かれたり、腰をかゞめられたり、長才坊にしられても、ねだりに行く所もない、腹立てることもならぬ。其あげくに死んで仕まふと、燒くか埋むかどうもほかにしやうもない。夫をどうぞ仕やうもあるもののやうに、おもうてゐるゆゑ、何をいふも金のことじや、金がなければどうもならぬと、こやかましうにえかへる。たとへ金銀が澤山にあつたとて、どうするえ、ゆめのごとく幻のごとく、泡のごとく、影のごとき、ないもせぬ此からだを期にしてゐるゆゑ、なすことする事茶碗に一ぱいの水で、大火事消すやうな積ばつかりしてゐるのじや。能う考へてみたがよい。熱に浮かされて、たは言いうてゐるやうなものじや。

外道の法に、此世で火定に入つて、來世の果報を願ふといふことがある。火定といふは、生きながら火の中へ入つて命を終り、來世にわがおもふ通の榮花がしたいといふ願じや。たとへわがおもふとほり榮耀榮花にしたとて、高が二十年か三十年のあひだの事じや。それもきつと慥なこともあるまい。其夢のやうなことに骨をらすが外道の法じや。世にまた知識方の入靜といふことがある。是は格別やうすのあるものじや。これにも樣々の御願力あり事なれど、大體は天地の御心をうけ繼給ひて、大慈悲心をおこし、修し得たる佛心を、末世の衆生に送らんとて、入靜し給ふ事もある。此やうなおかたがたもなければ、世を導き人を救ふ役人がないやうになると、世界が夷國のやうになりて、義理も法も失はせて仕まふ。スリヤこれみな世界國土のための大願じや。おのれ一人前の榮花を願ふ外道の修行とは、大にわけの違うた事じや。此外道の法を、今日の上でみれば、借錢のなるだけ借錢して、世間をあつかひ、其こゝわりにあたまをさげ、腰をかゞめてあやまり廻り、どうやらかうやら、みなが、聞屆けて下さつて、相すんだ。「ヤレ〳〵うれしやありがたい。」これから皺延しに借錢氣のない所へいて、贅八百をいひちらし、さも美々しいすがたをあらはして、活計歡樂とする。これが一旦くるしき火定に入つて、來世の果報を願ふ外道の法と同じ事じや。此やうな廻り遠い果報を願はんより、人には人の道がある、しかも心安い事じや。其道筋さへ、つとめてゐれば、何の氣遣なく、此身はひとり助るやうにしてあるを、知らぬ故、我身のためばつかりはかりて、却てくるしむ。夫ゆゑいつまでも夜があけぬ、暗いものじや。神佛へ參りても、此方から精出して拜んで上げたら、佛さま

がお助りなされて、御悦に此方の願をかなへて下さるやうにおもうてゐる、やつぱり、ためをまつ心が離れぬ、みないつはりの信心じや。佛樣に花をあげるに、根を切つて上げるは、心の根を切りて上げるといふ事で、これが無爲自然にいたる事を勤めるのじや。無爲とはわれも知らずして人を助け、われも助かりてゐる事がある、是が何のためといふを知らぬゆゑ無爲といふ。又有爲とは、わが心に覺ゆるゆゑ、形の上においてくるしみがある。たとへば途中で乞食に錢一文やつても、有難いといはぬと、どうやらふり返りてみる心がある、これが返禮をまつの心じや。有爲の病じや。此有爲の病があるゆゑ、たまゝ〳〵人の世話ふどして、おれがこれほど世話するを、何ともおもはぬというて腹立てる、あつたらことじや。其やうに恩に著せる心なら、始から、世話せぬがよいけれど、有爲を待つの仕業は、みな形にくるしみが附いてまはる。此道理がわからぬと、腹立てる事を年中商賣のやうにおもうてゐる。ソコデ家名も腹立や、朝から晩まで腹立てるが商賣じや。大きな看板かけて、現銀大安賣腹立所、家内殘らず腹の立合、にぎやかな商賣じや。朝むつくり起きると、旦那どのが、ちやんと帳場にすわり、「コリヤ長吉きのふ權兵衞殿の所へ往て何といふたぞえ。」「ハイかやう〳〵〳〵。」「其やうな埒の明かぬことがあるか。今一かへり往てこい。獄道めが」と、朝の間から腹立てかける。「見世の衆も、ちつと氣をつきやいの、おれにばつかり腹立てさせて、何をうろ〳〵してゐるのじや」と、がみ〳〵がみにえかへる。番頭どの口のうちで、「あたいま〳〵しい」と、ぼやくを聞いて、「其やうなぐづぐづした事では埒があかぬ。もつとづつはらたてにや、こちの商賣はいかぬ」というてござる所へ、表へ御客がある、手代衆が「よう御出なさりました、マア御上りなさりませ。」「イヤサ此間買ひました代物、目をかけてみれば貳百目たらぬ。アリヤどうしたものじや。」ソコデ手代衆が「めつそうな事おつしやれませ、あなたの見てござる通、私方では、りんと目を改めて上げましたに違はない。」「イヤそれでも目が足ぬゆゑ戻します。」「イヤ一旦賣附けた物、請けとらぬ」と、たがひにあらそひ、腹の立あひ、所へ旦那どのが出て、「左樣ならば中とつて、折合にいたしましやう、夫で御了簡なされませ。」客もせう事なし、腹立て仕廻つて、相談が究る。全體此うちには請取千木と渡し千木と、二梃こしらへてあるゆゑ、いつでも仕廻は喧嘩になる。あちらむいてゐる人を、足小股とつて突倒す工面ばかりしてゐる。これが有爲の願じや。無理無體に金をもうけんとするゆゑ、無理無體に金がきえて行く、人をつき倒してもと、正直におもひ詰めたものじや。其かはりに腹立てる事は何ともおもはぬ、腹立てる商賣じや。大がい此くらゐの種を蒔かにや、缺落分散心中身なげ首くゝり、子孫斷絶の花が咲かぬ。乞食種でも、貧

乏種でも、地獄種でも、極樂種でも、
蒔かなくに何を種とて萍の浪のうね〳〵生ひしげるらん
よいことでもわるいことでも、たねのとほりに花が咲き、實ができる。

松翁道話二編　卷之中

上土にいつの頃より麥一穗

天地が生ものゆゑ、少もゆるみがない。少ばかり水があればぢきに魚が生ずる。少ばかり土があれば直に草が生ずる。去年正月に神明樣のしめ繩に雨がかゝり、土ぼこりがかゝりて、藁の勢氣が殘りてあつたやら、芽を出したれば、しめ繩に稻が出來たというて、大きに人群集が有つた。みること聞く事直に手足がはえて動きはたらく。人目を忍べど、みる目、かぐ鼻、すこしも油斷はならぬ、おそろしい事じや。

よい事でも、わるい事でも、ふやすが天地の御商賣なれど、わるい事は世界の妨となり、人には大きに害となる。それゆゑ天地の功德が消える、よい事はふえるほど世界の扶となる、ソコデ御舍利樣がふえるといふは、天地ははたらきの大きいことをいふたものじや。わづか麥一粒天地へあづけてごらうじませ、凡貳合ほどで御返濟なさる。一匁がつかひものして、五貫目ほどのため、入れて下さるは、天地より外にはない、天地がための天上じや。物を施して恩に著せ

ぬは天、ものを請けて殖して戻すは地、其ふえたものは人、此三を合して一乘の法といふ。神道では、陰陽冥合、蒔生といふ事、是すなはち、天地自然の御すがたじや。此御姿を如來ともいふ。

如來は如々の中より來るというて、此虚空の内から、によつと出たものじや。見るも聞くも、覺えるも知るも、によ〳〵と殖えるばつかり。今まで何ともない、此所へ扇をによと出せば、扇と知るものがふえた。音がすれば、何のおと彼の音と、知るものがふえて出る。なんと有がたいことが、むかしからあるじやないか。此見聞覺知するものを知りてごらうじませ、目も鼻も身も心も有るものじやない、それでも死んだものじやない。

過去よりも未來へ通るづぼろぼう雨ふらば降れ風吹かば吹け

あくびしたり、くつさめしたり、のびしたり、何と大きな男じやないか。一匁の銀預けると、六十萬億那由多恒河沙貫目で御返濟なさる、慥な借人じや程に、とてものことにあなた任になさりませ。三千世界と同年になつて、天地一ぱいの生佛、よい事がふえるばつかり、其かはりに惡いことも又ふえるぞ。あなた任にしてゐると、よい事ばつかりがふえる。どちらなりと、あなたがたの御望次第。

其ふえたを光明とも御光ともいふ。あみだ如來の御光が四方八方へさしてあると、又世界からも、有がたいというて、御光がさし込む。雙方たがひに、あひさしの御光で持つてあるのじや。あれが片一方斗りじやもたぬ。又旦那どのの御光が家内中へさすと、又家内からもさし込んで、旦那をたすける。御光が強いほど、家内ばかりじやない、一家一門近在近國、得意がたは勿論、諸々國々からもさしてある。江戸長崎中國北國四國九州皆あみだ樣の御光が、あたまのぎり〳〵から、足の爪先まで、足袋となり草履となり、雪蹈ふんどし下駄ゆもじ、手拭頭巾帶著物、鬢附あぶら元結紙、腹は諸國の藏やしき、どこの米食ふも知れぬ。女中がたは櫛かうがい、かんざし丈長其外のやとひ道具、たばこ菓子類酒肴海山里の珍物、かずも限らぬ御光佛、此身はすなはち法身方便の尊像、家内の諸道具八百萬の神達、十萬分身三世の諸佛、みな御光佛じや。よつてあみだ樣に御慈悲の心がないと、諸國から御光を引つたくつて仕廻しやる。さうすると人が相手にせぬやうになると、頬かぶりして、しほ〳〵とひとりあるくは、みな御光のとられたのじや。「權兵衛はどうしたのじや。」「アリヤ此間親方から暇が出た。」「道理でをかしい顔して居ると思うた、本に影がない。」これ光明のとられたのじや。「どこそこの息子どのはどうしたのじや。先頃から内を出てゐる、何としたのじやえ。」「彼じやわい。」「彼とは何じや。」「ハテ馬の

糞や小便呑された。」「道理でいろがわるい。」みな御光のとられたのじやによつて、旦那どのの御光がつよいと、子孫のするまで、光明がさす。此家の主はたれじや、あみださま、法華宗ならば妙法が家主、御先祖が家主、家内は佛壇ぐらし、佛壇の内でけんくわすると、御先祖が家明いひつけさつしやる。御亭主は當寺の住職、家屋しき諸道具は御先祖の什物、一つも麁末にする事ならぬ。すこしでも紛失させたら、住持はからかさ一本で寺ひらかにやならぬ。家屋しきばかりじやない、この體も御先祖の預もの、それを我ものにすると、たちまち無間地獄のくるしみを請くる、おそろしいことじや。余所へ往て馳走にあふもみな御先祖の御光、戻つたら直に佛壇へ御禮申すのじや、忘れまいぞえ。御先祖の宿這入から、今日まで何萬日になるぞ、毎日毎日何萬日の御回向じや。開張まゐりして御らうじませ、神樣や佛樣や祖師樣がたの御一生御持なされた、錫杖のつゑの頭巾のと、みな御身にふれられた袈裟衣の類じや。銘々どもも御先祖御身にふれられた、衣類著そく古じゆばん、手拭きやはん、わらぢかけなど、御命日にとり出して、其ときの御苦勞を、今日のありがたさに、おもひくらべて、大體御禮申さにやならぬ。いづれの御先祖でも、腹の中から錢銀や道具諸式もつて、うまれた御かたもない、みないろ〳〵さま〳〵と難行苦行、人にやとはれたり、重荷持つたり、ひもじいめ寒いめなされた汗あぶらじや。其時の御苦勞の御姿をがまんとおもはゞ、今日丁稚衆のたばこ盆掃除するのや、重荷もつてスウ〳〵いふ衆達を見ておもひ合はし、其苦勞がつもり〳〵て、今日の何屋何兵衛樣じや。

近來茶湯など、もつぱらはやる。是も仕やうに依つて、其家の御祈禱にもなる事じや。其仕樣はどうなれば、御先祖の宿這入なされたときの、古道具をしき一枚茶碗一つ鹽入の水壺のといふ類をとり出し、御命日や御逮夜に家内殘らずうち寄つて、宿ばひりのときの、たつた一つの古茶碗に茶をたてて、をしきには、あられ干飯の口とり、大和風呂にかけ土瓶、摺鉢の水溢も風雅なものじや。床のかけ物は御先祖の御筆のものを表具とし、古じゆばん古帶の切々を集め、一文字風袋となし、親子兄弟夫婦一家親類うち寄りて、御先祖がたの御不自由なされたことを、おもひ出して噺合ひ、今日の冥加を報じつくすを、これを眞の茶の湯といふ。

毎日毎晩でも茶の湯が出來る。世に大切な處の御先祖の御道具で、家内が御恩を報じ盡すのじや。茶の湯も心得がわるいとおごりになり、すこしでも、錢の高い道具を賞翫するやうになり、知りもせぬ人の道具を買集め、方々で身上つぶして來た道具を重寶してゐる、此井戸茶碗は堀出じやのと、不吉なものばつかりを集むる故、終には身上ほりこんで仕まふ。わるいもの

ずきじや。世に大切な御先祖の衣類著そくを、此やうな物は外聞がわるいの何のというて、雑巾にしたり、しめしにしたりする家は、仕廻は終に家屋しき諸道具まで、雑巾や、しめしにして仕まふ。みな御先祖の汗あぶらを、わがものとおもふゆゑ、われ斗利功者になつて、山の大將おれひとり、明けても暮れても、何十貫目の何百貫目のと、銀目ばつかりおぼえて、何十貫目何百貫目、〳〵、寐言にまでいうてゐる。子供が芝居見て戻りに、とてからかち〳〵〳〵と、太鼓もなしに口でばつかり、とんから〳〵いうて居るやうなものじや。人は笑ふがすぢらふが構やせぬ、己は金持じや、かたよれ〳〵と世間へひけらかしたい、難儀な病じや。此やうに、そりかへりて、あるく樣になると、堂島から綱附けて引つこかしかける、天狗のなりかゝりじや、屋根の上へあがりて、アノ雲がかうなると風になる、又どうなると雨になると、雲や風を相手にして、相談してござる内に、貳分五厘五分五厘六分といふ、聲の響に、火のみから、ころりと氣絶して落ちたり、目むいたり血を吐いたり、身代も頓死頓病、夜の八つ時分から起きて何をうろ〳〵考へ出すのじやぞ。わつけもない事、あつたら骨を折たものじや。今日の家業に其半分精出したら、もそつと利功な事が出來さうなものじやけれど、身苛とりが、みいらとりに行く樣なもので、あの人は焦附いたけれど、おれはめつたに焦附きはせぬというて、三百目持つて行きては焦附き、五百目持つて行きては焦附き、壹貫目もつて行きては焦附き、段段衣類諸道具から、家屋しきまで焦附して仕まひ、そろ〳〵一家親類のものまで焦附し、後には、知りもせぬ他人の銀に、歩を出し廻りて焦附かす、いかい世話やきじや。みな此方から焦附に行くのじや。

鶏を竹の皮か、はうろくの裏に附けておくと、蠅がひつ附に來るやうなもので、手足ばつかりひつ附て、ヒイ〳〵いうてゐる蠅もあり、其中に、すこし知惠ありさうな蠅は、にげていぬもあり、又そばへよつたら、ひつ附とおもうて、より附ぬはへもあるけれど、何をいうても、大勢むらがり、にぎやかなものじやによつて、おれや、そばへはよらぬ、遠くから樣子を見るばつかりじやと、自身ばかり、能う合點して居ながらひつ附もあり、又いつそ五體うちつけて、息のせぬのもあるけれど、一蓮托生竹の皮ぐるめに、流れくわんぜう、埼の明いたものじや。能う考へて御らうじませ、米は大切命の親じや。其命のおやに、命をとらるゝとは、どうしたものじやな。又藥は命を助けるものじや。米も藥種も命はとりはせぬ。みな命を助けるものなれど、たゞ何十何匁何分といふ直に迷うたものじや。みな直に迷ひ、名に迷ひ、かたちに迷ふは、みな用ひやうのわるいゆゑじや。愛欲の門違で、命を仕まひ身代を仕まふ、皆方たゝりじ

や。方違の御札、張所が違うてある。銘々きつと胸に張るのじや。金神のたゝりといふも、金の神のたゝりじや。鍋かける所へ釜をかけると、へついが損じる、兩方ながら無理してゐるのじや。身の分限をわすれたが、大きな方たゝりじや。

身の業のよきにうなづきあしきにはかぶりをふるがかしら役なり

よいことにかぶり〳〵して、悪い事に合點々々するのは、首のほねが違うてある。難波へ往にや直らぬ。みな方違じや。雀と鷹と念頃にすると、仕まひは喰はれて仕まはにやならぬ。

聖人のをしへをきかずつひに身をほろぼすひとのしわざなりけり

猫とねずみと酒盛をするやうなもので、あぶない仕事じや。醉が廻ると、どこぞでは、ねずみがしてやらるゝけれど、猫めもとつて喰ふはずの鼠を近寄せて馳走するは、心に何ぞ一物あるゆゑじや。其奥念も知らずに、鼠が猫に手寄求めて、追從輕薄するは、鼠も心の内に大きな望があるゆゑじや。終には身も家も、してやらるゝ、あぶないこはい仕事を無理にしてゐるのじや。

まめは豆同士、あづきは小豆同士、緣組すれば、何の申分はないことを、くるみと豆と無理な緣談をとり結ぶゆゑ、いつでも仕まひに口舌が出來る。くるみの大きな家柄を目あてに、なた豆が嫁入して往たけれど、格式ばつかりで正味の所がすくない、其くせ付屆ばつかりに、張込んで、終には豆が喰はれて仕まふ。我分限より不相應な目上な人に追從して、其返禮に身の上仕まふも、猫めが爪を隱して酒肴をこしらへ、やさしいこゑを出して、音頭とると、ねずみが調子に乘つて汗水になつて、をどり居るやうなもので、

だまされてまだ其上に精出してをどりて舞うてそして喰はるゝ

銘々どもは、どうじやな。汗水になつて、をどりてゐる株じやないかな。らつちもない所へ義理ばつて、ポン〳〵してゐるやせぬか、喰はれてゐるやせぬか、どなたも御腹の中と相談して御らうじませ。銘々心得事じや。兎角花美な心をやめにして、めい〳〵の宗旨々々に順ひ、先祖を大事家業大事にしてさへゐれば、當分は埒の明かぬ樣に見ゆれど、家内安全子孫長久じや。何にも氣遣なことはない。是に迷ふがゆゑに十方空、三千世界が廣廣となつて、朝からばんまで西國順禮、一向宗なら二十四はい、法華宗なら千ケ寺參り、四國八十八箇所も、日本國の回國も、毎日々々朝からばんまで、順禮をしてゐるのじや。親父樣の御機嫌はよいか、母さまどこも御悪うはござりませぬか、御得意樣方の御きげんはよいか、商賣に無理はないか　家内の者をむごうはしてゐぬか、一家親類と不和にはないかと、毎日々々

順に禮拜して廻るゆゑ、これをまことの順禮といふ。

第一ばんに、

不斷らくや岸うつ波は三熊野の那智の御山にひゞく瀧津瀨

小人は、

不斷くるしや岸打波は身のうへに何ぞ口舌がなうて叶はぬ

脊中の負連は平生二親を負つれる心持、兩方赤いは二親のある人、眞中のあかいは片親ある人、みな白いは兩親のない人と、看板かけて此身はいつでも親子一體、御老人方を同道するゆゑ、老つれるともいふ。大事の此身は、本來我なしの無東西、いづれの所にか南北あらん。人我の隔ない事を悟るがゆゑに十方空、迷ふが故に三界城とは、此順禮が逆禮になるゆゑ、親子兄弟一家親類、銘々城をこしらへて、貪瞋癡の軍が始まる、貪欲とは飯椀の内から白眼合する兵粮責、瞋恚とは一家親類知音近附、たがひに火花をちらしあらそふ火責、愚癡は糞責、糞を熱してたがひにかけあふ内證のことまでも、たがひにあらはしいどみあふ、きたないくさい仕ごとじや。毎日々々三惡道の大合戰じや。どなた様でも御腹中におぼえがあらば、ちつと御休みなされませ。又覺の御方様がたは、よう目をさまして御らうじませ、朝からばんまで、三世の諸佛が禮拜してござるに違はない、夫がみえぬとは三惡道の地獄廻りじや。

此三惡道といふは、衣食住の三つより起る。天地のあひだに生を請くるもの、此三つの外に仕事はない。上、天子様より下庶人にいたるまで、此衣食住の三つを、わが分に應じ、ほどようつとめ守りさへすれば、天變地妖もなく、天下太平五穀成就、萬民快樂子孫長久じや。此外に人に用はない。

此大道を知らぬものは、たゞよいものを身にまとひ、うまいものを喰うてあそんでゐたい、それゆゑ金錢のほしいと、博奕と、けんくわと、色事とを仕事のやうに覺えてゐる。ぜにかねのほしいは、貪欲喧嘩瞋恚愚癡ゆゑ色と酒に迷ふ。貪はむさぼり、瞋はあらそひ、癡はうろたへもの。

先うまいものをくひたがるは、御腹中のよい上じやによつて、甘いものでなければ喰へぬ。喰うたうへにもくひたがるは、貪欲のむさぼり、これが直に餓鬼道のくるしみ、よいもの著てうまいもの喰うてにまけまいとする、瞋恚のあらそひ、これ修羅道のたゝかひ、よいもの著てうまいもの喰うてはらが大きうなると、仕事がいやになりて遊びたい、のらくしてろくな事は思ひつかぬ、此愚癡なたねが畜生道へ宿這入、何とこはいものじやないか。此貪瞋癡の三惡道にうろたへまは

る有樣を、とくと考へて御らうじませ。元來ないもせぬ我をこしらへたゆゑの思慮ばつかりじや。其思慮に貪瞋癡といふ名を附けたものじや。名ばかりで諸行無常のひゞきあり。一向迷はぬやうにしてやろというて、葬禮の時は鉦と鑰と鉢とをたゝいて、とんじんちん、まだ其上に鐃鉢と太鼓とぐわんどんと打鳴して、泣たり笑うたり、音ばつかりでして見せる。

ぼんなうも菩提も釋迦の口がなるこゑに二つのかはりあるかは

とは、聲にかはりはないといふ事じや。是此人も一生の間やかましう言はしやつたが、此やうな音ばつかりになられました。とんじんちん、思慮ばつかり、とんじんちん〳〵。此樣にすると、死んだ人の祈禱にもなるやうに、思うてゐるけれど、みな跡に殘りて居るものへ見せしめじや。此通じやぞえ、追附番が當りて來るぞ、御用心々々々。誰方も御合點かな。活た人を棺に入れて、死人が舁いて行くのじやぞえ、御得心かな。夫も知らずに日がな一日、貪瞋癡の三惡道を昧々こふ昧劫業、目が舞ふたら灸すよ、氣が附いたら目を明て見たがよい。長うもゐぬ此娑婆を、千年も萬年もと思ひ馴れた心から、嬉しい事悲しい事、氣の強いときもあり、氣の弱いときもあり、其外爭嫉妬色々さまゞ〳〵な事を昧々劫業して、しばらくは人道へ出て、人におれそれ禮義を盡しゐる時もあり、又天上の果報を得て、ヤレ嬉やと思うたも、ちつとの間で、ほどなく地獄へ打ちこまれ、ハアスウ〳〵苦しむ有樣、久しう餓鬼畜生道にゐたときの臭氣が拔けずにある故に、地獄の苦しみのがれがたし。諸念の源のかぶたが離れずにあるゆゑ、わづかにも念が殘りあれば、其念が世界へ散溢れて、ちつとでも便があると、芽を吹出す。「おれがよいか聞いて下れ。」たゞ人に譽められたいが難病業病、其腐骸を結構な縮緬羽二重につゝみまはし、御腹の中の土產は何々ぞ、慈悲もなければ、情もなく、たゞ欲い惜い憎や可愛やの、がらくたもの斗を結構な重箱に入れ、結構な袱紗に裏み、擔げまはる樣子を、とつくり本心の目鑑かけて御らうじませ。額に角をはやし、丸はだかに虎の皮のふんどし、股暗ばつかり張込んでゐる。此役にも立たぬ所へ贅をこきたがるゆゑ、三界城を建立す。城とは何ぞ。我といふ隔をする故、家內が住みにくい、それで世界にもすみ惡い、兎角我なしにさへなると、一家親類住吉ぐらし。

住吉の御門が十一所皆扉なし、御本社は土間にござる。此方と對座して御逢ひ下さる、平等一枚なるの儀を訓へてござる。

我に神體なし、慈悲をもつて神體とす。
我に神力なし、正直をもつて神力とす。

我に智恵なし、忠孝をもつて智恵とす。
我に奇特なし、無事をもつて奇特とす。
我に方便なし、柔和をもつて方便とす。

王陽明曰く、

目に體なし、萬物の色を以て體とす。
耳に體なし、萬物の聲を以て體とす。
鼻に體なし、萬物の嗅を以て體とす。
口に體なし、萬物の味を以て體とす。
心に體なし、萬物の感應の是非を以て體とす。

目といふも、鼻といふも、みな體なき事をかんがへて御らうじませ。

松翁道話二編　卷之下

田舍物が住吉の反橋を中程まで渡り、向へは行けぬ、こはいというて跡へ戻つたといふ事じや。むかうへ行くも跡へもどるも、同じことじやけれど、大きに違うた樣に思うて居る。死んで佛になるとおもひ詰めてゐる人と、生ながら此身のなひことを知らぬ人と、同じ事なれど、餘程違うた樣におもうてゐる。じやに依て、むかうへはこはがりて能うゆかず、跡戻する、同じ事をしてゐるのじや。それゆゑ御神託に、「有るのないのとおつしやるやうな、御人體じやござりませぬ」と言ふ。又松原に並んである石燈籠が、一々說法してござる。中にもこけかゝつた石燈籠が、「此樣に歪が來ると火をとぼすことがならぬ、たれも世話のしてがないと、此儘こけて仕まはにやならぬ、難儀なものじや。先刻濱邊へ御座船でゞおやまや藝子たいこ持雇うて遊ばしてもらふ客衆が、此邊をそはく連立あるき、此石燈籠は危いものじや、滅多に側へ寄るなというて通るゆゑ、私よりこなたの身上が危いと言うたけれど、聞かぬ顏して行過ぎたが、あなたがたはどうじや。若しこけかゝつてはないか、人が危がりてゐやせぬか。此序に

旦那寺の石塔も歪はないか、こけかゝつてはないか、水が上つてあるか、花が枯れてはないか、花の枯れた石塔は、内が大方が干からびてあるものじや、御用心なさりませ。」扨これ程たんとある石燈籠や人間じやが、みなちつとづつ、狂がある、滿足なは少いものじや。みな住よし樣の御託宣、有がたい事じやないか。

松風の聲のうちなる隱家は昔も今もすみよしのかみ

此松風の聲のうちなる隱家とは、何處のほどぞ、我なしに成つて、松かぜのこゑのうちへ這入りて住まへば、いつでも住よし樣じや。

善惡と思ふ心を振り捨てたゞ何となく住ばすみよし

たゞ善惡と思ふ心が我じや。此我さへ打殺して仕まへば、性は善なり、天道次第でよい事斗が殖る。家内が善人なれば住よしぐらし、富貴繁昌子孫長久の基、家内を善人に仕樣はどうじや。子曰、舉直錯諸枉則民服、舉枉錯諸直則民不服。善事をあげて惡事を其儘にして置くのじや。肴を喰ふに、よい所の身の所ばかり喰うて、骨の所は犬や猫に喰はすのじや。それを骨の所斗しがむやうにする故、咽に立つてやかましい。惡い事は捨てて、善い所斗あげるじや。「八兵衛此間は、ひどい精が出るの。」「ハイ〳〵」と顏附がにこ〳〵する、能うしたものじや。性は善なる證據じや。又惡いと言はるゝと誰じやとて、心好いものはない。「八兵衛は一向埒明ずじや」と言うて見たがよい、其時は何の樣な顏になるぞ、をかしげなものになる。「内方のぼん樣は賢い」と言ふと、煙草盆引ずつて來て、「おじ樣ばつば〳〵」といふ。「イヤモ彼奴は阿房じや」と言ふと、直に阿房になる。「コリヤ茶汲んで來い」というても、「いやじや〳〵」というて、逃げて行く、叱るより譽めるは言ひよい。それを滅多に叱る故、人柄が段段惡うなる。ソコデ善人すゝみ帳と言ふを拵へて、月に一度づつ譽かけると、人柄がずつと能うなる。其樣に譽めると附上がすると云ふは、矢張惡をあげるのじや。ゲベて、商賣物代呂物に、大極上々吉、飛切無類などとするは、皆代呂物への譽言葉じや。一向後に立たずの寐息代呂物とは書きはせぬ。佛經にも、どの樣な赤凡夫でも善男子善女人と言うてある。彼も惡男子惡女人と言うたら一向寄附人はない。また善男子善女人に違はない。性は善なり。涅槃經に衆生本來成佛なるが故也。畢竟人欲にうろたへて、赤凡夫に成つて居るでこそあれ、本來の株たは能う離してある。夫を人欲同士が背比して、惡人を仕込む故、宿這入してから埒が明かぬ。丁雅は十一旦那は五十、四十年違うてあるを、同年でもの言うては合點せぬ。嫁御は二十一姑御は五十、是も三十年違うてあゝ氣で相談せにや、いつでも口舌が絶えぬ。其嚙分がな

いと、丁稚も隱居も、下駄も燒味噌も、一所になつて、家内が犬の期器の樣になる。夫では詰らぬ。何でも善いことばかりを家内中が善事帳へ附ける、少しでも善い事は記し、惡い事は一向に附ける事ならぬ。其帳面を月に一度づつ讀み上げる。佛壇へ御燈をあげ、其前で段々に譽めかける。「長太郎は跡の月より此月は、大分善い事が多いの。おりんも段々善い事が殖えるぞや。さて番頭どのきつう精が出ます。御隱居樣御悅びなされませ、此間藏の戸前の掃除して、鼠穴の吟味が有つた。大方番頭どのの差圖であろ、能う氣を附けて下さる、嬉い事じや。」扨是からが褒美に古帶一筋、古襦袢或は下帶一、手拭一筋と、善い事に應じてそれ〴〵に褒美をやる。左樣すると、家内中が惡い事は言はずに善い事斗を附ける。「申し旦那さん、岩松どのが御使に往て早う戻られました、帳面に御附けなさりませ。おすぎどのが、香物の納屋を。奇麗に掃除してゐられます。久助殿が此樣にたんと、錢差を夜なべにして置かれました、お家樣が出て、私が言附けもせぬに、丑松が御逮夜の花を立てて參んじました」と、總々がよい事斗り言ふ樣になると、善い事だらけで、家内安全、旦那殿の留主の間に、盜する者がない樣になる、けうといものじや。

道之以政齊之以刑民免而無恥

餘り制止が嚴しいと、嘘を附いて恥を何とも思はぬ樣になる。是がしかる事を先にする故、皆盜人になる。「よそから鯛を一枚貰うた、けふの鯛は、氏神樣のお下りじやによつて、骨ぐち喰はにやならぬ」と言ふたら、何ほ鯛でも誰も喰人はない。骨を食ふは惡を上げるのじや。骨を喰ふは犬の役、善い人のせぬ事じや。役者の番附にも、上り役者、下り役者はあれど、赤下手役者とは書きはせぬ。「阿房よ」と言ふと、ちやつと阿房顯して見せる。「まだもつと阿房見せうか」と、段々阿房盡して見せる。こちの心の通を向へ顯して見せる、能うしたものじや、阿房羅刹というて地獄の役人じや。餘り心安うするものじやない。

道之以德齊之以禮有恥且格

譽る事を先にして、善事を引上げてやると、人柄がぐう〳〵とあがる。佛壇から御先祖の御悅、無造作なことが皆善人となる。善人と言ふは極樂の役人、毎日々々極樂の體相を顯はして、今日を暮すは、有難い事の天上じや。どなたも今晩から仕かけて御らうじませぬか。甚道理の善いものでござります。又譏話は堅く御法度、この譏話と言ふものは、向からも思の外、氣を張りて返禮するものじや。後には通附になつて、毎日々々商賣がはづむと、節李に差引が喧しい。爭の始りじや、止にするがよい。夫程言ひ度くば、我事を言うたがよい。我事は何ほほ

ど譏りても尻の來る氣遣はない。

「私は若い時から能く嘘をついたものでございます。親の物を折々盗みまして、買喰したこと度度で御ざります。喧嘩して折々たゝかれたこともございます。若い時から自慢過ぎて、赤恥かいた事もございます。節季々々には、見す〳〵無理と知りながら、不足錢ついた事もございます。人に銀出さして、禮は私がうけた事もございます。」

「お恥しい事でございますが、御主人や親の御恩よい、どうでも女房子は大切に存じます。これは義理を知らぬのか、但し恥を知らぬと言ふものか存じませぬ。それでも顔は人じやが、心は犬や猿の仲間へ、宿這入致して居りますかして、けん〳〵言うて能う人にかぶり附きます。蛇の修行も致しました故、執著深う人を恨みます。其上、のたくり廻つて、あへさがす故、人に愛想盡されます。此前鵜男と言うて見せた見世物は則私でございます。御歸が三文なれど今日は法樂じや、珍しい見世物とくと御覽なされて下さりませ。扨折々がざみや、蟹が見舞に見えます。どうでも横に歩行くゆゑ、同行衆じやとおもうて居るさうにございます。」何と、此樣に我事を譏るは、懺悔と言うて大きな功德じや、罪が滅亡びて助ります。朝夕佛壇で看經するも我身の懺悔じやけれど、今日靈々と生きてござる、諸佛諸人樣方に、我身の咎を申上げるはなほ功德が深い。我事を我いふ故、間違はござりませぬ。其上で主人に懺悔、親御樣へ懺悔、「私は是まで、大きに心得違致し居りました。此後急度相改め慎みませう。幼少の時より、今日までの不忠不孝、どうぞ御慈悲に御了簡下りませ」と、眞實に懺悔すると、主人も親も安心する。腹の中のごもくを瀟洒と掃除をすると、内外清淨六根清淨、拂ひ給へ清め給へじや。

打ち明て見れば大きな駒が出た後は輕うてもとの赤子になりて今日を暮すと、病けが拔けて心安い、其上憂災難もなく息災で、大體有難いものじやない。

米蒔いて米が生ゆれば善に善惡には惡が報ゆとぞしれ

麥蒔けば麥が出來、米蒔けば米が出來る、少も天地に間違はない。又麥でも米でも黍でも稗でも其外一切の穀物、實が入るほど、ゆら〳〵搖られて智惠附は、風で動く樣に見ゆれど、天地から身體を能うして下さるのじや。身體がようなる程、慇懃に御辭儀なさる。仲上るは追附不作になる御しらせじや。人も滅多に仲上るは、「追附不作になる、不作になる」という觸あるくのじや。男でも女でも顔斗り美しいとて、仕事嫌は役に立たぬ。茶碗の底に穴の明いた樣なもので、夜尿たれは、どつこい遣つても間に合はぬ。跡からねだりに來る。惡い事を好む人

は、家内の諸道具までが悪人になる。煙管が頭たゝいたり、箒が背中へかぶり附いたり、己が役前は勤めずに、皆傍法雑行していろ〳〵の悪作しをる。是が皆化けたものじや。我心の向様で、此仕事した手が盗したり、筆先でくろめたり、恐いものじや。皆佛様が鬼になつたのじや。佛と言ふも神と言ふも、水と氷の如し、善人も悪人も本は一水、心さへ改むれば、皆成佛じや。

雨霰雪や氷と隔つれどとくれば同じ谷河の水

魚と水とは未だ形がある、水と水とになつて、暮すのじや、朝から晩まで流れ灌頂、須臾もとゞまるものはない。

逝者如斯或晝夜不捨。其流を杖で搔廻せば濁る、濁るけれ共暫く見て居る間に、濁は消えて仕まふ様なれど、泥の底へ沈んだのじや。悪は沈みて能う浮まぬ。其所々に滞りて説法する。さるによつて悪は説くに及ばぬ、御直説法じや。見事な錦手の茶碗、直も安いけれど叩いて見れば、音がビシヤ〳〵、此不返事では心もとない。又此方の茶碗は、チト不調法なけれど、チヤン〳〵返事がよい、どちらを買うぞ、不返事は氣術ない、どうでも顔が脹れてある、矢張チヤン〳〵此方にいたしませう。八兵衛殿は不男なけれど、返事が好いので貰ひ人が多い。權兵衛殿は男振は好いけれど、仕事嫌は賣口が遅い、折々頭痛腹痛の作病は、どうでも世帯持の悪いといふ御直の御説法じや。

旦那殿の慈悲深いは奉公する衆の大きな仕合、又人遣の悪い旦那殿も矢張奉公人の仕合、どうでも慘う使はれた程宿這入して勝手がよい、商賣を早う仕にせる。

嫁御を善人にするも姑御が譽かけるじや。「此方の嫁は洗濯物でも仕立物でも、其速さ手利でござります。火燵に火の埋け様までがよい、朝まで鬱梅好溫い。私が履物と言ふと、大事にかけて呉れます」と、滅多無性に婆様が嫁を譽めて廻るじや。さうすると、大概鼻聲な嫁御でも、餘り譽められて、せう事なしに善人になる。上一譽殺して佛にするのじや。葬送が皆この通じや。格別あや切のした人でもなけれど、死ぬると院號の居士號の禪定門の禪尼の或は信士の信女のと名を附けて、大勢が寄掛りて結構な御經讀みて譽そやすじや。此御經が直に心の譽言葉じや。夫を讀みて總々が譽かける。左様すると大概な迷も、譽殺されて成佛する、能うしたものじや。今日生きて居る人でも同じ事じや。悪い事言うて譏るのも、善い事いうて譽めるのも、同じ口手間じや、同じ事なら機嫌好う暮すが徳じや。

腹立て無理言ふ人に口たれて足納さすが施餓鬼なりけり

たゞ餓鬼は負惜が強うて、自慢するが病じや、隨分譽めてさへ遣ると心好う成佛する。

此餓鬼といふも我見というて、我を立てたのじや。どれ程愚なものでも、我賢しと思うてゐる。是が卽ち衆生本來成佛なるが故なり。心は天の丸無垢じやによつて、天を尊ぶは則天の道じや。たとへ私欲に暗んで居ても、矢張天の心でくらんで居るゆゑ、何の樣な愚癡者でも、我尊しと思うて居る。直に天の心で性は善なる證據じや。夫じやによつて本心を知らぬ者は、其所が無茶苦茶で、本心と私心と、心と形との道理が、不分明な故、私心の方で突張返り、皆跡で難儀する。夫故神佛聖人の敎の道を立てて、敎化し給ふは、その私心を引たくりて仕まふのじや。學問の道他なし、八宗九宗とも此我見をこじ放すより外に、成佛の道はないでござります。

京海道に向の明神といふがある。此神社に面白い繪馬が上つてある。博奕打が發起して、簒を金槌で打くだき、骨牌を庖丁で刻んでゐる、其傍に兩親が肩衣かけて拜んでござる、其跡から親類や同行と覺しき衆中も拜んでゐる、御內儀さまは、一向疊に打臥し手を合して泣いてござる、小い子も同じ樣に簒の缺を石で叩き碎いて居る、其博奕打の脊中から、御光が四方へさしてある、珍らしい繪馬じや。親が發起すると小い子までが、簒の缺を打碎いて居るは、惡い種の跡へ殘らぬ證據じや。御兩親が拜んでござるゆゑ、御光がさしてある、直に佛樣になつてござる、有難い事じや。千手の暗室に一燈を入るれば暗何んか去る、卽ち神明樣じや。五十年六十年迷うて居た暗も、卽今の一念發起して見たれば、忽ち明に晴れ渡る。

暗で影法師奴を見失ひ火を燈してぞ見つけたりける

本心が明にさへなれば、影法師の私心が見ゆるゆゑ迷がない、本心がくらいと影法師が見えぬゆゑ、私心を我心の主にして居る故、暗で狼狽にやならぬ。此繪馬の博奕打の樣に銘々どもも、親達に拜まれてゐるか、但し親を泣して居るか。親類一家は何と言うて拜んで居るぞ、お山や芝居から拜まれてはゐぬか。世間からはどのやうに拜んでゐるぞ、女中方吳服屋香具屋から拜まれてはゐぬか。又本心御知りなされた御方々の御內樣が、何と言うて拜んでござるぞ、若案じてはござらぬか。「こちの人が本心知られましてから、一向商賣不精でのらつかれます」と言うてこざらぬか。本心を梃に遣うて遊び步行くを本心のらといふ。是は聖人の御罰を蒙る事でござります。皆此方の姿の通を向から拜んでござる。佛樣というて拜んでゐるか、鬼樣と言うて拜んでゐるか、我心は向に明に顯れてある故、向の明神此明な神樣を身に反す、そうして誠あらば樂是より大なるはなし。

松翁道話三編　卷之上

昔唐土の張公藝といふ人は、九代が間、一門眷屬一の家に暮して居た。忝も時の御門高宗皇帝公藝が家に行幸ましくて、勅諚あるは、「汝が家は年久しく親類同居して、中よく家治り相親むこと、甚以て奇特なることじや。親類の中も年久しき中には、互に口舌も有るものじやが、定而一族相親む納方あるべし、具に申上げよ」と御諚ありければ、張公藝、敬んで、忍の字を百ばかり書いて獻じ奉つたと言ふ事じや。忍とは則堪忍のことじや。此堪忍の道さへ守らば、身納り國治る和合の道、忍の德たる諸善萬行も及ばずというて、一切堪忍一つで世界中が治まる、結構なものじや。

堪忍と聞けば易きに似たれども己に克つのかへ名なるべし。己に克つとは、我身勝手に克つのじや。則天道樣への御禮じや。今日言ひたい事を、明日まで堪忍するのじや。酒飲んだり、肴喰たりすることも、些と宛堪忍するのじや、好い物著たいも今日一日の堪忍と思うて先へ延すのじや。日本の宗廟御伊勢樣が、茅葺に三杵米で堪忍を教へ

てござる。是程緋縮緬で髪ゆうたり、天鵞絨を草履の鼻緒にするけれど、注連縄はやつぱり藁じや。今の割して見ると、注連縄も糸巻にするか、金糸で絢ふか、せめて水引位に爲さうなものじや。斗張も矢張白木綿じや、是も緋緞子位にはなりさうなものじや。處を矢張昔の通り、白木綿で堪忍してござる。堪忍を行ふは道に叶ふ根元じやと言ふことじや、人の願樣々なれど、まづ第一番に衣食住の願が主じや。是も我身分相應に整ふたら、もう夫で善い事じや。夫を色々樣々と、奢を穿り出して心任にせんとする故、何時か我心にこと足り、たんのうする日あらんや。少欲知足と言うて、物事たんのうするが、人の道じや。夫を有るが上にも積かさね、有るが上にも貪り欲しがる、小人の常、色よき著物を著て、其華麗なるを誰に見せて誇らんとするのじや。人は心の美しきこそ、樂げも有るに、腹の中には妬嫉の、尖ばつかり捩込んで、狼が裲襠著た樣なものじや。恥しいものじやぞえ。

破れたる著物を著ても足ることを知れば襤褸の錦なりけり

島の内燈心やの娘御、十二や十三で一合の米でたんのうし、夜は一時斗寐ぬ。さうなければ仕事が出來ぬ。佛壇の御燈と、相合で夜業するのじや。夫で大病の母御を介抱してござつた。何と正眞ものじやぞえ。鈴鹿の萬吉さま五つ六つばかりから、道中往來の旅人の風呂敷づつみや、小さい荷など持つて、三文五文の錢を貰うて、母御を養うてござつたが、是が己を殺して堪忍するの、何うのといふ、了簡はなけれど、我儘がない故、自然と道にかなふたものじや。是が不肖不性な顏で勤まるものじやない、何時でもにこ〳〵〳〵と嬉しい心持でなければ出來ぬ仕事じや。此堪忍の出來ぬ者は孝行は猶出來ぬ。孝行が直に堪忍じや。何方も、堪忍が出來ざ、私は餘程不孝者じや、天下の咎人じやといふこと覺悟したがよい。どうで長持は出來ぬ程に、昔の殷の紂王、夏の桀王、王樣に生れ、位は十善萬乘此上なし、智惠拔群に秀でて、衆に勝れて有りながら、燈心屋や、萬吉樣から見れば皆小人じや。何故になれば、我儘で堪忍が出來なんだ。況んや其外の衆に於てをやじや。親の跡式商賣仕にせ金銀道具疊迄敷て貰ひながら、もつとおごられぬというて小言いふ、これ等は一向論にかゝらぬ、小人と言うても、些とつり取らにやならぬ。夫に未だ能う言ふことじや、「此方親に何にも貰はず、未だ借錢を讓つて置れた。畢竟遣りはせぬけれど、外の親から見ては此方の親父は、大體仕合者じやない。じやによつて親の恩は埃程もない。夫を今日何樣ぞ斯樣ぞ暮して居るは、皆己が仕出したのじや。」おれがおれがと言うてゐる、其己が體は誰に貰うたのじやと言へば、己が賴もせぬに、親父がこしらへた故、此やうに難儀すると思うて居るが、其難儀すると思ふ身體ぐるめに、此方へ戻せと

親父がいうたら何うするえ。生きながら身體に家明附られたら、魂の引取所がないが、其ときは一言の申分無之候じや。畢竟是が親の慈悲で、其精落かなけりやこそ、昔から其儘ですんで通れ、是で他人と他人とで見たがよい、公事は全敗じや。

此間も齒のぬけた人が、上手な入齒師に、壹兩貳歩出して仕て貰うたと言ふ人がある。正眞の齒とはどの樣なものじやと言へば、ソリヤ大な違じやと言うてござる。夫で考へて御覽じませ。物の喰へぬ樣な齒でさへ壹兩貳歩じや。此結構な齒がたゞじや。夫に未だ有るじや。こゝに指が壹本無いと言うたら、三百目出さしやれ、生附の樣にして遣ると言ふ者があつたら、貧乏質に置いてなりと、三百目や四百目は出す。此何にも役に立たぬ眉毛が無うても五兩や十兩は出す。夫なら此體を一つ〳〵直打いれて見たがよい。三拾貫目や五十貫目の物じやないぞえ。それをたゞ貰うてゐながら、己が何にも貰やせぬとは餘り厚かましい。今爰に、知行百萬石の大名にして遣ろ程に、首を吳れいと言ふたら、ハイと言うて首を遣るものが有らうかな。どの樣な慾深いものじやとて、滅多に遣るものはあるまい。スリヤ百萬石にも換へぬ身體じやぞえ。夫程ありがたいものを貰うて居ながら、己や何にも貰やせぬとは餘勿體ないことじや。然れども夫を今更差引せうと言ふ親はない。其代に物毎堪忍して世間の交、一家一門中好して暮して

吳れよと、親御の御賴、其外に親の望は無い。夫を用ひぬ故、天道樣から御刑罰が下るのじや、恐ろしいものじや。どなたも我儘の出ぬ樣に、堪忍が大事じや。又食物と言うても、甘き味がいつまでも口の中に置くものでもない、暫く咽を過すまでのたのしみじや。また家居も雨露を防ぎさへしたら、もう夫でよいことじや、其上を願ふは、皆我身のあだを願ふのじやと思ひ取りて、堪忍すれば自から道に合ふ。孔子も貧しうして樂しみ、富んで禮を好むものにはしかずと仰せられた。此禮を好むとは堪忍の事じや。或は妻子眷屬の心に任せぬも、堪忍して睦じく暮し、又心にかなはぬ朋友にも、堪忍して爭はず、隨分我を殺して交る時は、一生が安樂な。麁食を食ひ水を飲み、肱を曲て枕とする、聖人のたのしみ、少しも華麗な事はない。奢は苦の種、身をうしなひ家を破る根本、唐土の大舜姦しき親御につかへ給ひ、孝道成就なされたも堪忍ばつかり、主人に忠義を盡すと言ふも、堪忍なくば皆不忠となる。婦人の舅姑に仕へ、夫に順ふも堪忍なくては女の道に背く。萬事萬端我腹の中の本心に任せて、少でも氣味惡い事は、皆皆堪忍して思ひ止まる樣にするのじや。

南都の御社中の内に、堪忍箱と言ふ物を製へて、家内が堪忍を御勉めなさつた所がある。この家は上分の人ばつかりが堪忍するのじや。或は花見に行きたい、今日の入用拾匁と見て、七匁

で堪忍する、殘り三匁を右の堪忍箱へ納る。内の御家様今年の衣物百五十匁と積り、それを百二十匁で堪忍する、殘りの三拾匁を堪忍箱へ納る。或は諸式諸道具に至る迄、上分に用ひるものは、是まで三拾匁の品を貳拾匁位で堪忍する、殘りの拾匁を堪忍箱へ入る。この通に旦那をはじめ、御家様、子達まで、上分ばかり堪忍して、其代り店の手代衆を始め、下女小者に至る迄、好物をやり、好物を食すようにする。扨正月と七月に堪忍箱の堪忍の溜銀を取出して、家内の者へそれ〴〵に割つてやる。是で旦那殿に裏表なし、平等一切の心じや。目前で、旦那様、裏口で、旦那奴〳〵、と言はぬ様にする。是が一粒萬倍御舍利様の殖し様じや。蒔さへすれば生えるやう、段々御仕合がよい。是等は仕悪いことじやない、甚心易いことで、利功な仕事じや。人に笑れたり、人にしかれてさへ堪忍して、モウ拾匁じやまゝい、モウ廿匁じやまゝい、とてもなら五十匁の方が徳じやと言うて、錢銀をつかふ人がある。是等は他に堪忍箱製へて、内の銀を精出して他所へ入れに行くのじや。家の潰れることさへ堪忍して勉め工居る。堪忍の仕所が間違うてあるのじや。堪忍せずに家潰すが徳か、堪忍して家相續するが徳か。是はマア何方も御腹の中と相談して御ろうじるがよい。堪忍も口で斗り堪忍々々言うて、身に行はぬ人がある。是を畑水練と言うて、座敷で水の稽古する様なもので、まさかのとき役に立たぬ。眞實ひだるいめに逢ふた者でないと、乞食に物を遣るも慰の様に思うて居る。自身勤めても見ずに、人ばかりいぢる者があるものじや。是がこれ畑水練じや。一萬石以上の御大名様方の御膳部の御料理、一日が金一兩あてと言ふことじや。夫から段々十萬石二十萬石と、御知行に應じて、御膳部の格式がある事さうな。夫に或御歴々の太守様が、一汁一菜になされて、年々其餘銀を以て、家中の據なき借金を濟して御遣りなさつたと言ふ事じや。是を其様子も知らぬものが、一通に聞いては、ちひさい思召じやの、始末な殿様のと言ふけれど、親の心子知らず、佛の心凡夫知らず、勿體ない事じや。水の中で働いて居る人の心も知らず、岡から見て何の彼のと小言言ふ、左様じや無い、斯様じや無いと。マア働て見たがよい。

待日には下手に見えたる渡守

御上の思召も知らず、下として小言斗、皆罰の當る事じや。兎角天地の思召に合ふ様、兩親に此身を任してさへ居れば、氣遣なことはない、何にも六づかしいことはない。若し不調法の出來た時は、其尻は親が引受けて差配して呉れる、何事も一つ〳〵親達に問うてするのじや。親御達は天地に問うてなさる。我了簡でしたことは、皆此身のかぶりとなる。身を任すが堪忍じや。知りもせぬおやまや藝子に身を任すゆゑ、仕廻に難儀する。狼や蟒蛇と跡さしで寢る様な

ものじや。大體恐しいものじやない。しまひは此方の體をしてやらるゝ。此樣な恐しい事さへ堪忍して勉めてゐる。皆他所の堪忍箱へ銀入れに行く。算用のあはぬ筈じや。一年中の店おろしの引合ふやう、毎日毎晩店卸して見るがよい。親の心と我心と、引合ふたか、引合はぬか、主人の心と我心と、引合うてあるか引合うてないか、若し少でも、喰違うた所があらば、親の前へ手をつかへ、主人の前へ手を仕へ、「今日晝過の事は、私が大きな不調法で御座ります、どうぞ御堪忍下されませ」と、眞實に詫言すると、帳面がさらりと消へて、互に嬉い、ぢきに利の有る事じや。此帳面が消えぬと、互にむし〳〵利が喰て夜が寐られぬ。仕まひは大きな損じや。此店卸しは親ばかりじやない、誰にても此通の店おろし。

堪忍はかならず人の爲ならず詰る所は己が身の爲め

我欲と正直とも店卸して見たがよい。人に憎まるゝ帳合して居るか、可愛がらるゝ帳合して居るか、どちらが德じやぞ。

踏れても咲く蒲公英の笑顏哉
手折らるゝ人に薫るや梅の花

たゞ〳〵人の按摩取つて遣るのじや。棒捩するに、向の人の捩る方へ捩て居ると、兩方に氣苦勞がない。其筈じや、向の手傳ひして居るのじやによつて、どれほど向が强うても、力を出すことがならぬ。大體心安いものじやない。和州鋒立村に清九郎と言ふ人があつた。御年貢に上げる米を二俵拵へて庭に置かれたれば、その夜盗人が這入て其米を擔げて出る。清九郎目を明き、「コレ〳〵其米は此方に進ぜうと思うてこしらへて置いた、持て去しやれ。己が進ぜるからは、此方の咎にはならぬ。然し夫では、持つていに憎い。とてもなら、明日の晩にこざらぬか、それを銀にして置いて進ぜう程に。」ソコデ盗人も乘が來て、「そんなら明日の晩來る程に、屹度銀にして置いて下され」と、言うて去んだ。是がこれ棒捩に向の捩の方へ捩ぢて居るのじや、向の手傳して遣るのじや。扨清九郎はその翌日米を賣拂ひ、銀にして待つてゐる。其後四五日もしてから盗人が來て、「此間の米は銀にしてあるか。」「サア貴樣つい來ると言うたゆゑ急に賣つた、それで相場よりは少々安價けれど、堪忍して持つて去なしやれ」と銀を出せば、盗人は引たくり、其銀をひねくり廻し、清九郎の顏を見て、「イヤモウ此銀は止にせう」と、銀を返し表へ出るを、「コレ〳〵待たしやれ。なぜ其樣に言うぞいの。己が遣ると言うのに何の申分があるぞいの。どうぞ持つて去んでたもいの。」「イヤ〳〵止めにする。」「なぜに。」「ハテ餘まり貴樣の樣に正直過る人の物は取つても拍子がない、餘まり阿房らしいわい。」其時清九郎「いよ〳〵それに違

はないか。」「ハテ何の嘘をいほぞいの。」「夫が實なら貴樣善人じや、可惜事じやのう。善人は善人じやけれど、暗がりの善人で役に立たぬ、なぜ世間通用の善人にならぬぞいの。」夫から盗人とはなしじや、「イヤモウありやうは盗人したいことはなけれど、是は因果じや。今更止めて外に仕樣がない。」「イヤ隨分仕樣がある。其了簡なら、己次第になつて居や　と言うて、世話やいて遂々六十六部に仕立てて遣つたと言ふ人じや。是が棒捩に向へ捩ぢて善人に仕込んで遣つたのじや。

負けて退く人を弱しと思ふなよ智恵の力の強い故なり

松翁道話三編　卷之中

或とき御地頭樣より清九郎の正直を御聞き及び遊されて、殿樣の山を御褒美に下さる。清九郎辭儀して受けず。其故を御尋ねなさるれば、清九郎申すに、「殿樣の山でさへ、相應に盗みますじや御ざりませぬか。夫を私が山になつたら、尙盗人が殖えて、咎人が餘計になります。殺生な事じや、止になされませ」と根つからうけ附けぬ。どうも御地頭樣も仕樣がない。其後御役人が、「なんと清九郎、此山の樹木を盗まぬ仕樣は有るまいか」と、御尋ねなさつたれば、「ハイ隨分盗人遣ぬ樣になされませ。盗人遣うと盗人が寄つて參じます。」「其盗人を遣うとは、どうしたものじや」と尋ぬれば、「さればでござります。是が五里も七里も他所のものが、樹木位盗にや參じますまい。また少々でも錢金のあるものは尙致しませぬ。して見れば、いたつて困窮の者が、今日をしのぎかねての事じや。皆御下の困窮な人を、些とづつ救うて御遣りなさつたら、盗人は參りますまい」というて、きよろりとして居るじや。此やうに學文せいでも文字を知らいでも、埒の明いた人がある。とんと我無しじや。虛空法界を心の主として暮して居る人

は、どうもつかまへ所がない。夫なら阿房かと思へば、物事が滯らぬ故、さらり〳〵と埒が明く。

我と言ふちひさいこゝろ捨てて見よ大千世界障るもの無し

此身此儘虛空暮し、生靈死靈も取つく氣遣氣がない。

欲し惜しや憎くや可愛とおもはねば今は世界が丸で我もの

今虛盧裏昔もきよろり行先も何時も變らぬきよろり也けり

虛露裏とは何を言ふかは知らねども味噌を舐れば味を知る

骸が虛空同體なる故、飯を喰へば飯の味を知り、酒を飲めば酒と知り、酢を嘗めて酢と知り、酢を呑んで酒の味の無いのは、本體が酢なる故じや。虛空は是程正直なものじや。何んでも物ごと相談の極むることは、此虛空へ出て來ねば埒があかぬ。兩方に少しでも疑のある内は、物事が定らぬ。商内事でも談合事でも、一切の事が雙方互に「如何にも御尤其通」其通とはどこじや。互に思惑が取れて仕まふと一言の申分もない。此虛空へ出た所が則天の御姿じや。其時虛盧裏が味噌の味を知るのじや。味とは阿字にあうたのじや。又天地合して、天地合とも言ふ。天地を合して、一蒸籠で蒸されて居る故、何となと思うた通の味が出る。慈悲の心が起れば神佛の味が出る。物欲い心が起れば横著者と味が出る。百姓が金借りに來た、手が美しい此人のらとあぢはひが出る。自慢と贅を言ふ者は不仕合の味が出る。不義理なるものは、子孫斷絶の味が出る。一切天地の大釜で焚く故、夫々の味が出る。是を名附けて一乘の法といふ。此一乘の法を二に分けて見る故に、兩方ながら役に立たぬ。

或富家に父御樣が大病じや、一人の子供衆を枕元へ呼び寄せて、「我死したらば家財殘らず汝等に與ふる程に、家屋敷金銀諸道具二つに分け、兄弟必爭そふ事勿れ」と遺言して死しぬ。扨兄弟の者遺言に從うて所有物を二つに分ける、衣裳も眞中から二つに割く、或は器物桶盥草木迄眞中より割いて二つになし、金銀錢までも二つに割つて配分したが、兩方ながら役に立たぬ樣にして仕まうた。一つ以て是を二つに打ち碎いて仕まうたのじや。飯を喰へば腹が大きうなる、腹が大きうなつた其跡で雪隱へ行く、是一乘の法則天地の移り行く有樣。

生れたも死ぬるも同じ我心今死ぬる扨は生れた報がな

生と死と合して一心法界の說法じや。此一乘の法を我一人前の了簡で、二つにわけて分別する故、目が覺めぬ。譬ば飯を喰ふを生じやと悅び、雪隱へ行くを死じやと悲む樣な物故、生の方ばかり捉へて悅び、死の方斗捉へて悲む。泣くも笑ふも一本竹の元と末と同うないと言うて、

小言いうて居るやうなものじや。一つの物を二つに割りて、片一方宛捕へて、何の彼のと狼狽へて居るのじや。打ば響く是一乘の法じや。夫を己が比所を叩けばぐわたりと鳴る、ハテ合點の行かぬものと、音と我と二つに分けて分別する故、夜が明けぬ。權兵衞と呼べばハイト返事する、是また一乘の法、また權兵衞と呼ぶに返事せぬ、是も一乘の法。なぜなれば、權兵衞と呼ぶに返事せぬは、聲の屆かぬか聾か、たゞし權兵衞の腹の中に何ぞ滯が有つたのか、是則一乘の法じや。其を「是程呼ぶに返事せぬはどうじや。」「返事して居るに世話しない」と言うて吼く、是一つの物を二つに割り、片一方づつ捕へて居る故なんなにもならぬ。夫故兩方聞いて下知をなせとは、此一乘の法を教へるのじや。

栂尾の明惠上人の子僧が親里へ戻り、「扨々和尙は無理を言ふ人じや、髮剃の柄が拔けた故、柄をすげたれば、なぜすげると言うて叱られる、味噌を擦るに櫨木が見えぬ故杓子で擦れば、杓子で味噌を擦ると言うて叱らるゝ、雪隱を淸潔に掃除すれば、なぜ掃除すると言うて叱らるゝ、彼の樣に無理言しやつては、何うも仕樣がない。」ソコデ子僧の親が大きに腹を立てて、直に上人の許へ行きて、「扨小僧奴がどうも勤らぬと言うて歸りました、どうで年の行かぬ者でござります、大概無理言うて遣うて下りませ」といふ。上人が、「然れば聞いて下され。髮を剃れよと言へば、剃刀の柄が拔けたとて、己が頭をあてにして柄をすげますわいの、味噌を擦れよと言へば、櫨木の有るに、杓子で味噌を揑廻し慰をする、雪隱を掃除せよと言へば、佛前の箒で掃きます、扨々片意地者で困ります」と仰せらるゝ。子僧の親、片一方聞いて腹立て見たが、兩方合して見れば御尤千萬と腹立が消える。

山は靑く水は流れて白けれど其儘もとの色にぞ有りける

大和の喜助樣の田地の境目をせゝる人がある。段々跡へ寄せて作つてござつたれば、向の人が退屈して詫言に來た。其儘本の色にぞ有りける。根つから世話いらず味いものじや。

我善きに人に惡氣の有るものか人の惡氣は我わる氣なり

又或寺の隣同士、境目の論より起り、御上へ訟へ、互に爭ふ。或人が狂歌を贈る、其歌にて双方の爭が止んだと言ふ事じや。

假の世のかりのやどりの假垣に繩張をして長みじかとは

皆虛空を塀切して、是程は己が虛空じやくゝと言うて爭うて居る樣なものじや。其塀切して居る中から消てあるも知らずに、矢張己がのじやくゝと言うて居る。此虛空ばかりじやない、或は田地、田畑、家屋敷、掛屋敷、三十貫目五十貫目を己がのじやくゝ、または二千貫目三千貫

目も、まだ其上に山も川も三文五文も己がのじや、茶碗一つ扇壹本も己がのじや〳〵と、たゞ此世界の道具に己と言ふ名が附けたい、をかしい病じや。此己と言ふはどんなものじやぞ考へて見たがよい。

子曰天何言四時行百物成。天の運動によつて四季が行れ、萬物生々するけれど、ついど天が己がのじや〳〵己が天じやと、おつしやつた事はない。人は其天の運動に由て萬物生々する内から涌いて出た虫じや。じやに依て天理が具つて有る、言はゞ天の出店じやけれど、出見世と斗では身上が持てぬ故、鼻と口から天が御通ひなされし御世話をなさる。夫故此樣に見たり聞いたり動き働く、能うした者じや、死人にも目鼻があれど何んにも見えぬ、動く事もならぬ、天が往來なされぬ故じや。左樣して見れば、此樣に見たり聞いたり動き働くは直に天の御計で、餘自由自在が出る故、つひ己がのじや〳〵と思附いた癖と言ふものじや。夫で肝心の母屋の天を、他所の物にして居る、夫故此五尺の身體丈の勝手を思うて、己がのじや〳〵、何にも彼も己が物にしたがる。出店から母屋を家明附ける樣な、滅相な事が有るものか、すつきり虛空に準繩して、己がのじや〳〵と爭うてゐる、好い加減に迷うて置いたがよい。

心とも知らぬ心を何時の間に我心とや思ひ染めけん

我もなく人もなければ大虛空たゞ一體の姿なりけり

天も地も佛も鬼も我も人も是この意ひとつなりけり

彼是に尋ねて見れど根から葉から此わろの名は知れぬなりけり

名取川の狂言に、名を取ると、うろつき出す、名や形に迷うて居る故難儀する、其名を取つた所が元直じやと言うても合點せぬ　權兵衛といふ名を取つても働いてゐる、誰が働いてゐるのじや、考へて御覽うじませ。

天下の廣居に住んで居ながら、知らぬとは可惜事じや。

家宅は青天井に地のむしろ月日をあかり風の手ぼうき

大小もしらぬ虛空を家として普請も要ず物數寄わなし

我なければ人と爭ふ世話も要らず、足納して今日を暮す、此上の樂が何所にあるぞ。川船の行通に、もう楫取楫と互に挨拶仕合うて船をかはして往來する、自由なものじや。時に川上から船が下る、何時もの通もう楫とり楫と、挨拶するに、向の船に返事せず、此方の船にくわちんと當る。船頭大きに怒り、「舟の法を知らぬかい。」乘人の内にも聞かぬ氣な者口々に、「ヤア狼藉船一人も動くな」と大きに呼はり罵しれど、根つから返答せぬ。變つた事じやと惣々が能く能

く見れば、空船じや。一人も人は居ぬ、自然と流れて來て行き當つたのじや、どうも仕樣がない、折角惣々が汗水に成つて腹立てて見たが、相手の無いはどうも仕樣がない、立た腹がじみじみと消えて、大笑に成つてしまうた。

寂莫の柴の戸ほそに音すれど無人定とて人音もせず

スリヤ萬事萬端相手のもたす氣じや。元來腹の中には何にもない、たゞ氣あつて動く斗り、天ばかり妙體不思議の有樣を、考へて御覽うじませ、喧嘩は仕度うても、爲ることならぬ筈じや。

諍は實に山びこのこだまかやわが口ゆゑに先も喧し

此方からワイと言ふと、向にもワイといふ、其の聲の響に附いて泣たり笑うたりしてゐる、全體一人狂言と言ふことを知らぬゆゑじや。

橋の上を大勢人がゆき通するに、一人も行當るものはない、互に我なし、向の人は此方の身體に成り此方は又向の人になつて、天の心で居る故、我も知らず避け合うて通る、根つから行當りはせぬ、甘いものじや。また川舟が何艘往來しても、互に遠慮仕合うて、往當らぬ樣にする。向に橋があるとちやつと帆を下し、帆柱が辭儀して橋の下をツイと通る、すこしも行當りやせぬ。彼がどちらぞに遠慮がないと、船も橋も打碎いて仕まはにやならぬ、結構な教じやぞえ。家内も互に避合さへすりや小ごとは出來ぬ、にこ〳〵して今日を暮すことじや、喧嘩は節季の足にはならぬ、互に些づつ遠慮仕合うて家内が治る、他人とは違うて生れぬ先からの近附じや、取わけ念頃に仕合ねばならぬことを、惡うすると親子行當りたり、兄弟行當りたり、夫婦行當りたり、不遠慮なことじや、行當る度毎に損の行くことじや、德のつかぬ仕出じや。

船と水と中好くてこそ世を渡れ心のあらき浪風ぞ憂

碇をば沈むる時は世の海の浪風とても獸はざりけり

是は船の碇なれど、心の碇を沈むるは、我無しにさへなると、何れ程浪風が荒うても、怪我する氣遣氣がない。山川の筏舟、吉野川でも加茂川でも、あるひは高瀨舟でも、向の岩に當らぬ先、ちやつと强梁支ふじや、岩角に當れば船が碎ける故、突張する、此突張が互の愼じや。「全體貴樣の仕樣が惡い故、物ごとが此樣になつた」と言ふ、向に岩角のあるのじやぞえ。其時ちやつと突張支ふじや。「成程是は我が了簡違じや、堪忍して下れ」と突張支ふのじや。夫を、「己が仕樣が惡いとは何處が惡い、言うて見や」と突張無しに岩角へ、くわちんと打當て微塵にする、可惜事じや。何んでも頭ぴつしやりと打つて見にぬ合點せぬ、危いものじや。京登の夜船に諸國の人の乘合、口々に、いろ〳〵さまぐ〳〵珍しい話する、其中に一人何にも言はず、折々に、「大

きな仕合、人ならこそ」といはるゝ。ソコデ外の衆中が、「お前は何にも言はず、折々人ならこそ大きな仕合と言うてござるが、何のことでござります。」「さればサア此乘合の衆中は、諸國の寄合、これが犬なら嚙合うて大體喧しいことじやあるまい、人ならこそ大きな仕合でございます」と言うた。是が可笑い話じやけれど、面白いことじや。或は船中で腹痛か癪氣で難儀する人があると、知りもせぬ人でも、藥よ水よと世話をやき、深切に介抱し、よそでは我がない故みんごと勤めて居る。兎角内では我が出來る故勤り悪い。親子の間もけん〳〵兄弟夫婦の間も嚙合する、あんまり心安い故、無禮講か無禮比か、煙草盆も灰だらけでは人中へ出されぬに、あられもないことを、出途へ出して恥かく、氣の毒なものじや。一樹の蔭一河の流、袖の振合も他生の緣、暗で行當つたも、尙因緣が深いといふ。それに親となり、子となり、兄弟となり、夫婦となる、大體の因緣じやない、それを何とも思はず嚙合するとは、どうしたものじや。或は一家と成り、朋友となり、師匠となり、弟子となり、主人となり、家來となり、僅な事から言ひ上り、中悪うして暮すとは、大體損なことじやないか、同じ時節に生れ合した甲斐もないことじや。皆我を立つる故、無益なことに骨折にやならぬ。凡てものの爭と言ふ物は、ないことから起るものじや。

近頃ある肴屋に内外の衆が寄合うて、芝居咄に瘋がつき、「どれ〳〵の役者は上手じや能する、其時の衣裳はなに〳〵であつた。」「イヤ空色であつた。」「イヤ萌黃であつた」と、内の男衆と御家樣とが、何の役に立ぬ事の競合、萌黃じやイヤ空色じやと、根强う互に爭ふ、傍から挨拶しても聞入れぬ。御家樣が腹立てて、煙管打附けるやら、男衆は打かぎをほり附けるやら、互にいひあひたゝきあひ、のちには側にある出刃庖丁を投附ける。此方も打かぎを頭へ打込み、兩力血塗、とう〳〵町内大騒動となり、御檢使に御叱受け、疵養生の上、五十日の御預で、事相濟んで兩方ながら目が覺めて、「さて〳〵理由もない事じや、どうも町内の衆に顏が逢されぬ」と言うて、引込んでござつた。なんとマアとつけもない事が出來るものじや。錢銀入れて難儀して、其上に疵負うて、人に笑はれ、痛いめするとは、餘辛抱强い我の立樣じや、皆御腹が善いからじや。男ならばのら、女ならば淫奔者、我手に身體の直打下げて廻るのじや。全體に此體の直打を知らぬ故、親の事や主人の事は、何とも思はぬ筈じや。皆結構な極樂の舟に乘つて居ながら、錢の出る地獄の船に乘換るとは、さりとては殘念なことじや。神道では天の浮橋と言うて、三千世界自由自在に、往來の出來る道があるのに、行かれもせぬ崖道へ行て怪我するとは、外道聰明にして智慧なし、脇道を稼ぐ皆外道の衆類じや。

松翁道話三編　卷之下

見ることの欲と愚癡とに嚙合うてけん〳〵するは犬の御仲間

町内の尨犬、能う肥えて逞しいものじや。一町内の犬の御器を我ものにして、外の犬が、若し御器の側へ寄ると、直に嚙伏せる、一町中銀で仕切つて、外の者には指も指させぬ位じや。同じ町内で、病惚けて痩こけた犬がある。是等は一向飢死しさうなものじや、けれど其尨犬が東を吟味して居る間に、西の方で口過し、西を歩行いて居る内に、東の方でひらひ喰し、何うやらかうやら、同様に一生を暮して居る者じや。それ〴〵に外の犬もみんごと口過して居る。鬼も寐る間とやら言うて、寐てゐる間は鬼も休じや。其尨犬が、町内銀で仕切つて辭儀させて歩行いたけれど、何様したものやら、後には又辭儀して廻りをつた、どうでも我獨して、何もかも掻きたくる様にして見たけれど、造用まけにくたぶれたと見える。じやによつて餘り我ひとり掻きたくる様にするは損と見えますぞえ。皆濡手で粟攫むことを樂んで居るけれど、折角攫んだ粟も手が乾上ると、指の股からばら〳〵と脱けて仕まふ。夫も知らずに手斗握つて居る故、算用が違うて來る。凡千貫目程の金持じやと思へば、亦千貫目程も借錢がある、引殘りて手斗握つて居る、あけて見れば、からつぽ、何時の間に脱けたぞいな。犬が屎こいた跡へ、後足でちよい〳〵〳〵と土をかける様なことするは我も知らず、不淨を隱す程のことは天性と生附いて居る。けれど土もない所でからつぽを足ばつかりで、ちよい〳〵〳〵遣つてゐる、屎はきよろりと脇の方に露れて有ることを知らぬ。夫程が畜生じやけれども、是に類した事が何程もある、鼻の先斗取繕うて、とつけもない所に恥掻いて置いて、人に蹈す事がある。小人に財寶が多いと、錢銀で人の口は覆ふけれど、大きな恥をきよろりと掻いて居ることを知なずに居る。どうでもこはい所があるやら、世間へ口塞に、仰山な年忌法事して見せたり、知識方に近附いたり、宮寺の世話やいたり、陰德ごかしに世間を附合ひ、見え斗の濳上を大きな事の様に思うて居るは、皆後足でちよい〳〵じや。

犬が犬の御器のもの喰うて腹が大きうなると、小使しかけて去にをる、能う氣を附けて御覽じませ、幼少から世話になつた、親方の錢銀を澤山さうに、詰らぬ事仕出し、親請人に難儀かけ、大恩の主人に損をかけ苦しめる、皆小便しかけて居るのじやぞえ。ぎやつと生れるから、今日迄親達の辛苦艱難どの様なもので有らうぞ、母親の爪の間に我子の屎の取れて有つたことはな

い、其樣な親切な世話人が三千世界に有るものか。父親の日は、涙で夜の日の合はぬ事は幾日ぞや。夫がちいと人らしうなつたと思へば、すねぬ隱したり缺落したりして、親達をうろ〳〵さし、そりや御祈禱よ足留よと、彷徨してござる御達を、我方人拵へて、搖りこかして仕まふとは、餘どうよくじや。是は一向親の頭へ屎をたれかけると言ふものじや。其樣なことして置いて、「私の運氣は善いか惡いか、御覽なさつて下さりませ。」善いか惡いか些と自身算用して見たが善い。其體を神佛へ持つて行て、「諸願成就南無天滿大自在天神、商買繁昌子孫長久、私は主人に小便仕かけた者、親の頭へ屎たれかけた者でござります。」其樣な不淨な者が神前を汚す故。駒犬が嚙附いたり、右大臣左大臣が矢を射かけたりなさると、忽ち氣違となるか、卽死するか、仕合善うて、濕ひぜん、或はかんそ、横根、骨うづき、鼻がころり、亦は妙見山へこもるか、或はたじま龍神四國八十八ヶ所、仕まひは右や左の御長者樣と、直說法して廻るのじや。是が皆堪忍を能うせずに、我儘の鬼を重寶して育て上つたものじや。

門を「鬼賣う〳〵」と言うて歩く、「ハテ珍らしいものを賣る、何樣物じや見せさつしやれ」と、惣々が集りかゝつて、我一に見樣とする。「ソレ御覽じませ」荷の覆をとる。「ソリヤ」と言うて逃る者やら、のぞく者やら、大噪じや。中にも落附いた人が、「其樣に喧しう言はしやんな、マア篤と見たかよい、扨々お恐ろしいものじや、嚙みやせぬかえ。」「イエ〳〵、滅多に嚙むものじやござりませぬ。」「シテ是は何ぞになるものか。」「なる段ではござりませぬ、人間の百人前を働きます。」「夫は調法なものじや、直は何ほどするものじや。」「ハイ代金千兩。」「ヤアそれは滅相に高いものじや」と言うた斗誰も直の附けてがない。その中に欲深い人がある。「私は造酒屋じやが、藏の人から臼屋から、庭廻家内かけておよそ百人斗じやが、いよ〳〵百人前の働が出來るなら買ひませうが、違はないかや。」「何の嘘なこと申しませう、其代言うて置かにやならぬ事がある。此鬼を御遣ひなさるに大分工合の有ることじや、何でも其百人前の用向を先ぐりに前廣に言附て置かにやならぬ。些の間でも遊すが最期、忽惡さをしをる、是を無間の業と言うて少しも遊すことならぬ、これさへ心得てござれば、屹度百人前働きます。」「そんなら買ひませう」と直に代金千兩渡し、さて家内の者殘らず隙出し、鬼一疋に用向を云附ける。「先づ明日の用事が、かやう〳〵〳〵」といひ附おく。扨翌朝夜の八つ時分から起きて、甑の下を焚き、藏へ這入つて大柿の上で諸味をかき、七つ時分になると水を汲み米をあらひ、夜の明方より五十程の碓臼が一時にぐわた〳〵〳〵と踏む、糠を篩ふかと思へば、甑を取つて藏へ運び、莚へ廣げ室へ入れて麴にする、其間に晝飯を仕廻ひ、厨する、扨酒を樽詰して荷物を作り印をする、燒印押す、

米屋が來ると相手に成つて直をする、船積する、帳合する、其の片手に風呂を仕掛け、火は手のもの故、直に燃ゆる。何でもたつた一人して、ばた〳〵と風の吹く如くに働く有樣、旦那殿見て膽を潰し、「扨々千兩は安いものじや、百人前の造用引けば、半年で千兩は取かへす、何樣にしても一年に二千兩宛德用がある、十年で二萬兩、二十年で四萬兩、五十年で十萬兩、百年で一萬二千貫目の銀じや。夫では銀の置所がない」と、屈託する位じや。「扨明日は御客がある、其用意はかやう〳〵〳〵」と言附ける。夫を聞くと商賣片手に座敷掃除、玄關、或は式臺、かこひ、みづ屋、掃廻り、飛石、盛砂、切水まで心をつけて清潔なことじや、扨御客が御入りなさると三人前でも五人前でも言附けた通の料理、鹽梅善うして出すに少しも滯がない、ソコデ旦那殿現ぬかして、「コリヤ鬼よ〳〵」と言うて、何もかも鬼に任せ切つてござる。其後旦那殿、振舞に行き酒に醉うて遲う戻り、明日の用を言附けること忘れて、夫なりにねて、しかも朝寐しられた。扨鬼が朝おきて何にも用がない、サア無間の業じや。まづ大釜に湯を沸し惡さ斗してゐる所へ、御家樣が起きて來て、「鬼何して居る」と尋ねれば、直に御家樣を引つ捕へ、熱湯の釜へ投込んで仕まうた。あとからぼんちが起きて來たを、また釜の中へ投込んで仕まうた、能う煮えた所を引上て、醬油かけて喰うてゐる。さて旦那殿じや、四つ時分にふつと目を明き、南無三寶、夕寐際に今日の用を鬼に言附ける事を忘れて寐たが、何ぞ惡さをせずばよいがと、思ひ〳〵起きし邊を見廻し、女房も居ず子供も見えぬ、夫から庭へ下り、甑のもとへ行て見れば、鬼か火を焚き〳〵何やら喰うて居る。「ヤイ鬼よ、かゝや坊は何所にゐるぞ。」「今喰うてゐる。」ヤアと驚く旦那をまた引つ摑んで、釜の中へほいと投込み、また引上げて醬油かけてしてやる、遂々皆食ひ盡して仕まうたと言ふことじや。何と恐しい怖いものな。是を能う考へて御覽じませ、欲に目がくれて家を潰し身を失ふは、皆鬼を遣ふ故じやぞえ。鬼とはなにぞ、我儘にして堪忍を能うせぬ人の事じや。盜人と言ふと、鬼のこと、此盜人は我物と人の物を取違へて、人の物を我物の樣に思うて居る。又此體も能う吟味して御覽じませ、我物でも無い物を、夫を我物にして我儘して居る。秦始皇帝、相模入道、淀屋の辰五郎、皆腹の中の鬼が重寶して、終には醬油かけて食はれて仕まうた。佛樣の六千餘卷も腹の中の鬼の療治じや。儒道の禮儀三千、威儀三百も、神道の吐普加身依身多女はらひ給へ清め給へも、皆此鬼奴を降伏するのじや、此外總て一切經々一切の書物入用はない。大江山の酒呑童子、酒飯んで甘い物喰うて好い物好き、おれが〳〵〳〵というて、我を大きうして家内一ぱいになつて居る、人の手足を引ぬいて、かひなを附炙にしたり、太股を蒲鋒にして酒の肴にする、御先祖の汗油を何と

も思はず、してやつて居る。未だ其上に子孫の骨肉までも吸ひ寄せて喰うて仕まふ、恐しい者じや。

遙々と安達が原へ行かずとも心の内に鬼こもるなり

安達ヶ原の荒屋で、奥の一間を必ず見なと言うたけれど、覗いて見たれば、人の手足や人の死骸が山の如く積である、人に見せとむ無い筈じや。賣〻買〻高利を貪り、世界の咽〻して、人の手足を挽取り、藏を立てたり家買うたり、夫が出來ぬと高歩の銀借つて、銀持の樣な顔してゐる、指二本で家潰す工面じや、納戸の内がみせとむないはずじや。皆我が立てたい斗で、鬼を飼うて居るのじや。御先祖が何もかも、揃へて置かしやつた物を、一々微塵に打碎く、赤鬼は腹の中に籠つてはいぬか、御家樣が鬼になると、家内中が鬼になる。銀の角や鼈甲の角、御家樣の氣に入る女中があると、家内中に嚙り附く。げびつに錠をおろす樣になると一人も勤めゐる者はない、旦那殿が目が暗むと、下地から勤めて居る正直者が、一向阿房の樣に見ゆる、夫で新參の鬼手代が、何もかも引受て萬事萬端取捌く氣轉もの、旦那殿が思ふ通する故、家内の締括、此鬼手代が獨して勤める。

漢の王莽、平の清盛、借借屋貸して、母屋取られたのじや。腹の中の鬼手代一人の支配になると、終には旦那殿を釜の中へ投込んで、醤油かけて喰うて仕まふ。家内のこらず引浚へ、西の海へさらりこつかかう。田村の諸の、鈴鹿山の鬼神も、羅生門の鬼も常は何ともない、たゞの人じや。九鬼の八鬼の三鬼の五鬼のといふ所の名も、皆盗人の住んだ所じや。鬼といふも遠いことじやない、鼻の先に何程もある。親御樣が用を言附けると、顔脹す息子殿、母御樣がなんとぞ言はしやると、不返事な娘御、半分鬼になつてゐる、鬼賣らう〳〵といふのじや。奇麗な錦手の茶碗でも、ひゞきがあると鼻聲、びしや〳〵じや、晴な所へは用ひられぬ。直をまけて遣つても買手がない、此茶碗なんぼ穢い茶碗じやけれど、こん〳〵返事がよい、是に致しませう。「長吉こいよ。」「ハイ〳〵。」返事がよい。「いと樣御出で。」「マア待つてお呉れ。」鼻聲じや。ぼとほとは直打がない、皆鬼のなりかゝりじや。此前千三百五十兩で白狐を買うた人がある、其後八百兩で古狸買うた人がある。皆家つぶして跡かたもない樣になつた。又白狐が嫁にとつて家内が化され、旦那殿が其狐のいふ通をしてござる。江戸妻、ハイ〳〵、芝居行、ハイ〳〵、びろうどの帶、ハイ〳〵、何でもハイ〳〵〳〵、異見するものがあると暇を出し、出人差留め、商賣休んで、毎日々々飯事じや、我儘事して遊んで暮すのじや。

氣も知らで顔に化され嫁取りて跡で後悔すれどかへらず

此狐が化し居るのは、まづ紅白粉で年を化し、梅花丁子で髪を化し、かもじの、そへの、みの、もつそう、一の輪、二の輪、假わけ、前髪、あるひは鬢張、つとはり、突棒、差股、などと皆雇人で頭を化し、度々著換る衣裳の七化、正味の所は些斗で、みな雇人に化されて居る。御先祖が一文二文から組あげなされた汗油を、惜氣もなくづか〳〵使ひ減して樂としてゐる。團子と思ひて馬の屎を食ひ、小便を酒にして飲み、後には屎壺の中へ這入つて行水する、穢いことの有條、目が覺めては出來ぬ仕事じや。

一口に取つて嚙むのは目にみえず三味線かぢる鬼の恐し
酒酌んで三味線引いて氣を奪ひ人を取り食ふ鬼の多さよ
目には色耳は優しき三味の手に引かれて更に鬼と思はず

皆むかうは天命の職、分口過じや。其所へ我と言ふ體拵へて食はれに行く。後に家屋敷土藏まで醤油かけて、してやらるゝ。人を取り喰ふ鬼の多さよ。子供が、隱んぼするに、既う宜いと言ふと、鬼が捉へに來る。息子には嫁をとり、孫も出來た、商賣も次第に仕にせた、是から隱居する斗、銀の歩も一日に何程宛入つて來る、既う是で宜い、ヤレ嬉しやと言ふが最後、既う鬼が捉へる。孫が煩ふか、息子が錢を遣ふか、嫁が死ぬるか損をするか、家内に色々樣々の災が起つて來る。

既う宜いと思ふはすぐに地獄道鬼の來ぬ間に洗濯をせよ
洗濯とは欲心を改めるのじや。戰々兢々愼が大事、六根清淨、内外清淨、日々に新に洗濯するのじや。年越の晩に一年中積々し惡鬼惡魔を打出すのじや。

我と言ふ心の鬼が募りなばなにとて福はうちに居るべき
福は内と口には言へど心には鬼をだかへて豆はやすなり

腹の中には色々樣々の物を入れて、鬼奴が上下著て尤らしい顔して、福は内〳〵、大黑樣が怖がつて袋擔げて逃げて出やしやるも知らずに、大きな聲して福は内〳〵、福の神投出して仕まうて、アヽ是で氣が瀟洒とした、ヤレ〳〵嬉しやと、鬼は矢張だかへてゐる。

ために善いことといふ人はいやで毒をあてがふ人が好き
鬼は外〳〵へと打はらふ手のうちにこそ福はありけり
有がたき道にはやくもいりこなる(炒土鉢)無事で我慢な鬼を打出せ

是が年越の晩一限る事じやない、毎日毎晩我慢な鬼を打出すのじや。左樣無いと正月の元日から鬼賣う言うて歩行きをるぞ。蓮如上人の歌に、

我と言ふ古盗人にだまされて南無阿彌陀佛の寶取られた

虚空の會座を踏外しけり。南無阿彌陀佛が厭なら、地獄の釜へぼつたりこしたのじや。

兎にかくに我に借屋を貸す人はえては心の母屋取らるゝ

鬼めが醤油かけて皆喰うて仕まひをる。もとも子も無い樣にならにや目が醒ぬ。何方も御用心なさりませ、えては心の母屋取らるゝ。

松翁道話四編　卷之上

昔或國の御大名樣でござりましたが、其親殿樣道中にて歩に御歩行なさる時、空より松のちりの落るを、はなしいゝ中にて御とりなされたれば、附々の衆中、天晴殿樣の御手練の程恐入り奉る由、申上げらるれば、殿樣が、「否とよ怜などは、かく天下の御師範ともなるべき筈じや、手前共の及ばぬ所なり。第一斯樣の物の落ちる下などへは參らぬなり」と仰せられた。是を以て見れば手練功を積むといふは、天地と同一體の我無になるが、ものの奥儀を極むると言ふものじや。

徒然の六十九段に、「書寫の性空上人は法華讀誦の功積りて、六根淨にかなへる人なりける。旅のかり屋にいらせけるに、豆がらを焚きて豆を煮ける音の、つぶゝと鳴るを聞き給ひければ、疎からぬ己等しも、恨めしく我をば煮て、辛き目を見するものかなと言ひけり。焚かるゝ豆がらの、ばらゝとなる音は、我心からすることかは、燒かるゝは如何許堪へがたけれども、力なき事なり、斯くな怨み給ひそと聞えける。」如是物言ふこと、豆がらのみに限らず、風雨、霜雪、

砂石、草木の非情といへども、一切の法を說くと言ふことじや。

經云諸法從二本來常自寂滅相山河大地等本來寂滅心也萬法示レ形顯レ色是草木說法也見レ色知レ香悟是聽聞說法也口音之說者爲二下根一之說法也出レ音說文此是爲レ息小兒之啼也敢非爲二大人一之說法也凡眞說法者吾聽二草木之說法一草木聞二吾之說法一是如來知見覺者之前說法也

春來れば咲き散る花も說く法を聽かぬは人のある故ぞかし

春花の咲き散るも、人の生死去來も直に說法じや。それを得聽かぬは、我一人前の心なり、則人の出來たのじや。人の生ずるも死するも、四時行はるゝも、百物なるの中のものじや。六根淨とは、眼耳鼻舌身意の六根が、天の道具じやと言ふことが慥に知れたら、我分別拵へて交かへす事も入らぬ者じや。此又色々さまゞ〳〵分別の生ずるも、百物なるの中の物じやと合點がいたら、我一人前の私に引附ける事も無いことじや。此道理を會得すれば、六根悉く淸淨にして、兄弟喧嘩も入らず、親子喧嘩も入らず、疎からぬ己等しも怨しくも入らず、一家親類の喧嘩も世間の喧嘩も要らず、豆がらのばちゝ〳〵も、互に火花を散らす事もいらず、皆心安達からじや。其證據にや、一向知らぬ同士は喧嘩はせぬ、皆懇意の中にばちゝ〳〵言ふ。北齊の蘇瓚貫といふ人、淸河の守護となりし時、百姓の兄弟田地を爭ひ、數年の間落著せずに有つた、又願ひ出したれば、訴狀を見て、「兄弟と言ふものは、天地を尋ねても又となき物なり、至つて得難きは兄弟なるぞ。田地は其身の果報さへ有れば、如何程多く求む可きも自由じや。然るに今汝等兄弟、田地を爭ひ仇敵の如く中惡くなること、僻事にあらずや、縱令一方望の如く田地を得ると、天下に又と類なき、我兄弟の心に背き、是を得んこと本意なるべきや」とて、はらゝ〳〵と涙を流し示されければ、數百人の證人ども、尤なりと感に堪へ、一度に涙を流しければ、兄弟も互に悔み悲しみて、田地を讓り合ひて一家に立かへり、互に親み合うて暮したと言ふ事じや。一家と言ふは何間あつても一つ心故一家といふ、皆別家別心する故じや無い。

でゝ蟲のちつくり角を持つ故に早爭の端となりけり

兄弟が田を分取の爭はたわけものとや人の言ふらん

家を分けるも　金銀を分けるも同じ事じや。

兄弟のなかも互に敵となる欲はげしき劔なりけり

一家親類の間も、他人の中も欲は烈しき劔なりけり。一家の中に貧乏人が有ると、寄附けぬ樣

にする。稲の倒たのは、倒め稲とくゝり合して置くと、つい本の通に整然となる。是が何程株が分つて有つても、一家同士の助け合じや、田地から教へてござる。夫を御公儀へ持て出て御世話をかける。「隨分なる樣にして世話してとらせ。」「ハイ〳〵。」何でも天井へ出て恥かゝにや合點せぬ。大道で乞食の喧嘩、互に打つ擲いつする拍子に、面桶を打落し飯がこぼれた。其際に居た犬が尾を振て御辭儀なしにして遣つて居る。乞食は矢張摑合喧嘩して居る。互に飯から起つた喧嘩じやけれど、犬めが飯を喰て仕まうても構はず爭うて居る。何の喧嘩じや譯が知れぬ。皆名に迷ひ形に迷ふ故じや。人に譽られたい〳〵と思うて、精出して人に笑はれたり、謗られたりして居るのじや。皆犬に喰はれて仕まうた、辛度の仕損じや。悪人と聞いて腹立てるは、悪人と言ふ聲に耳のはえた事知らずに、此方が悪人に成つて見せる。どうでも腹の中に悪人持合して居る故、書出の來た樣なものじや、覺がある故拂はにやならぬ、覺がなけりや何樣に言うても拂やせぬ。「外を御吟味なされませ、何とも無いわい衡の無駄目じや。」我無が正直の體、五匁は五匁と知り三匁は三匁と知る、衡は何時でも我なしの無駄目、親なれば親の樣、主人なれば主人の樣、夫なれば夫、女房は女房、我子は我子、盗人は盗人、正直者は正直者、親の死んだ時の心持、他人の死んだ時の心持、恥かいた時の心持、茶碗割つた位の心持、重い輕い

は此方の智恵才覺いらず、其程々に能う分つてある。如何なるか是佛、麻三斤、三斤は三斤、四斤は四斤、山は是山、水は是水、櫻は櫻、梅は梅、柳は緣に花は紅、人に問ふに及ばぬ事じや。則今日が我業の秤、分別の掛目如何程あるや、憎いと知り、可愛と知る、心に思ふ程の掛目、我無しの無駄目さへ狂はにや、長崎へ行ても江戸へ行ても通用する。とかく手細工の秤は間に合はぬ。丁度あると思うても欠替を言うて來る。「コリアさんじませぬ、此方の秤に狂が有る」と、何遍も〳〵尻が來る、天地の間に通用が出來ぬ。夫を知りつゝ善物著て、ひけらかしたり、ないもせぬ金をある樣な顏して、贅の八百言うたりして居るは、皆不足錢や欠拂うて居るのじや。尻が來にやならぬ筈じや。

さる所の女中が禮に御出なさるに、一日五匁で衣裳を損料がりして御出なされた。その後禮に御いでなさつた先から人が來て、「先日の御小袖の模樣甚だ美事なものでござります。娘が小袖に染めさしたう存じます。何卒四五日御貸なされて下さりませ」と言うて來た。サア難儀じや、何樣も仕樣がない、皆虚言吐いた報じや。されども何樣やら斯うやら、また損料で借出して遣つた。先も優長な、四五日しても戻さぬ。催促にや遣られず、一日が五匁宛じや、氣が堪るものじやない。大方十五日程してから戻した、損料斗が七十五匁、其上に心遣して損斗して居るの

じや。歩の出る銀借りて、金持の樣な顏して暮すと同樣なもので、身の痛になる事知らぬ。先今日が損料暮し、第一此身が假物、其損料物で奢つたり贅言うたり、我儘する故、仕まひは皆我かぶりとなる、六根一つ〳〵吟味逢へと、借物と、雇人との、言分して、引のこりて咎斗が、おれがのじや〳〵言うて居る。借錢してでも好物著て、世間を流に歩行く、裸體に成つても我が立てたいとは、一家親類と相撲取るのじや。

何所ぞでは怪我の基と知るならば相撲は取らぬが勝でこそあれ

七つ森織右衛門といふ角力取の所へ、「弟子にして下され」と賴む人が有つたれば、「其方には親が有るか」「ハイござります。」「親が有るなら相撲取はせめが可い」と言うた事がある。夫に親持つて、商賣抱へて、角力取歩くと言ふ事が有るものか、身上比、衣裳比、奢比、自慢比、ひけらかし、負惜、或は聟取嫁取の日出たい續、是も斯しては置かれぬ、彼も彼では濟ぬと言ふと、何所からも彼所からも御日出たい〳〵と言うて、滅多無上に突飛す、どつこい此所らが一生懸命の所じやと答へて跳返す。其拍子に思はず知らず氣が高ぶり、商賣（勝手）も構はず、普請の物好、一家親類互に負けまいと、進物贈答氣を張合ひ、御振舞の料理の獻立には、互に膽を潰合ひ、後には家の潰れる事も構はず、衣裳比、道具比、相撲が段々はづんで來る。左樣なると、一家中の

温和しい親父分の衆迄か、飛入に出る樣に成つて、惣々が裸になり、我一に取う〳〵とする、遂々大相撲になる。どこぞでは怪我の基じや。相撲は取らぬが勝でこそあれ、身代有丈商賣仕にせて、花に下さる親御樣をほつて置いて、他所へ相撲取あるくと言ふ樣な、戯いもない事が有るものか。何程負を惜んでも、恥はよそでかいて居る、相撲取の勝つた話斗、鼻の先の女房子へは何時でも、勝つた話、我負たのはかつた人が世間でいうて居る。コリヤ相撲取の事じやないぞえ。銘銘共の直打のない話じや。此扇の損じたの代銀拾匁、誰も買人がない、代呂物に直打がないと世界中が合點せぬ。扇も厭がつて居る。夫を拾匁に賣る積じやけれど買人がない。身の分限を知らねばならぬ。傘も日笠も時を知らねばならぬ。雨が降れば日傘が泣く、日和なれば唐傘が歎く、足納する術を知らぬ故じや。身代が惡うなる程氣が高ぶりて、兎角珍しい物が持てみたい。方々で身上潰して來た道具集めて、掘出じや〳〵と言うて悅ぶ内に、終には我身上掘込んで仕まうたら、上る事がならぬ、怖いものじや。水は方圓の器物に隨ふ、友達は吟味せにやならぬ。銀の道具御法度じや。是は京の事であつたが、矢張銀の煙管もちあるく人があつた。役人衆に見咎められ、難儀しながら、いひ譯してござる。「私は御堂上方へ御出入仕ります。此煙管はさる御歴々樣より御拜領仕りましたが、御名は恐多うて申上憎うござります。」ソコデ御役人

が「其御歴々へ上る時斗持ちて、外の所ではもつ事無用」と仰せられた。夫で首尾能う言分は濟んだけれども、こはい事じや、其樣にいひぬけ所を拵へて置いてなりとも、贅がこきたいとはさりとは因果なことじや。御役人も亦利功な、「其煙管貰うた御方の所へ出入する時ばかり持つて、外の所へはもつ事ならぬ。」御慈悲な事じや。御上からは何卒筵の衣服著せまいとて御世話なさるに、夫を助かろまい〳〵として居る。折角極樂へ投出しても、下地の三途八難の臭氣がぬけずにある故、またしても〳〵地獄へかけこまうとする。髏屋の籠の内じや、足おとがすると我一に下にならう〳〵とかけこむ樣なものじや。「髏と言ふ物は、執心の深いものじや。必上りますなえ」と言へば、さる御方が、「イエ〳〵私は其執心ぐるめに下さります故、一つも構やいたしませぬ」と言うてござる。左樣言ふ御方に出合うては何うもならぬ。何時までも髏の味を得忘れぬ御方じや。髏よりは、其執心が深い、皆大概執心ぐるめに喰うて居るのじや。「此方は盗はせず、間男はせず、人は殺さず火はつけず、何にも悪事した覺えはない。本心知らいでも大事ない、必此方の子供に勸めてなど下さりますな。」皆執心ぐるめに喰うて居るのじや。乞食の子供が鴻池の門で泣いた。其乞食嬶が「其樣に泣きをつたら爰な子にするぞ」と言へば、子奴が、「堪忍じや〳〵」と言うて逃げて去んだ。住なれた所がはなれにくい。菩薩にも法愛と

いうて、一位から二位へ上るに、一位に愛著して二位へ上り悪い。況や凡夫唯よい物に執著し、欲い惜い斗を得忘れぬ、執心ぐるめに喰うて居るのじや。

何國にも心とまらばすみかへよ存命ぬればもとの故里

欲い、惜い、悪い、可愛と思うて居る内から、消えて仕まふ。朝から晩まで一つも止る物でもないものに、取附いて惱み苦しむ。うから〳〵と今日を過し、闇々と地獄の釜こけ、可惜事じや。今喫んだ煙草の煙何方へ行たぞ。

立上る富士の煙の空に消て行方も知らぬ我おもひかな

此煙草は呑が宜いの悪臭いのと、色々樣々の分別の、行方も知らぬ我思かな。煙草呑まぬ先に煙は何所に有つたぞ。

美しき刻煙草のいろち香も息ひきとれば灰とこそなれ

直に煙草の火葬、一息々々灰となる身を知らぬ。恵心僧都の歌に、

後世と聞けば遠に似れども知ずや今日も其日なるらん

後の世と、今斯う物言うて居る。此言葉の終つた所が後の世、悪い事すれば後の世が悪い、善事すれば後の世が心よい、形の影に應ずるごとし。報とは物買うて書出の來たやうなもの、覺

が有れば拂はにやならぬ。安い物で堪忍すれば節季が心安い、高い物買へば節季に苦しむ。よい物程直が高い、よい物は持たぬがよいと、代物から辭儀してござるを、此方から辭儀なしに無理にする故、跡で難儀せにやならぬ。知れた通で何にも六づかしい事ではない。

漆に負たのは生の蟹を擦りつぶして附ければ直る、膳椀の損じたのは塗師屋へ遣ると直る、饑いのは飯を喰ふと直る、腹の痛むに黑丸子呑めば治る、幽靈に取つかれたるには、こちの體を消して仕まへば取つく事ならぬ、我なしになると直る、心の歪たるは正直の教を聞くと直る、朝から晩までなほし物皆成佛の直道じや。日々新而又日々新なり、六根清淨內外清淨が此身の洗濯。

只濯げ心の垢の落ちぬ間はのりだちのせぬものにぞ有りける

すつぱりと垢の落ちたは心よいものじや。夫を洗濯せずに糊かふ故、のり立がせぬ。二季の店おろしが家の洗濯、借錢の有る上に歩の出る銀借りて、世間を取繕うて居るのは、家潰す御祈禱して居る樣なものじや。白粉箱の上包、上皮ばつかり結構にして、色々樣々の模樣を拵へ、金銀で飾立て、中の白粉は些ばかり、中の代物が悪い程外側を張込む、皆眞實のない證據、嘘の看板僞なし、五百目の銀は反古で包んであるけれど、何でも五百目で通用する。十日戎の五百目では、何うも受取が書れぬ。銘々共も受取の書かれぬ株じやないか知らぬ。人は人じやが、どうも合點の行かぬ人じや。人にしては些と受取の書けぬ所がある、受取の書けぬはどこらじやな。されば、「彼人も見かけは隨分能うござりますけれど、今一越物を打任して賴まれませぬ。心の底に恐しい所のある人でござります、じやによつて滅多に肌がゆるされぬ」「ハテナ夫では中が靡糠斗じやな。」「ハイマア其樣な物でござります。」可惜事じや。

如何にとも仕樣の無いは佛のない堂へ參つた心地こそすれ

結構な堂塔を建てても、肝心の本像の無いは、埒も無い者じや。近所から物置にしてがらくた斗が入れてある。其外一家親類知音近附迄のがらくた物を、皆腹の中へ取込んで、日がな一日ハアスウ〳〵言うて居るのじや。

松翁道話四編　卷之中

昔の祖師方は、破衣に草鞋掛で、得意を御廣めなさつた。金紋の先道具網代の乘物に用はない。大僧正の紫衣のと言ふに一向念もないことじや。たゞ心の垢の洗濯斗、日々新より外にない、一切衆生の迷の垢を洗うて遣りたい斗で、大きな灰汁桶をこしらへて、灰汁を垂し、其灰汁で垢を洗ふのじや。汚れた物を初手からよい水で洗うては、垢が合點せぬ故、落難い。垢は灰汁で洗ふが可い。根が泥じやによつて、泥水の清んだので、揉んだり振つたりちやつぷ〳〵する間に、心安う相談が出來て瀟洒垢が落ちる。能うしたものじや。唐更紗を此方の水で洗うてはけぬ。此方の染物を田舍へ遣つて、田舍の水ではどの樣に洗うても剝げると言ふことはない。何でも其土地の物を、其土地の水で洗ひさへすりや心好う落ちる。同氣相求むる道理で、田舍で百姓一揆の起ると言ふも、同じ土地に出來る麥や米喰うて居る故、物ごと相談が一決すると動くと言ふ事がない。其段は大阪の京の江戸のといふ三都じや、取分大阪などで一揆の起る氣遣氣がない。物事相談して居る中から崩て仕まふ。其筈じや、諸國の麥や米喰うて居る故、物ごと一決すると言ふ事がない。其代に國々の眞似は何の樣なことでもするじや。是は色相の上の體のことなれど、心は三界唯一心、此心を知つて本來の清水で洗へば、何樣な垢もおちる。一切經、一切書物皆因緣因果善惡邪正の灰汁を垂したものじや。夫で洗ひさへすりや成佛するに違はない。佛も本は凡夫也、一旦は迷うちじや、其迷によつて迷を拔くのが成佛じや。孔子も、五十にして易を學べば大なる過はなかるまじと御悔みなされた。すりや皆垢によつて垢をお拔きなさつたに違はない。元來垢は身によつて生じたもの故、土氣でなければ落ちぬ。石川五右衛門も、垢さへ脫けたら孔子も釋迦も同じことじや。生れた時は無智の聖人と言うて、天を心として居る故、大體公なものじやない。御腹さへよいと、にこ〳〵〳〵笑うて一切萬物を心として足納しきつて居る。御辭儀せいと言ふと、何時でも御辭儀する。心に不足が有つては出來る仕事じやない。微塵も欲氣はない。盜人の子でも二つ三つ斗までは、持つて居る物をたい〳〵と言ふと直に放して吳れる、慈悲の丸無垢じや。それが大きうなると、たい〳〵處じやない、節季に書出遣つて、其上に催促しても、いや〳〵言うて放しやせぬ。段々垢の溜つたのじや。赤子の時は、手足も不自由なれば、口過に氣遣もなく、節季に屈託顏した赤子もない。夫が生長して、手足滿足に達者に成てから、せつきいやがり、口過し兼るは、何でも野らかぶしやう者

か、おごりものかと言ふ、天の心に穴明たものじや、夫から拔ける事を知らぬ。例ば穴の有る釣瓶で水を汲む樣なもので、精出して水を汲み上げても、半分ほど斗ない。夫で己が此樣に汗水になつて働いても、水が溜らぬと思うて居る。溜らぬ筈じや、底に穴がある。「如何樣此穴に氣が附かなんだ」と、穴を詰めて「よし〳〵是では氣遣ない」と言ふと、此度は水溜に穴が明いてある。何程汲んでも〳〵水が一ぱいにならぬ。「コリヤどうじや。」どうも仕樣がない、とんと此通じや。内を始末せいと言や外で奢る、外を始末せいと言や、世間の義理を缺いても内で奢る。矢張一升入る壺は八合じや、二割宛干減が行く、いつついけ一ぱいにならぬ算用じや。又衣食住に事足らぬ衆は、體を動さず、人斗遣うて、甘い物喰うて、客があると言うては酒を飲み、肴を食ひ、鮓を喰ひ、氣が盡たと言うては、菓子を食ひ、淋しと言うては羊羹をくひ、饅頭をくひ、鯉の吸物じやの鍋燒じやの鰌じるの鼈汁のと、へらへいとに取込んで、根つから腹の干上る間がない。夫が脾胃に食滯れて心惡いのを、イヤ癪氣じやの氣鬱じやのと、鍼をしたり療治したり藥を飲んだりしても、根つから利目がない。取こみ過して鹽梅の惡いと言ふことを知らずに、私が樣な病身者は無いと、御祈禱やら立願やら、上たり下したり、水に附けたり火に炙つたり、體を長才坊にする。なる程壽命が無い筈じや。食すごすと言ふ穴が詰めてないのじや。二日醉で心惡いと言ふは、取込過して、目安附けられた樣な者じや。上たり下つたりするは、取返さるゝのじや。皆罰の當つたのじや。是ほど世界に、饑い者や難儀する者があるのに、如何になればとて、好い加減に食ひ居つたがよい。身體の損ねるも構はぬ、ごくだうが何所に有るものでと、天道樣から引つたくつ御仕廻なさるのじや。それも知らずに、ま一ぱい罰當らしやれ〳〵と言うて勸めて居る。勿體ないことじや。

人の身も皆灰汁桶と同じこと上から入れた程にたれるぞ

善事でも惡事でも、外から入れたほど斗出ぬ、灰汁桶と同じことじや。子ども衆なぞは、取分腹のなかの通を言うたり仕たりして居るものじや。これじやによつて、善事は仕込まにやならぬ。是で腹の中の淸淨なる事を御考へなさりませ。根つから覺の無い事は言やせぬ、覺えた事はか言ふ事ならぬ。夜分門あるく衆でも、考へて御覽じませ。腹の中のある物だけ諳ひうたうて行くか、淨瑠璃語るか物まねするか、腹の大きい衆は音頭取てじだんだ踏んで行くのがある、何にも知らぬは念佛を申し腹の中に覺えた通り白狀して行く。如才の無いものじや。伊勢の相の山では、此方の姿の通を向から講釋して下さる、「縞さん紺さん中のりさん、絞の浴衣のふり袖さん」絞の浴衣を紺さんとは言はぬ。隱して隱れぬ此方の直打の通り顯はして居る故、世間

からも譽めて下さる、「横著我儘意地悪様、横柄自墮落恥搔さん、無理いひ自慢の口松さん、一文惜の百知らずさん。」心の通を姿に顯はして、正身、正體の通の說法をして居る。

或所の隱居が娘を見に行きて、煙草盆に火を入れさして見て、善い悪いを知り、直に嫁に貰ふ相談究めて戻つた人がある。道で仲人が、「見ると直に貰ふ約束なされたは、何うしたもの」と尋ぬれば、「さればさ、火入に火を入れるに、灰を和け、火の消えぬ様埋んで生けて持つて來た。彼で世帶持の善いことが知れてある。何卒貰うて下され。心の通が形に顯はれて有るものじや」と言うてござる、一切此通りじや。上り口にはき物が二間程またげてある、自墮落者と言ふ事を履物が說法して居る。朝から晚まで一切經じや。煙草飲んだあとの吸殼を火鉢の脇や、火入でくわちくと叩く人があるものじや、是道樂者と言ふ看板。一切萬物を勞る心の無いは、人遣の荒いと言ふ證據を顯して居る。慈悲心の有る者は、一切萬物を勞つて、灰吹を叩くさへ手で叩く様にする。萬事萬端皆志の通を勤め行うて居る。現銀懸直無しの正札附じや。

歌をうたうて心が知れる聲と節とでなほ知れる

隱してもかくされぬ。各志をあらはして談義說法の場でいかきをまはす、皆人々の志、毎日毎日の志、親孝行も志、不忠不孝も志、商賣繁昌も志、商不情も志、正直も志、嘘も志、

冥加錢々々々、松木も梅木も、西瓜、眞桑も、柿も蜜柑も、それぞれの味持つて、各志を陳べてござる。旦那どのが羽織一つ始末して家内のものへ志、肴の味いところ旦那が喰つて骨の所を家内へ志、人に憎まるゝも志、家を潰すも志、骸潰すも志、大阪に三百貫目、おやまに寄進して、仕まひに紙屑ひろひに歩いた人が有る、是も志。又或所の息子殿、拾五貫目の茶屋拂じや、親御様のいひ附、節句後に拂方よびに遣り、息子殿一人して、藏から錢を千五百貫運ばすのじや。息子殿中程でほつと疲ぶれ、一向足腰は立たぬ、「誰ぞ手傳うて呉れんかい。」親御様が「否々ならんぞ〳〵、其方一人して遣うた銀じやないかい、誰も手傳ふ事はならぬぞ。」拂仕廻ふとすぐに勘當じや。親御は慈悲の志、自身でに拵へた咎は、外の人が何程氣の毒に思うても、其難儀手傳うて遣ることはならぬ。報と言うは書出の來た様なもので、自身が拂ふよりほかに拂人はない、拂が濟むとすぐに地獄へ志、能うしたものじや。皆我手に拵へて置いたことは忘れて、何ぞ間違が出來ると、私が様な不仕合なものはない、私が様な運の悪い者はないと、歎いたり悔んだり自業自得も志、錢銀を麁末にまき散した衆が、溝の中や、水道の中で釘ひらひしてござる、皆暗へ志、佛壇の御燈火は早う消ゆる、油を些と志、我慰には夜を深し、油を夥多志、彼岸の志、こんにやく三丁も志、油揚五つも志、蠟燭五丁も志、三

匁掛の蠟燭五匁掛の蠟燭、明が餘程違ふ、夫から、十匁掛二十目掛三十目掛五十目掛、これが明い〳〵、百目掛五百目掛一貫目掛より二貫目掛は明が大きい、十貫目掛から五十貫目掛百貫目掛、二百貫目掛、千貫目掛より二千貫目掛が明が大きい、是があかい〳〵と思ふけれど、消えた跡の暗は三匁掛の消えた後も、千貫目掛の消えた後も、暗に違はない。千貫目掛の消えた後じやとて、暗が大きうもなし、三匁掛の消えた跡じやとて、暗が小いこともない。夫を暗に塀切して、是程は己が暗じや〳〵と、死だ跡まで暗の爭、なんの役に立たぬことじや。暗から暗に迷ふのじや。

暗きより暗き道にぞ入りぬべしそのくら闇にまよふ暗闇

明へは出されぬことをたくみけりたゞ暗がりに心置く故

唯暗に心置く故、親と妾と取ちがへたり、御先祖より預の身體と我一人前の欲と取違へる、皆暗に心置く故、先ぐり後から仕直せにやならぬ。天地へ言別に暇が要る。大體費な事じやない。此暗に居る者は、明い所が能う見ゆるものじや、夫で小人は人の非斗を見て、何のかの何のかの小言いふ。又明い所からは暗は見悪い、さるに依て君子は人の非を咎めず、人の能こと斗見える、悪い事を知らぬ故じや。兩替屋の丁稚、十一二から毎日々々よい銀斗、あれこれ取換て近附にする、悪い銀を一向しらぬ。夫で悪い銀を見ると直に撥除ける。本心を知るも其樣なもので、本體の善いことを知る故、少でも悪いことは合點せず、撥除ける樣になる。どなたも御知りなさつて御覽じませ、甚利功な者じや。本心を知るは別にむつかしいことは要らぬ、たゞ我心の無心無念なることを能う合點するのじや。夫で山ほど迷うてハアスウ〳〵言うても、本體の思慮分別のないことを知る故、少しも分別に迷ふと言ふことがない。欲どしい氣からは、何やら便ない樣なものなれど、無心無念が本體じやによつて、外にどうも仕樣はない。橋のうへで放し龜が竹の筒の上に乘つて、からつぽばつかり搔いて居る。けれど龜は矢張水の中で泳いでゐる心持じや、夫でも虛空のからつぽ搔いて居るに違はない、精出して同じことをして居るのじや。此樣に言ふと、斷無じやの、外道じやのと言うて、恐る人もあれど、此方では見るも聞くも一つ〳〵證據のある事じやにによつて、少しも氣遣なことはない。甚埒の明いたものでござります。其かはり餘結構過ぎるもの故、悪うすると中る事がある。在所の者に鯛喰すと、腹痛起す樣なもので、食附けぬ珍しいもの喰すと、中ることがある。何程も中つたのがある。半分は本心で半分は私心、難儀なものじや。半分山の芋で半分鰻でぬら〳〵して居るがあるけれど、是も氣遣なことはない、薯預汁にならにや蒲燒にして喰ふによつて、どちらで

も大事はない。二百貫目三百貫目出して、堂塔宮寺建立してさへ、小善根福德の因緣と言うてあるじやないか。夫から見れば、此本心を知るは、生きた佛を建立するのじや、壽命は限なし、無量壽佛と言ふ、成らうことなら少々出してなりとも、知らせたいものじや。

或所の旦那殿が、本心を知らしやつて、「家内の者へ金壹兩宛遣らう程に、知つて吳いと」御賴じや。夫で家内の者が我一に知つて見たれば、我はない、我が無ければ物を貪る心もない、「扨扨有難いこと」と言うて、その金を一人も取る者がなかつたと言ふことじや、まあ夫程のことじや。欲しい惜しい憎い可愛いも我が有ればこそ出來たものじや、我が無けりやあた面倒な、何の爲に其樣なものを拵へて苦まんや。此處を能う合點して御覽じませ。本心を知ると壽命は限なし、天地萬物が心なる故、何所へ行て自慢するといふ世話も要らず、憎いの可愛いのと言ふは、右の手と左の手と引張合して居る樣なもので、能算用して見れば、我唯一人狂言して居る樣なものじや、大體氣辛度なものじやない。其樣な阿はうらしいことに暇費して居る間はない。又一切萬物が我心なら何にも不足はない。其代世界の難儀は我難儀、世界の悅は我悅、此身體が直に天の御心なる故、天地の間の塵一本藁一筋も、無益に者を費すは、則天地の功德を破り損ふと言ふ者じや、いはんや人に於てをやじや。むかし最明寺時賴公は、浮世の人の情の無いは、皆我情の行屆かぬのじやと言うて、世を憐みて諸國を御廻りなされたと言ふことじや、誠に親が子を憐みてうろ〳〵なされた樣なものじや。是何の爲ぞ、皆天地への御孝行じや。天の心で生れた人が、世を勞り世を助くる心のないは、直に天地を盗んで居ると言ふものじや。昔軍の有つたも、皆義の爲孝の爲の戰爭じや。其義も孝も何方へ立つる義ぞ、皆天道へ立つる義じや。夫を我身の爲や我威勢の爲に立てた衆は、皆滅亡て仕まうたじやないか。是で我の甲斐のないことを、能う御明めなされませ。又何樣にしても我のないが元直じや。其無いもせぬ我を拵へて、春はどうせう秋はどうせう、子どもの行方がどうならう、何を言ふも金のことじや、金が無うてはどうもならぬ。ハアスウ〳〵〳〵と悶躁苦む辛度の仕損、放し龜か竹の筒の上でからつぽ斗搔いて居るのじや。終日歩而不レ歩一歩。日々食而不レ食一粒。皆此方は不調法、じやによつて本心知らにやならぬ。本心知つて御覽じませ、根つから其樣なものはない、實相無漏の大海で、汗手拭洗ふ樣なものじや。何にも思案分別は要らぬ、世界中が我心じやによつて、生れて居るとも思はず、死んで居るとも思はず。盤桂和尙、

過去も未來も唯今斗心止めずば浮世もあらじ

只目前の唯今斗此今の外に何があるぞ。此只今斗になつて、御覽じませ。によつき〳〵物